

あり涙もあらう。ジュウにも悪い所はあるが、又氣の毒な人種ではないかと、茲に普遍的同情が加はつて、シャイロックをして、當時の人は笑つてすませても、今日では涙を促させるほどの作となつたのである。當時の人の笑柄とするのが常であつた猶太人を、斯く同情的に、血の出るやうに書かれた事は、それこそ土を變じて金とするもの。

一八一四年、ロンドン切つての大劇場 Drury Lane 座は百三十九日といふ長い間の不入の爲め、もう破産の外見込はない。百方策を施しても人氣が引立たない。そこへ田舎廻りの一役者が一週八ポンドといふ法外に安い値で雇はれ度いと申込んだ。どうせ駄目であらうが、八ポンドは安い、まあやらせて見ろ、と云ふ事になつた。で劇場の専務は、「リチャード三世」はどうかと勧めたが此田舎役者は聴かない。Shylock or nothing! (シャイロックでなくてはやらぬ) と言張つて動かぬ。仕方なしに「ヴェニスの商人」ときまつたのが、此年の一月二十六日である。

どうせだめだとあつて稽古もたつた一回、みんな見向きもしなかつたが、此小男の役者は一向平氣である。彼は家へ歸つて、今日ばかりはと云つて、絶えて久しく口にしなかつた肉を購つて立派な夕食を濟まし、ド・ルウリー・レーン座に赴いた。劇場には客は半數もゐない。併しカーテンが上つて、かたの如く第一場第二場と進み、第三場に至て黒い鬘の沈鬱なシャイロックが出て

Three thousand ducats, — well.

と一語を吐くに及んで見物は全く魅せられてしまつた。一場は一場と進んで法廷の場になつた時見物は殆ど總立になつて此新しい悲劇役者を喝采した。喜んだ劇場専務は先程の輕蔑はどこへやら、急にチャホヤするのであるが、彼は一向に喜ばうとしない。さつさと片づけて家へ歸つて行く。家とはいへど狭いきたない貸間で、そこに久しい貧乏に面やつれた妻が子供の床の傍にて、今日の首尾いかにと待つてゐる。彼は一方の手に其の子供を抱き上げ、他方の手に妻を抱いて叫んだ。——「メリー、お前はこれから自分の馬車に乗れるぞ。それからチャールズ！ お前はイトンの中學に入學させてやるぞ。」

此の田舎廻りの役者はいふ迄もなくエドマンド・キーンで、やがて「リチャード三世」を演じ、「ハムレット」「オセロー」を演じて、一代の名優と謳はれたのである。

要するに、「ヴェニスの商人」は全篇和やかな情愛に充ちた氣分を湛へてゐる内を、冷たい鋭い強い風がシャイロックを圍んで吹く。若し之を喜劇とするならば、それは基督教徒に取つての喜劇で、唯一の財産を失ひ、娘を失ひ命をも既に失はんとした老猶太人に取つては、永久の悲劇であらね

ばならぬ。そして、よし好める男と共にあればとて父の歎きを餘所に聞き夜の遊宴の群に入る娘ゼシカを憎まずにはゐられない。「目にて目を償ひ、齒にて齒を償ふ」といふ舊約の律法に養はれたシ・イロクに、復讐心のみ執拗で慈悲の涙のないのを責めれば、浮雲にも似たる財産をあてにして己が身の肉を質入れし、借りた恩義のシ・イロクに唾する如き振舞は、基督教徒を代表するアントーニオーにも責むべき所である。つまり、赤鬘のシ・イロクが悲痛の涙を絞る毎に氣味よげに笑ひ得る觀客に取つての喜劇で、キーン以後の我等に取つては寧ろ色々の人生の問題を提供せらるゝ悲劇である。

人肉質入裁判の人氣ある話しが遠く源泉を東洋に發し、西してイタリーを經、イギリスに入つて其の第一の劇詩人、シェークスピアの靈筆に上り、他は東して支那を經、日本に來つて其の隨一の戯曲家近松門左衛門の妙文となつたとすると、事實は頗る因縁の深い興味ある話しであるが、近松に於ては別に之を主題として一つの劇に發展せしめたのでなく、單にインドの古譚をそのまま記入したに過ぎない。しかも遠い源流は同じであらうと推測はするものゝ、趣きは全く別様である。釋迦の一生を五段に分けて記した「釋迦如來誕生會」の三段目の終りに、愚鈍の若者槃特

が、家に迷ひ込んだ山鳩を殺し、追跡して來た理不盡の武士に代償として股の肉を切らせ、それでも目方不足を云ひ張る武士に向ひ、秤に足を踏込んで之を破壊し、痰呵を切るといふだけで、「槃特が愚痴も文珠の智慧」とあるほどの智慧も發見せられない。大體が「マハーバーラタ」にけすところに似てゐるが、此の敘事詩の象徴的意義は採用せず、上述の如く單に無法な武士と助記ない獵師の家の出來事にしてある。

三つの匣の話しも中世紀に好まれた話しで、類似の譚話が所々に發見せられてゐる。此の話しと人肉質入れの話しと結合したのはシェークスピアであるかどうか、まだ未解決であるが、大して重要な問題ではない。興味の集中といふ點から、全く關係のない二つの話しが對立してゐるのは面白くないと見るのは古典趣味の立場で、古典的ならぬ浪漫派のシェークスピアの劇は、先づ以て面白い話しの數多く展開することを要求せられたものであることを承知して置かねばならぬ。此の「三つの匣」に幾らか手品があるのではないかといふ疑ひを起したのは私だけではない。無論證據はない、只漠然たる疑ひだけである。

13. King Henry IV.—First Part.
「ヘンリー四世」上篇

五幕、一九場、總行數二九九九。

『沙翁劇中、否、英國劇壇古今を通じて、人氣あること此右に出づる者なし』といはるゝ此史劇(前後兩篇)の興味は、冷かな術策家で策に由つて奪ひたる王冠を策に由つて保持せんと苦心寧日なき王ヘンリー四世と、才氣爛漫、雄魂卓犖、到底生氣なき王宮の生活に耐へ兼ね、市井の間に身を隠し、酒客を友として豪快の心をやる王儲子ヘンリー(Prince Hal)と、武を好み血に渴くこと食膳に超え、戰場を馳驅して刺馬輪常に熱せりとてホットスパー(Hotspur)の異名あるノーザムブランド(Northumberland)伯の一子ヘンリー・パーシー(Henry Percy)と、王儲子が友にて斗酒樽大の腹を抱へ、酒を飲むこと長鯨の如く、機智處に應じ、滑稽口を突いて出で、ハムレットと共に沙翁が獨創人物中の最も血あり肉ありと驚嘆せられる老フェールスタッフ(Sir John Falstaff)との四人物に集まる。

ロマンチックな、如何にも弱いが非常に詩的なリチャード二世の位を廢したヘンリー・ポリングブルックは自ら王位に登りヘンリー四世となる、用心深い狡智の性格である。王は小康あらばバレストインの聖地への十字軍に出陣せんと、兼々口にするのであるが、其願ひは實現せらるべくもなく、平生目の上の瘤であるホットスパー父子が北スコットランド、西ウェールズの大名等と相呼應して、愈々反旗を擧ぐるの報に接する。「リチャード二世」にて見るが如く此ノーザムブランド伯父子は王を助けた最大の功臣であるが、又それ丈我儘であつて彼等が手にて王位は左右し得らるゝ者の如く振舞ふのは王に取つて危険でならぬ。之を屈服せしめねば王の位も砂上の樓閣に過ぎぬ。(以上第一幕)。

親の心を知るや知らずや、王子ヘンリーは猪頭を看板の酒舗に起臥し、フェールスタッフ等が面白半分に市外の丘に旅客を要して酒錢を奪はんとする計畫に耳を傾けてゐる。旅館の人足と膝し合せ、薄明旅客の發足せるを覗ひ、假面に顔を包んで森の間より殺到するのであるが、流石王子は之を快とせず、別に一計を案じ、腹心のポインズ(Poins)と約し、態と一行に後れ、フェールスタッフ等が首尾よく財貨を剥ぎ取り分潤せんとする處を後ろの木影より假聲を作つて「曲者待て」と囂

り出づる。驚いた偽追剽共の一目散に逃ぐるを追はず、財貨を纏め、そ知らぬ顔して宿に歸る。扱昨夜の首尾やいかにと尋ねると、滑稽なる老ナイトは先づ王子とポインズの破約を責め手際よく剥ぎ得し始終を誇説し、次に雲霞の如き警吏の大軍に攻められ防戦數度に及ぶとも遂に衆寡敵せず、ムザムザ獲物を捨て去りし一條の物語り、看客の腹をよらぬはない。(以上第二幕)。

王子は警吏に向ひ此一冒險に對する損害を支拂ひ、尙様々滑稽のある處へ王使が來る。云ふ迄もなくホットスパリー一味の反亂鎮定の軍に出征せよとの命である。面白しく、武名豫ねて天下に高きホットスパリー、いで此一戦に彼れ倒るゝか我れ倒れんと、王子は勇みに勇んで馬背に上る。(以上第三幕)。

ホットスパリーは武はあるが智に於て足らぬ。心氣高く潔いのであるが又怒り易くて人の言を容れぬ。味方の軍勢未だ整はず、時期尙早の論多きにも拘らず、一旦翻したる家門の旗エスベランスを巻いて再擧を計るを潔しとせぬ。シュリューズベリー (Shrewsbury) の陣は對陣の初めに於て既に叛軍に四分の勝味しかなかつた。(以上第四幕)。

然し彼は戦つた。彼の友ダグラス (Douglas) も勇戦した。王と覺しき者三人迄も屠つた。それ等は皆用心深い王の影武者であつた。眞の王も既に危きに至つた間一髪に王子ヘンリーの救ふ

處となつた。そしてホットスパリーは遂に王子の手に戦場の露と消え、ダグラスは生擒せられ、此方面の内亂は一と先づ鎮靜した。王は初めて知つた己が子の武勇をどんなにか喜んだらう。然し敵のウーイルスにある者を尙征討せねばならぬ。(以上第五幕)。

前篇は一五九六—七年の作。

此史劇の興味を中心は、何としてもフールスタッフである。彼を以て一個の漫畫と思つてはならぬ。そこに何等嘲笑的な誇張はない、立派なユーモリストの描寫である。Brundes は之を激賞して曰く—

He is one of the brightest and witliest spirits England has ever produced. He is one of the most glorious creations that ever sprang from a poet's brain. There is much rascality and much genius in him, but there is no trace of mediocrity.

彼が第五幕で、シュリューズベリーの合戦に、乞食にも似たる雇兵を率ゐて参加の際、危い處を死んだふりして、如才なくホットスパリーの血に燃ゆる鋒先を免かれ、

The better part of valour is discretion; in the which better part I have saved my li'e.

「勇氣の優等部分は分別である。その優等部分で俺は命を助かつた」と臆病者の負惜みの遁辭を吐いたのは、有名な話柄であるが、彼れのユーモアと、武士の面目(honour)なんどいふものゝ無視は、皮肉でもある。

14. King Henry IV. — Second Part.

「ヘンリー四世」下篇

五幕、一九場、外に序インダクション幕と閉幕詞エピローグ。總行數三〇九九。

ノーザムバランド伯は我が子ホットスパーの敗戦と戦死の報らせを受ける。且つ王がその次子ランカスターのジョンとウエストモアランド伯の指揮の下に彼に對する征討の軍勢を向けた事をも知る。身、羸弱にはあれど、彼は相戦はんことを決心する。(以上第一幕)。

例のフォールスタッフは首都に歸り來て、新兵徵募係りの役目を帯びながら一向に其職を盡さず例の如く酒舗に起臥して、機智と諧謔ユキキョクを縦横に發揮してゐる。そこを王子ヘンリー(尙ほ小暇を偷んで時々市井の無頼漢と往來してゐる)に見出されて、軍務に復すべく召喚される。(以上第二幕)。

太平樂なフォールスタッフが募兵掛りの隊長として公々然賄賂を取り私腹を肥やしてゐるに引かへて、「王冠を戴ける頭には不安こそあれ」で、王は諸處に烽起した反軍の爲めに、王位を脅かされること頻りで、夜の安眠をも奪はれ、且いたく健康をもそこなふ。(以上第三幕)。

然し王の爲には幸運にも、反軍は連絡ごとくに齟齬し、合せて打たば王軍の運命も危かりしものを、中心なき悲しさには、別れ／＼の脆い戦となつた。最後の中堅の一軍は皇子ジョンの奸計に由り、詐りの和を信じて軍隊を解散せるところを捕へられ、それぞれ刑に處せられた。

反亂略々平定の報の到る頃には王は病大に革まり、心配と用心とに充ちた其一生は、將に閉ぢられんとしてゐる。王は皇長子ヘンリーの腕の下に最後の辭を發して、國內保安の策を授けてゐるのであるが、悲しいことには英雄である我が子の眞の大を認め得ぬ。そして冷たい、自ら欺いた一生を、聖都エルサレムと名づくる室にて逝くのを以て、少しく自ら慰めるのも悲哀である。

(以上第四幕)。

先王崩御、新王登極の報知をフォールスタッフが受けたのは彼が征旅の途中、地方の判事シャロー(Justice Shallow)の家に客となり、盛に皇儲子と親交の間柄であるのを誇つてゐる處である。その皇子は今や一國の至尊である、いで我が時到来り、「シャロー氏、任官御身の望み通り、我れこそ幸運の番頭なれ」と勇み立ちて判事を伴ひ、王都に歸て来る。そして即位の式を擧げた新王の歸途を要して萬歳を叫び、王の注意を求むるのである。然し重き責任の地位に上ると共に舊態を一變した王は、「老人、我れ汝を知らず」とて顧みない。此有様を見たシャローは兼ねての借金を

千磅を返せと迫る。物に動ぜぬフォールスタッフは更に驚かぬ。「あれは人前である。夜になつたら使者が王様から来る」と、例に由つて太平樂を極めこんでゐる間に、幕は閉ぢて我等は新王ヘンリー第五世が勇ましき一代を紹介せられるのである。(以上第五幕)。

後篇は一五九六年乃至九九年の間の作。

篇中、第三幕第一場の初に、宮中の一室で寢衣のままのヘンリー四世が王位の不安さと不眠症の苦しさを漏らす左記の獨白は有名なもので、日本でも明治十何年代に當時での英文學者外山正一教授によつて新體詩に譯されて、よく知られてゐる。――

How many thousand of my poorest subjects
Are at this hour asleep!—O sleep, O gentle sleep,
Nature's soft nurse, how have I frighted thee,
That thou no more wilt weigh my eyelids down,
And steep my senses in forgetfulness?
Why rather, sleep, liest thou in smoky cribs,
Upon uneasy pallets stretching thee,

And hush'd with buzzing night-flies to thy slumber;
 Than in the perfumed chambers of the great,
 Under their canopies of costly state,
 And lull'd with sounds of sweetest melody?
 O thou dull god, why lies thou with the vile
 In loathsome beds, and leavest the kingly couch
 A watch-case or a common 'larum-bell?
 Wilt thou upon the high and giddy mast
 Seal up the ship-boy's eye, and rock his brains
 In cradle of the rude imperious surge,
 And in the visitation of the winds,
 Who take the ruffian billows by the top,
 Curling their monstrous heads, and hanging them
 With deafening clamour in the slippery shrouds,
 That, with the hurly, death itself awakes?
 Canst thou, O partial sleep! give thy repose
 To the wet sea-boy in an hour so rude;
 And, in the calmest and most stillest night,

With all appliances and means to boot,
 Deny it to a king? Then, happy lowly clown!
 Uneasy lies the head that wears a crown.

ヘンリー四世

外山正一 譯

いと下賤なる我人の 枕を高く高いびき
 今しも睡るその數は 幾千萬もあるならん
 嗚呼うらやまし羨し 眠の神よ眠り神
 天より我に賜りて 伽するところ云ふべけれ
 如何なる罪のたゝりにや 眠の神に見はなされ
 たとへ暫時の間たりとも 胸のくるしさ忘れたく
 まぶたを閉ぢて眠らんと いかにも眠られず
 その如何なれば睡神 見る影もなきあばら家の
 くすぼりかへる藁の床 むさくるしきもいとはずに
 心地もよげに横はり 枕のほとりバタ／＼と

飛び来る蟲の羽音さへ 眠りを誘ふ助け舟
すや／＼眠るものなるに 伽羅沈香をたきたてゝ
床の上なる天蓋は 金欄緞子もて作り
眠を誘ふ樂の音は いと心地よく聞ゆなる
貴人高位の聞までは 何とて來ることのなき
げに愚かなる神ぞかし 何故斯くも見苦しき
不潔な床に横はる 下賤なものと寝はするも
王者の床に來らぬぞ 金の時計と號鐘と
比べの者にはならぬのを はていぶかしき神の意ぞ。
ゆら／＼ゆるゝ帆柱の 高き上にも安くねる
水夫の目をば閉さして なさけ用捨も荒浪や
吹き來る嵐凄じく うづまく浪をまきあげて
天地とどろく浪音は 死人もさむる程なるに
下は無間の地獄なる 高き柱のその上で

浪にゆらめき眠らす 神の力ぞ不思議なる
惣身水にひたされて 身を粉にくたく水夫には
かくさわがしき其の折も 眠りの神は付き添ふに
草木も眠る丑滿時 眠りを誘ふその工夫
手を替へ品をかゆるとも 王者の側に來らぬは
依怙最負なる神にこそ あゝ幸多き賤が身は
寝ろやねむれや羨し つらく／＼思ひ合すれば
冠り着たる頭ほど 苦しきものは世にあらじ。

15. Henry V.
「ヘンリー五世」

五幕、二三場、外に序詞と閉幕詞。總行數三二一五。

半世が放逸であつた丈、それ丈今や別人の如くなつて萬機を總攬するヘンリー五世が王冠は二倍の光輝を放つやうである。王の即位は萬民の歡び迎へし所であるが、父王が遺言にもありし如く、内亂に飽きた人心を一變して王位を大磐石の安きに置くには外帥を起すに如かぬ。由て王は智慮ある僧正等に計り、古きサリク法(Salio Law)を楯とし、佛王に對し若干の公爵領を要求した。暴狂なる英王何をかいふと考へた佛太子は、此れの答としてテニス球を送つて擲擲した。(以上第一幕)。

於是や征佛の大軍が起される。英國が上下擧て出帥の準備に急がしいと傳へ聞いた佛王は事の意外に驚き、即ち詭計を以て英の三貴族を買收し、王が船上らんとする所を刺さしめんとしたが、未然に發覺し、不敵なる王は自ら彼等を面責し、法に従つて所罰せしめた。(以上第二幕)。
かくて英軍は佛國に上陸し、勝ち誇つて前進する。そして當時の下士卒等が状態と心持ちとを

實寫せる興味ある挿話を經過し乍ら、次第に進んでアジンコート(Agincourt)の陣營に至る。(以上第三幕)。

王は佛兵には少しも敗を取らぬが、疫病の流行と糧食の缺乏とは奈何ともするなく、ために多くの兵を損し、此處に佛軍と相對峙する頃には、僅に敵の五分の一の兵數を有する許りであつた。必勝を確信した佛太子は己れの駿馬を誇り、武具を誇り、明けなば英兵を喰ひ盡さんと大言してゐる間に、英王ヘンリーは一兵卒に假裝して軍中を巡視し、將卒を激勵鼓舞してゐる。そして夜の白々と明るると共に、陣頭に膝を折つて祈禱を天帝に捧げる。將士今や生還を期する者はない。さり乍ら流石に目に剩る敵の大軍の事であるから、ウエストモアランドが思はずも「故國なる一萬の兵をして茲に在らしめなば」と呟くの聞いた王は聲を勵まして「否とよ、死ぬべくば我等のみにて國の損失となすに充分なり。生くべくば、數少きこそいよいよ譽れなれ」と。懦夫をして尙立たしむる熱辯を振つて、扱て進軍を令するのである。誰かいふ衆寡敵せずと。猛將の此意氣は百萬の援兵なり。三度び馬より落ち、三度立上りて勇戦するヨーク公を初めとし、一人皆よく十人に敵し、遂に佛兵を全滅して、茲にアジンコートの戦捷はヘンリー五世の名をして不朽ならしめる。而かも宗教的な王はいよく英軍の大勝を聞くや曰く「神は譽むべき哉、そは我等

が力に非ず」と。(以上第四幕)。

かくて重臣共が佛王と和を講ぜる間に若きヘンリーは佛王女カサリン姫に自ら求婚する。王の覺束なき佛語と王女の貧しき英語と、されど戀を語るには充分にして、茲に目出度き婚約成り、王は王女の手と共に佛王統を繼ぐの權利を得、「短かけれども最も偉大に生きた此英國の星」の一篇を閉づるのである。(以上第五幕)。

此は一五九七年——九九年頃の作。

皇太子としては、豪放濶達、市井に無頼漢を友として酒食と悪戯に耽り、父王に一生心配をかけた放蕩息子にてありながら、王位に即くに及んで謹嚴公明の名君となつた實際的英雄の典型を描き出し、國民愛國心の頂點に達せる氣運に乗じて多大の人氣を得た最も心地よい、すがすがしい作である。

以上の四篇の歴史劇は相連絡して一つの tetralogy (四部作)として見るべきである。

此篇を殿として沙翁は一と先づ史劇の筆を打ち切り、十年後に最終の作物「ヘンリー八世」に來るまでは最早その史劇は見られぬのであるから、此機會に於て序でに史劇 (Chronicle Plays or

Histories) の消長といふ事について一言して置かう——

史劇は一面には時代の産物である。英國が國內不統一の種を除去し、外に向つて國威を宣揚し、不思議なほど愛國熱の燃えたぎつた時代となつて、市民は皆な後を顧みて、自國の過去の歴史に非常な興味を覺えて來た。一五八八—一五九八の十年間は、劇の方面ではグリーンもビールもマアローもシェイクスピアも専ら史劇に筆を染めて、史劇全盛時代と成つた。

併し此十年間を経過すると同時に、史劇は俄然として跡を消して了つた。そして其の再燃は極最近のジョン、ドリンクウオターなどの Episode drama の創作に至るまでなかつたと云つていい。それは英國に於て愛國熱の下火といふ事もあらうが、最大の原因は、由來史劇は本質的に一つの劇の定まつた形式であるといへない。やがては或は悲劇に、或は喜劇に、或は世話ものに、又は浪漫劇に進化しゆくべき運命を持つたもので、ほんの過渡期の産物ではなからうか。

史劇の第一興味は、何といつても物語の興味を主要とする。話しの面白さである。やはり一五九〇年代の觀衆の要求したものである。史劇は見物の豫備知識を利用する事が出来るから、そこに得がある。けれども同時に其の得は損にもなつて、見物の頭にある一種の見解に束縛せられる害も考へねばならぬ。西郷隆盛を優柔不斷な人物に解釋して書いても差支はないが、さうする爲

めに西郷に關する常識を破壊する丈けの色々の用意が要る。故に史劇に於て性格描寫に重きを置かうとすると、それはやがて悲劇の領分になるので、材料を擇ぶにも、遠き古へであるとか、乃至歴史上性格の色々に解釋せられて一定しないものを採らねばならぬ必要を生ずるであらう。沙翁の性格悲劇に於ても、歴史から材料が取られてはあるが、リーヤにしてもマクベスにしても、史上の人物といひ條、殆ど架空の人の如き古人である。

16. Merry Wives of Windsor.

「ウインザーの陽氣女房ら」

五幕、二三場、總行數二七三五。

史劇「ヘンリー四世」に於て最も人氣を集めた肥大なる醉武士フォールスタッフは、老いたりとも尙ほ當年の元氣を失はず、倫敦の郊外ウインザー町の酒舗に出入し頗る上機嫌にて滑稽を肆にし、今や町の豪家ページ(Page)並にフォード(Ford)の一家の夫人に、只宛名を異にせる許りの同意同文の戀文を送つてゐる。

その一人のページ夫人は家に年頃のアン(Anne)と云ふ娘を持つてゐる。美貌なるに加へて祖父の遺産七百磅の収入付きとあるので、數ある婿の候補者の中にて、我等の長く忘る能はざるは、地方の判事の従弟スレンダー(Slender)の、謂ひ難く巧みに寫されたる性格、續いて學問自慢の田舎牧師にて郷先生なるエヴンス(Evans)、怪奇なる佛人の醫士カイアス(Cains)、最後の勝利を占むる大宮人のフェントン(Fenton)がある。そして此等の戀人共は皆其媒介を、カイアスの助手の如き下婢の如きクイックリイ(Quickly)夫人に依頼する。(以上第一幕)。

フォールスタッフから同様な戀文を受取つた二夫人は、此厚かましきナイトを懲らしめくれんと相談し、フォード夫人は返事を認めて面會の日を定める。其使者にもクイックリイ夫人が勤める。是れより先きフォールスタッフの許から追ひ出された下僕共は、行いて此付け文の事を二夫人の夫に告げる。ベーチは別に氣に留めるやうでもないが、フォードは半ば嫉妬の心にそゝられ、或日偽名してフォールスタッフを訪問する。それとは知らぬナイトは、喋々と言葉を飾つて夫人と面會の日のことを誇り示す。フォードはすつかり嫉妬の炎に燃える。(以上第二幕)。

約束の時を違へずフォールスタッフはフォード家の裏門を叩く。兼ねて巧みたる大籠を用意して置いて夫人は彼を導き入れる。二言三言をかはさぬ内にベーチ夫人は顔色をかへて入り来る。フォードが多人數を具して突然歸宅したのである。大急ぎで二人の夫人はナイトを大籠に入れ、上に襦袢切れを編く被ひ、僕をして荷き去らしめる。戸口でフォードは此大籠を誰何したが、深く疑はずしてやり過ぐす。

華かなるナイトは洗濯籠と共にテムズ河に投ぜられ、すぶ鼠となつて漸く這ひ上り、酒を呼んで惡寒を忘れんとしてゐる處に、例のクイックリイ夫人が来る。そして夫人よりの第二の會見の言傳を聞く。はや先きの事を忘れて之を承諾し、又フォードを捕へて第一回會見の危かりしを語

り、次の日の約束を示す。フォードの角は愈々伸びる許りである。(以上第三幕)。

フォードは第二の會見の日にこそ實證を擧げんとしてゐる。そして今度は籠の検査に心を奪はれてゐる間に、ナイトは田舎女に假装しベーチ夫人と共に再び虎口を脱出する。其跡で兩夫人は夫に前後の實情を明かす。初て嫉妬の角を折つたフォードは、今度は四人で最後に大いにナイトを苦しめてやらうといふ計畫を立てる。(以上第四幕)。

ワインザーの森に夜が来る。フォールスタッフは約に由つて假裝して戀人の來るのを待つてゐる。そこへフォードとベーチの二夫人が来る。蜜のやうな會話の緒口にも至らぬ先に、森の奥に異様のもの音がするので、兩夫人は怖れて逃げる。そこへサタイヤ(半人半山羊の神、山林神)に扮した教師エヴンスに導かれ、仙女王のアンを取り巻いて森の妖精共が出る。彼等は怖れ伏したるナイトに近づき、歌に興じながら手にせる蠟燭をつける。驚いてナイトの飛び上るをきつかけに皆皆立ち出で、彼に眞を告げて興じ笑ふ。兼ねて此機を利用し、ベーチはスレンダーを、夫人は醫師カイアスを娘の婿にせんと計つたのであつたが、策は成らずして、アンはフェントンと約を結ぶ。失望した兩親の顔を見て、フォールスタッフは少しく慰むのである。(以上第五幕)。

此喜劇は一五九六年乃至一六〇一年迄の間に書かれたもの。

これから以下四篇(一ツ飛んで「十二夜」をも含めて)は、ほとんど同じ様に執づれも戀の葛藤と局面の興味と田園的詩趣とを以て特長とする。

17. Much Ado About Nothing.

「から騒ぎ」

五幕、一七場、總行數二七二八。

メッシーナ(Messina)シ、リー島の都會)の市長リオナート(Leonato)はアラゴン(Arragon)の公子ドン・ジョードロー(Don Pedro)の訪問を受ける。市長の家には美しき娘ヒーロー(Hero)と其姪ベアトリース(Beatrice)とが居り、公子は其一行に若き貴公子ベネディク(Benedick)とクロディオー(Claudio)とを加へてゐる。ベネディクとベアトリースとは舊知の間柄で、逢へば必ず機才頓智の舌戦に鎗を削らぬといふことがない。クロディオーは又ヒーローに思ひを寄せて悶々する。ドン・ビードローは彼に代つて姫と其父との心を得ようと約束する。(以上第一幕)。

假裝會が開かれる。アラゴンの公子は此機を利用して娘を説き、クロディオーへの約を果す。所が公子の異母弟なる腹黒きドン・ジョン(Don John)は、公子が己が爲にヒーローの愛を求めたのだと云つて、クロディオーの耳にそれとなく毒を注ぎ込む。クロディオーは殆ど絶望したが、姫の父なるリオナートより自ら娘の結婚を許すといふ言葉を得て漸く蘇生の思ひをする。ベネ

ディクは此夜の舌戦にいたく敗れ、少しちれ氣味で去つて遠く行かんとしてゐる。そこへ友人共はベアトリスとの戀を成立せしめやうと一計を案じ、男には女が、女には男が、口にこそせね切なる戀に胸を焦してゐるといふ話を、それとなく立聞きせしめる。(以上第二幕)。

ドン・ジョンが小策は破れた。彼は更に大仕掛けの悪計を以てクロード・ディオの幸福を妨げねばならぬ。彼は兄とクロード・ディオに向ひ、娘には既に仇し男のある事を誠しやかに述べ立て、其證據を目撃せしめようといふ。かくて兩人をヒーローの私室の窓の下に伴ひ來る。それは華燭の典の定められたる前夜である。そして同じ心の悪僕ボラキオー(Borachio)をして、豫ねて親しめるヒーローの侍女に向ひ様々の痴話を演ぜしむる。夜は暗し、兩人は全く此悪計の擒となり、女の不信不義を憤つて復讐を盟ふ。(以上第三幕)。

明くればメッシーナの大會堂で華やかな結婚式となる。型の如く僧官が結婚に異議なきやを尋ねると、クロード・ディオは茲に大衆の面前で女の不義を責め、ドン・ピードローも之れに裏書きする。あまりの事に、優しきヒーローは神を失して其場に倒れる。公子の一行は寧ろ勝ち誇つて席を去る。僧官の注意に由り娘は其儘かの世の人となつたといふことにする。娘の貞操を曾て疑はぬベアトリスはベネディクに向ひ、若し口にする如き戀の眞あらば、クロード・ディオをなきもの

にして其證據とせよと迫る。(以上第四幕)。

ベネディクは挑戦状を送る。

是れより先き市の警官ドッグベリー(Dogberry)の手下共は、結婚式の前夜に町を警戒して計らずも、ドン・ジョンの二僕が公子一味を欺きし一條を誇りに語つてゐるのを立聞き、よくも解し得で之れを國家の大事となし、遮二無二引き立て、市長の裁判を仰がんとしたのであつたが、折から市長は娘の結婚に心を奪はれ、且はドッグベリーの一知半解なる駄辯に惱まされ其儘他日に譲つたのであつたが、改めて其裁判をなすに及び、初めて一切の悪計は暴露した。クロード・ディオは深く輕卒を謝してリオナートーの許を得、其勸めに任せてヒーローに酷似したと稱せらるゝ婦人と結婚することゝなる。その婦人は實は死んだと信じてゐた眞の戀人であるので、其喜びは數倍する。ベネディクは尙ほ饒舌を逞うするベアトリスの口を、接吻を以て沈黙せしめる。(以上第五幕)。

此喜劇は一五九九年—一六〇〇年頃に書かれたもの。

篇中クロード・ディオの好悪と眞實なヒーローの結婚式に於ける災難とは、もう悲劇に近いほど

な、息をはづませる恐ろしい suspense をもつ。若し作者が目出度き大團圓に備ふるため、注意深く材料を緩和しなかつたなら、印象はあまりに悲痛なものとなつたであらう。

18. As You Like It.

「御意次第」

五幕、二二場、總行數二六八一。

アーデン(Arden)の森は常夏の森である。霜置かず風荒まず、野に生ふる果物と森に走る獸を取つて曾て衣食の煩ひなし。此處を假りの住家となし、朋友四五と自由の樂天地に逍遙する佛蘭西の一公爵は、彼を陥れ其位を剝奪せる弟の公爵よりどれ位幸福であるか分からぬ。

弟の公爵フレデリック(Frederick)は武を好んで、お抱への力士チャールズ(Charles)に敵し得ん者を求める。求めに應じて出でたる若者オーランドー(Orlando)は容易く此勁敵を敗り、厚き恩賞に預るのであつたが、彼が父は逃れたる公爵に従ふものなる事が分かつて、却て不興を蒙る。此勝負を見てゐたフレデリックの息女シーリア(Celia)、並に見なる公爵の息女にしてシーリアと尤も親しきが爲に尙宮廷に止まれるロザリンド(Rosalind)は、いたく此若者を氣の毒がり、中にもロザリンドは頸なる飾物を取りせめてもの贈物として手づから若者に送る。二人の戀は此一瞬間に成立する。姫は伯父なる公爵に疑はれて、又追放の命を受ける。(以上第一幕)。

オーランドーは其勇力が却て災となり、かねて不和の仲なる兄オリヴァー (Oliver) が毒刃に危く罹らんとして忠僕アダム (Adam) に助けられ、彼を従へて遁走し、アーデンの森に来る。そして飢渴と疲勞との故を以て道に死なんとする老僕の爲に食を得んとて、折から木蔭に饗宴中の前公爵一同を刀にて嚇さんとし、却て恥かしめられ、無禮を詫びて此森の放浪者の群に加はる。(以上第二幕)。

こゝに彼は夢にも忘れぬロザリンド姫に送る歌を書き散し、彫り留めて自ら慰むる。

これより先き、姉妹にも優りて親しきシーリア姫も唯一人面白からぬ父の家に在らんよりはと、兩人相語らひ、ロザリンドは男装してシーリアの手を取り、茶坊主タッチストーン (Touchstone) に案内させ、自由を求めて又アーデンの森に来てゐるのである。

詩と平和の此森に吹くは怪しき戀風かな。オーランドーは男装せるロザリンドを戀人とも知らず、只何となく慕はしくて切なる胸の中を打明ける。(以上第三幕)。

或日彼は、森の深みに蛇と牝獅子に襲はれ將に惨死せんとする兄オリヴァー——やはり新公爵から追放の命を受けてゐた——を救つたが、今や先非を悔いた此兄が、又シーリア姫とわりなき戀路に陥る。(以上第四幕)。

男装のロザリンドに竊かに心を焦してゐる村の娘に向つて、羊飼ひの若者の戀がある。茶坊主タッチストーンも又他の村娘を戀する。

此四組の婚姻が森の公爵の手に由つて結ばれる所へ、吉報到り、フレデリックが或る隠者に説かれて己が先非を悟り、自ら退いて再び領土を兄に返還せんとする。普き歡喜の間に、唯一人皮肉なる憂鬱哲學者ゼイクス (Jacques) ——追はれた公爵の侍臣たる貴族の一人——は舞踊の群を去つて、遁世するフレデリックのあとを追ひ古き洞穴に赴く。(以上第五幕)。

此喜劇は一五九九年乃至一六〇二年までの間の作。

篇中ゼイクスといふ厭世家を出して、諸人の歡樂の間に一人苦蟲を噛みつぶしたやうな言動行爲をさせるのは、次の時期(作者の劇作上の第三期即ち悲劇時代)を暗示してゐる。

19. Julius Caesar.
「ジュリアス・シーザー」

〔世界文學全集〕の中の著者所譯「沙翁傑作集」参照

五幕、一八場、總行數二四二二。

シーザーが外征に勝ちて羅馬に凱旋した以來、民衆の渴仰を一身に聚め、威勢隆々、アントニー(Antony)の如きは三度び王冠を彼の頭に加へんとした——一々斥けられたけれども——程であつた。之を嫉妬するカシアス(Cassius)一派は、彼の存在は羅馬國民に取つて禍ひであると云つて、シーザーの親友にして、最も嵩高なる心と、厚き人民の信頼を有するマーカス・ブルータス(Marcus Brutus)を説破した。正直で單純なるブルータスは全く一身と友情とを犠牲に供する心持ちで陰謀に加擔する。(以上第一幕)。

シーザー凱旋入京のとき豫言者あつて、三月十五日は凶日なれば警戒せよと豫告した。そこで此日が明けると、人々はシーザーの外出を戒しめ、殊に妻は不吉な夢を見たとして、是非家に引留めんとする。然るに豫めシーザーの躊躇を察知した徒黨の士數人來つて、彼が元老院に出席する

やう切に彼に説き勸める。彼は臆病者と思はれんことを恐れて、遂に其言に従ひ彼等と共に登院する。(以上第二幕)。

彼れ元老院へ入るや否や徒黨の人々請願ありと稱して、詐りてシーザーに近づき、遂に各々短劍を振つて刺し殺した。

シーザーの親友たるアントニーは、危険を悟つて一旦は逃亡したが、僕を送つて陰謀派と和解を求め、且つシーザーの死骸を乞ふて追弔の辭を述べんことを願つた。猜疑心あるカシアス等は之を拒否せんとしたが、公明正大なるブルータスは喜んで許諾する。そして自ら先づ立ちて公安の爲めにシーザーを屠るの止むを得なかつた事を演説する。民衆は之に和してブルータス萬歳を稱へる。次で壇に上つたアントニーは極めて巧妙なる辭令を用ひ、表にブルータス一派を傷けないで、次第々々に國家に大功あり人民を熱愛せるシーザーを暗殺した事の極惡非道である事を説き進めた。此雄辯に感服した人民共は次第に激昂して、先きに熱心を以て歓迎したブルータス一派を殺せと叫び出した。陰謀派は遂に羅馬を逃走せねばならぬ様になる。(以上第三幕)。

於是天下は二分せられた。一はブルータス、カシアスの軍で、他はアントニー、故シーザーの甥オクタヴィウス(Octavius)及びレピダス(Lepidus)の三頭政治より成る一軍である。兩軍はフ

イリッパイの野に對陣する。會戦の前夜シーザーの亡靈がブルータスの陣所に現はれ「フィリッパイにて汝に逢はん」*Thou shalt see me at Philippi.*と告げて去つた。(以上第四幕)。

ブルータス、カシアス兩將の身の上にかかる様々の凶徴に何となく意氣沮喪した彼等の軍は、翌日の戦に一敗し、兩將は共に自ら刃に伏して倒れる。(以上第五幕)。

此篇は沙翁劇三十七種の丁度中央にある作で、一五九九—一六〇七年の間に書かれたもの。史劇から悲劇への移り變りの繼目にある作。作者の著作的生涯を四期に分てば、その第二期の終頃のもの。

此劇は單に活動の點より見ると、シーザーの劇でなく寧ろ其敵手ブルータスの劇である。されば、内容からいへばヴェルテルが評したやうに、「ジュリアス・シーザー」でなくて「マーカス・ブルータス」であるべきで、主人公シーザーは中頃に没し、ブルータスの浮沈が最も多大の地位を占めてゐる。然るに「シーザー」を以て表題としたのは、色々説明がつくのであつて、

第一に、史劇では皆當代の元首若くは最も高い人間を表題としてある。例へば、實はヘンリー親王とフォールスタフとの芝居であつても「ヘンリー四世」となつてゐる。されば作者が、やはり

此習慣を守つて「シーザー」と題したのも異しむに足らぬこと。

第二、人口に膾炙するシーザーを主人公とする興行政策。

第三、ブルータスの傳記そのままの行き方。

第四、復讐ばやりを追ふ(「ジュリアス・シーザー」の次は「ハムレット」)こと。

兎に角過渡期の作であるから、史劇の形を残存して、他面に他日の悲劇を豫想せしめるものがある。しかし史劇から悲劇への過渡期の作と云つたればとて、悲劇といひ史劇といふものに、我々の抱くやうな明瞭な觀念を、當時の聽衆は勿論シェークスピアも抱いて(少くとも意識して)作つたのではあるまい。即ちどちらにしても「話」が中心興味である。しかし話を話として手際よく舞臺の上に示すだけでは、彼の藝術感 *art sense* が承知しなかつたであらう。もう「ローミオとジュリエット」に於て十分に *motivation* 「動機づけ」が理解せられ、又描かれた。 *motivation* は甲又は乙の動作に十分納得せしめるだけの動機を與へる事である。動機は結局性格から來る。そこで *motivation* に一步を進めれば、それは性格描寫に成らなくてはならぬ。そして個々人の性格から生れ出る出來事が次第に集積して、大きな破綻に導かれる事が、やがて性格悲劇である。只シェークスピアは性格研究だけで満足しない。性格研究と共に、その性格から生じ來る出來事の

活躍する世界を演出する事を欲する。それが沙翁劇を近代劇と區別する一つの點でもある。

悲劇とは何か。希臘劇と近代浪漫派の劇とで各々定義を異にすべきであるが、シユエーリアスの劇では、佛のブリュンチエール (Brunier) などの特に高調したやうに

「人間の意志が宿命や運命や又は境遇によつて反對を受ける。この様々な障害物にぶつかりながら此意志の發展しゆくさまを示す場所が即ち劇場に外ならぬ」。

此「シユエーリアス、シーザー」の場合はシーザーの意志とブルータスの意志との衝突である。ローマは共和國として發達して來た。併しシーザーその他の勇將の功勳に由り非常に廣い領土、當時の天下を悉くローマの支配の下に歸した。此廣い領土を平和に秩序正しく治めて行くには、一人の力に威勢を集注せねばならぬといふのがシーザーの意見である。彼は三度びアントニーの勸める王冠を斥け自ら帝王となる事は拒絕したが、しかし聰明と果斷とを以て治める專制政治の外にローマを統一するものはないと信じてゐたらしい。少くとも左様に振舞つてゐた。彼が常に「シーザーがシーザーが」と自からを第三人稱で稱へたのにも其心持は見える。

ブルータスはシーザーの相許した親友である。シーザーの高邁俊敏な性格を尊敬してゐた。け

れども彼は學者であつて、ローマの自由といふ事を抽象的に非常に大事な事と信じてゐた。抽象的な自由といふ美しい名も、之を具體的に實際の政治に引直して見る時、それが何を意味するか、彼は之れを明瞭に見るの識見がなかつた。そこへ主として他の理由、即ちシーザーに寵愛せられぬといふ理由でカシアスがシーザーを倒さんとし、ブルータスを祭上げ、市民に代つて自由のチャムピオンとなつてくれなどと、煽てられ、彼は之に乗ぜられてしまつた。彼れの意志は忽ちシーザーの意志に衝突し、大間違が又大間違を生じて、大なる破綻に終つた。劇は正しい意味に於ては確かにブルータスの悲劇である。

全體から云へば、これは因果應報の劇である。そして劇的皮肉の最も際立つものである。理想家のブルータスはその理想に倒れ、實際家のカシアスはその實際に倒れた。ブルータスがシーザーを倒し、之れを刺した理由をローマ市民に演説する。演説し終つたとき市民は何といつたか。

「皇帝にしよう、あの男を」(Let him be Caesar. (第三幕第二場))。

何といふ皮肉であるか。ブルータスは大事を成功したと思つた瞬間から其の大事は全然失敗であつた事を悟らねばならなかつた。シーザーを倒したのは、シーザーのやうな專制家を倒し市民の自由をあがなつてくれといふ市民の願ひがあつたからであつた。とブルータスは確く思つてゐ

た。然るにどうだ——「皇帝にしよう、あの男を」。これではブルータスのした事は只権力争奪の爲めであつて、實際のブルータスの身しやうは丸つぶれとなつた。

第一幕第一場に於て、シーザーの凱旋を迎へようとする民衆と、之を叱り飛ばして歓迎の邪魔をしようとする二人の奉行 (tribunes 町役人) があつて、此劇では廣い政治の世界が示される事を豫告する。群衆 (mob) が重大な役割を勤めるであらう事も推察される。シーザーが偉大ではあるが、誰も彼も彼に心服してゐるのではない事がわかる。

第二場に至つて、主人公シーザーが紹介せられる。又シーザー反對の人々も紹介されるので、第一場で見えたやうなローマの當時は、決して單純な政界でない事が明白になる。殊に反對の第一人者ブルータスがシーザーと鋭いコントラストをなしてゐる事が目立つ。

第三場で、急に雷雨の場になるが、丁度黒雲が次第にいつの間にか集まつて恐ろしい雷電になるやうに、自然の光景と好個の調和を保たせて、シーザーを倒さうといふ一味の陰謀が成立する。

この第三場で、シーザー暗殺の前日、自然界何となく不穩の様子にて、雷鳴電光を始め震駭すべき天變地妖や、人や獸の奇怪千萬な動作など、種々様々の不吉不祥な前兆の頻りに起る事が特筆強調してゐるのは、注目に値ひする。蓋し沙翁は性格悲劇の巨匠であるが、しかし人の性格なるものの甚だ複雑で容易に捕捉し難い事を、十分に理解してゐた。性格は時に由つて變化もする。又周圍のために非常に強く色づけられもする。性格描寫といふ事は決して容易の業ではない。シエクスピアは自然界の諸現象が人の性格や行爲に及ぼす影響を強く信じてゐたらしい。中世紀を程經ぬ人らしく迷信的でさへもあつた。シーザー倒れる前の天地の異象などは、餘りにも奇異な不思議さであるが、作者はすべて事件の發生するにふさはしい空氣環境を考へる事に非常に鋭敏であつたらしい。

第二幕に至つて、ブルータスが強く描かれ、又彼れの愛妻ポーシヤを點じて情味を深める。

第三幕の初めに、シーザーは倒れる。最後の利那 "Et tu, Brute!" (=And thou, Brutus?) "Then fall, Caesar!" 「ブルータス汝もか、さらばシーザーは倒れん」と敢て争はず、面を長衣で蔽ふて倒れた其の氣高き。代つてマーク・アントニーが立役者になる。之がやはり史劇の手法で、此劇が後の四大悲劇と一列に置かれぬ理由も、その邊にあらう。

第三幕が、シーザーを殺したやつを復讐しろと云ふ mob の恐ろしい獸のやうな叫びで閉ぢて、

作者一流のクライマックスが見られる。

そして問題の第四幕に来る。近代の悲劇とシェークスピアの悲劇とを比較して見て、誰も一體に四幕目が變だといふ事に氣づいてくる。殊に目立つのは此「ジュリアス・シーザー」の第四幕で、之では三場があり、第一場ではアントニー、オクテヴィウス、レピダスの會議の短い場面、單に彼等が有力な一團となつてブルータス一味を倒す事に力を注いでゐる事を知らせるだけ、第二場も短いブルータス等の一光景、第三場はカシアスとブルータスの喧嘩の場で、それだけでは實によい場面であり、又兩人の性格描寫としては此上ないものであるが、全體としては此三場から成る第四幕に「だれ」氣味のある事は認めなくてはならぬ。何のための第四幕？

1. 話をまとめる爲か——さうでもあらう。
2. 小さい挿話 (minor episodes) を語つて、しばらく息をぬくのではないか。第三幕で力こぶの頂點に達し、一寸一休みして、第五幕の破局カラストロフィーに到るのは、シェークスピアの意識した作法ではないか。

そして第五幕の五場で、戦争——天幕に現はるゝシーザーの亡靈——ブルータス一味の最期で、すべてが結末となる。

今ま篇中描かれたところに據つて主要人物を個々に觀察するに——

ジュリアス・シーザー

ダンテは神曲の中に Caesar armed with the falcon eyes と例の如く簡潔に記述してゐる。此眼に達識俊敏さを語り、廣し額 (broad-fronted Caesar) に寛大雅量を、四角張つた腮に鐵のやうな意志を示してゐる。

此劇でシーザーは理想的に描かれてゐない事は批評家の數々指摘した處である。即ち第一に、肉體の缺陷のひどく高調されてあるが如くいふ——

卒倒の持病あること、即ち癲癇やみ (ブルータスの物語、第一幕第二場)
瘵、即ち熱病の發作に震へがやまなかつた事 (カシアスの物語、同上)

タイパー河で弱つた事 (彼岸へ泳ぎ渡らんとして「沈みさうだ、助けてくれ」と悲鳴をあげたとカシアスの物語、同上)

左耳聾の事 (自白、同上)

第二 晩年に迷信的な事

ジュリアス・シーザー

第三 言語の高慢な事

私はシーザーに斯く肉體上や其他性癖上に弱點あり、神のやうな完全でない事を、却て嬉しく思ふ。彼も人間である。けれども彼れは萬人に拔んづる天才を持つてゐた。彼は此の偉大なる天才に由つて偉大なローマ帝國の理想を見、その建設に進んだ。此理想は最後の成功となり、彼れの缺點ある肉體の倒れた後に、却つて彼れの魂は輝いた。なるほど今日軍國主義の罵倒せられる目から見ると、シーザーのやうに他國を侵略して其人民を奴隸とし、その寶物を奪還するが如き事は、人道上由々しい事である。併しながら二千年の前に於ては、それが文明を傳播する唯一の方法であつた事を忘れてはならぬ。そして總ての人が皆社會觀念のすぐれた知識を持つに到らぬ間は、統一せられた權力に由つて初めて秩序が保たれ、又平和が維持せられるのである。乃ち「此悲劇の優越せる主力となるはシーザーの英靈なり、彼の弱き肉心、衰へんとする精力は劇の尖ばに破れて、只蒔ける種のみ後のオクティヴィアスに至りて成長し繁茂するなり」といはるゝ如く、シーザーの精神が終りまで働いて、遂に *Caesarism* 即ちイムピリアリズム(帝國主義)の勝利を語つて居る。

マークス・ブルータス

彼は理想家である、讀書子である、プラトンの愛讀者である、そして愛國心の強い紳士である。彼は鄭重であり、愛情深く、そして謙遜である。飽まで公共の心が深く、硬直で、嚴格で、アントニーのやうにお祭騒ぎをするのが大嫌ひである。

彼れは凡ての思索家のやうに、抽象的な自由といふ語に心を集中した。一旦一事に集注すると、他の事と場合を考へて廣く見直すの餘裕がない。そこへ「自由のために汝の友を殺すのが汝の義務である」といふ考へを陰謀家によつて吹込まれた。義務といはれた時、それを引受けないわけに行かぬと感じた、そこが己惚であると氣付く事が出来ない。彼にもシーザーに優つた自信と自尊心がある。彼は義務を感じて、まっしぐらに進んだ。シーザーは政治家であるが、ブルータスは政治家でなくて倫理學者である。義務に向つて直進した彼は尊敬に値ひするが、同時に氣の毒な、己れと大局のわからぬ偉人たるを免れない。

彼れの破滅は彼れの單純さから來た。彼はあはれにも洞察の明がなかつた。彼は卒然として信じた、——ローマ市民は皆彼れに求めてシーザーの桎梏から脱れん事を切望してゐると。そして實際は左様でも何んでもなく一陰謀家のカシアスの案である事を見得なかつた。これ第一の過失。第二の誤算は、マーク・アントニーの人物を見抜かなかつたところにあつた。第二幕第一場に

ジュネリアス・シーザー

於て、シーザーに深く恩誼を蒙つてゐる老獪な策士アントニーが危険ゆゑ一緒に倒さうとカシアスのいふに對して、彼は「あれの事など考へ給ふな。シーザーを愛するにして、彼一人シーザーの爲に思ひ悩んで悶死する位のものだ。それだけでもやれれば彼には過分だ、遊戯に耽り放蕩宴樂に浸つてゐる男だから」と輕視に失したり、第三幕第一場に於て、シーザー死後アントニーから挨拶を傳へに遣はした使者を還したあとで「きつと彼は立派な味方になるだらう」と油斷したりしてをる。

第三の誤算は、アントニーに演説を許した事であつた。彼れは己れの行爲の正當さを過信し、又人民が正當のものであれば必ず賛成すると過信し、そしてアントニーに較べて自己の辯舌をも過信した。冷たい論理的な、むつかしいブルータスの演説と、滑かな、感情に訴へ又目に訴へ熱あり涙あるアントニーの演説と、孰れが力有るかを悟らなかつた。

かくしてブルータスは其の過失の收獲を取らねばならなかつた。ローマを逃走し、いたい負けいくさをせねばならなかつた。其の間に妻のポーシヤは不自然な死に方をして果てしまつた。此の相愛し、敬し合つた夫婦の有様は、第二幕第一場の中に描かれて、「ポーシヤ登場」より「ポーシヤ退場」までの間に躍如としてゐる。そして彼は第四幕第三場に於て、陣營の天幕内でカシ

アスとの對話の中に、妻の死に就て斯う語る――

「おゝカシアス、私は色々の悲みで悩んでゐるよ」

「誰だつてこれ以上の悲みを忍び得る者はないだらう。ポーシヤが亡くなつたのだ」

「私の不在を耐へ難く思ひ、又オクティヴィアスがマーク・アントニーと合體し、かくも強大となつたのを悲しみ、――丁度彼女の計智と同時にその知らせは私の處へも來た。――その結果亂心し、侍女達の不在中、火を呑んだのだ」

もうそれ以上一言も云はない。暇あれば讀書に耽る彼れ。

彼れのシーザーを殺してまでも買はんとした自由は得られないどころでなく、愛したローマは混亂の巷となつた。頼みに思ふたカシアスやカスカの連中は思つたほどの高潔な人間ではなかつた。すべての幻想(illusion)は破れ、半夜陣營の天幕内に眠る能はずして暗然として涙を呑んでゐるところに、シーザーの亡靈が出るのは、當然過ぎるほど當然である。

カシアス

シーザーのカシアス評が、シーザーの人を見るの明を語つて、まづ動かぬ適評である。

「あそこにゐるカシアスは瘦せて、餓鬼のやうな風采をしてゐる、

シエーリアス・シーザー

あまり考へすぎるのだ、あんな男は危険だ。

.....
もつと肥つてゐたらなあ！なに怖れはしない。

だがたい、このシーザーが物怖ぢすることがあるとすれば

あの貧相なカシアスこそ第一番に遠ざけたいと思ふだらう。』(第一幕第二場)。

Yond Cassius has a lean and hungry look;

He thinks too much; such men are dangerous,

.....

Would he were fatter! But I fear him not;

Yet if my name were liable to fear,

I do not know the man I should avoid

So soon as that spare Cassius.

理想を夢みるブルータスに比して、彼は全くの現實に醒めた人、その目は鋭い。他人も自分も鋭く批判する。

併し決して悪むべき人間ではなく、敬すべき幾多のものを持つてゐる。熱もある。普通の皮肉

な政治家のタイプ。

カ ス カ

彼は出しやばりやで、妬心がある、皮肉なユーモアもある。

マーク・アントニー

Brilliant figure とは此の人、天才もある。感情も純なものがある。勇敢でもあり、策のある男で、決してどうしていか困つて了ふ事はない。無論なかなかの野心家。だが主義の人ではない。所謂る目的の爲めに手段を選ばない。手段など前からあまり考へてやる方でない。そして肉慾追求者である。歡樂を追ふてやまぬ遊蕩漢でもある。併し此輕薄なやうな遊蕩的な底に、なかなか眞面目な感情もあり、しつかりしたところがある事を、ブルータスと共に見逃してはならぬ。さもなければクレオパトラの愛人になれぬ。

彼はシーザーの崇拜者である。シーザーの聰明と果斷とに無二の信頼を置き、そして國家は今や一王のもとに専制政治を行ふべき時近しと知り、三度び彼に王冠を捧げんとした男である。そしてシーザーから報ひられて彼れの片腕の如き觀がある。アントニーはシーザーの下にあつて充分に満足した生活を送つてゐる。彼は健康な肉體と快活な性質とを有つてゐて、その盡きざる活

力に加へて、あるがまゝの現状満足者、現世享樂者である。シーザーのとくに觀破したやうな現狀不満足な、何か考へごとをしてゐる、瘦せて眼のみ光つてゐるカシアスの直反對である。彼は競走もやる。大酒も飲む。一般民衆と伍して酒杯を取かはす事を少しも賤しいとしない。そこで彼には人氣がある。

そして彼れは天才的の政略家である。巧妙を極めた煽動家である。機會が見える。その機會を把える事もできる。一旦利益ある機會を得たら、それをグングンドこまでも利用する。

カシアスの策略圖に中り、愚直な倫理學者のブルータスはそれに乘せられてシーザーを議事堂に刺した。此利那にアントニーは居合はさなかつた。腕力の強い、そして勿論シーザーの無二の腹心であるアントニーの居合はす事は陰謀者につつて不便であるといふので、一味のトレボニアスは彼を外へ連れ出したのである。やがて此大凶事の報が傳はると、流石のアントニーも一旦驚いて家に歸るが、すぐに決心したと見えて使をブルータスに送り會見を求め、許されて時を移さずやつてくる。

O mighty Caesar I dost thou lie so low?
Are all thy conquests, glories, triumphs, spoils,

Shrunk to this little measure? Fare thee well.

「おゝ偉大なるシーザー！あなたはかくも賤しく倒れてゐなさるのか。百戦百勝の功績も榮光も凱歌も戦利品も僅か此五尺の大きさに縮つて了つたのか。さやうなら」(第三幕第一場)

と僅か三行ではあるが心からの手向をし、そして仲直りと見せかけ、シーザーの吊辭を述べる事を許される。All logieのブルータスの演説に對し、感情に懇へ、やがてシーザーの遺言狀を出して市民の好奇心と主我心に懇へ、又外套を出して直に目に懇へ、シーザーが野心家であつたといふブルータスの批難には一言も答へないで、民衆を抱き込んでしまふ。

恐らく世界の歴史上、一枚の舌が之ほど力強く動き、そしてその動き方一つの爲めに歴史の経路の一變した例しは他にはない。

アントニーの爲めに煽動された群集の力に恐れて、陰謀者達は忽ちローマから逃出さねばならぬ破目になり、天下は殆どアントニーの天下、實權はいざ知らず少くとも聲望から云へば此上なきものになつた。そして大シトラーの甥オクテヴィアス・シーザーと共に轡を列べてシーザーの爲め復讐の軍を起し、遂にフリッパの原頭でブルータス初めカシアス、カスカの一味を悉く滅ぼし、天下の實權を握る事になるのである。

此ブルータスが戦ひ敗れて自殺して果てた時にもアントニーは涙を垂れて、「此人こそ萬人中の最も高潔なローマ人であつた。大自然も起立して全世界に向つて言はう、これこそ男だ！」(第五幕の最終)と此偉人を吊ふてゐる。それほどに熱がある、純情を以て動く。こゝがオクテーヴィアスと餘程違つた人物である。

オクテーヴィアス

彼はどんな男か。此劇に彼が出て来るのは、第四幕第一場で六せりふ、第五幕第一場で九せりふ、同第五場で四せりふ、即ち此三場に出て十九回口を利くだけだが、それ丈けでゐて、彼がよしんば大シーザーの甥にして嗣子といふ估券があるにしろ、弱冠の身にして、年長のアントニーと並んで天下を分ち掌握する人だといふ事を首肯させる。冷たい、あくまで理智的な、用のないのに駄辯を弄さない、用心深い(人の批評をしない、人に先んじて意見を述べない)。第四幕第一場でアントニーがオクテーヴィアスに對し、あいつは極つまらない男で使にやる位が相應だとしてレビダスをコキ下ろし、

And though we lay these honours on this man,
To ease ourselves of divers slanderous loads,

He shall but bear them as the ass bears gold,
To groan and sweat under the business,
Either led or driven, as we point the way;
And having brought our treasure where we will,
Then take we down his load, and turn him off,
Like to the empty ass, to shake his ears,
And graze in commons.

我々はその男にいろ／＼の榮職を與へ、
紛然たる誹りの重荷を分擔させはするが、
彼が榮職を擔つてゐるのは、丁度驢馬が黄金を擔つてゐると同じで、
大任のもとに喘いだり汗かいたり、
引張られたり、追立てられたり、我々の指圖のまゝに、
我々の欲する處へ寶物を運んでしまへば、
その荷物をおろして追ひ拂ふ、
荷輕になつた驢馬のやうに、耳を振つて、

共同牧場で草でも食へばいゝ奴だ。

と無遠慮に罵倒して快とする（萬一レビダスが其れを聞いたら好い氣持はしないに相違ない）に引きかへ、オクテヴィアスはレビダスに對する批評を一向しない、深謀遠慮の政治家の風がある。しかも實際レビダスを斯様な目にあはすのは、アントニーでなくオクテヴィアスである。

全篇を通じて、それぞれの性格描寫があるが、しかし一貫した力に缺けてゐる。シーザー、ブルータス、アントニーとそれぞれに分れて興味が散り々々になる。それが缺點と見えよう。しかし性格描寫として、例へばシーザーを殺したすぐあと

Mellus—Stand fast together, lest some friend of Caesar's

Should chance—

Brutus—Talk not of standing.

メテラス 一同集つて結束してゐよう、若しやシーザーの友人が——

ブルータス 集つてゐようなどと云はないで下さい。（第三幕第一場）。

いかにも學者らしい、一寸言葉とがめする。そして何かいつも一言なかる可らざる様を示す。

更に著しるのは

Ant—Octavius, lead your battle softly on,

Upon the left hand of the even field.

Oct.—Upon the right hand I; keep thou the left.

Ant.—Why do you cross me we in this exigent?

Oct.—I do not cross you; but I will do so.

「オクテヴィアス、君の軍隊は靜かに平野の左手を進んでくれ給へ。」

「私は右手を行かう。君は左手に據つてくれ給へ。」

「なぜ君はこの危機に際して、私に逆らふのか？」

「逆らひはしない。たゞさうするだけだ。」（第五幕第一場）。

「君に逆らひはせぬが、僕はさうする（右手に行く）のだ」と、冷々然として飽まで自ら爲さんとする所を爲し我意を貫く *egoiste* の面目が眼前に浮び來るではないか。

これを要するに、此篇は政治的興味と劇といふべきである。

政治の世界、現在の力を把んで生きる政治、想像でない、深い情緒でない、過去を考へ將來を

想ふ事はあつても一切を現在に賭する人、それが政治家、その人の勝利と敗北、なやみと喜び、それを描いたのが「ジュリアス・シーザー」である。

即ち此劇は後の四大悲劇その他ほど人性の深く秘めた秘密をあばく力なく、又緊密な藝術品としても左ほど大なるものではないが、やはり人の心の様々な「あや」を巧に示し、政治の動く不思議な動力を語り、廣い世界を我々の前に見せ、又豊かな修辭に觀衆の心を充分に握り得る劇で、人氣のある事も又敢てあまり他に劣らぬ作であるといひ得る。

20. Twelfth Night; or, What You Will.

「十二日夜」

五幕、一八場、總行數二五〇五。

イリ、ア (Ilyria. 希臘の北方の沿海地方、紀元三世紀頃勢力ありし一王國) の公爵オーシーノ (Orsino) は、同郷の富める伯爵夫人オリヴィア (Olivia) に思ひを寄せ、通はず文の度重れども、曾て色よき返事を得ぬ。然るにこのたびセザリオ (Cesario) と名乗る若き従者を雇ひ、其乞ひに任せて之れを文使ひとした處が、オリヴィアは却て此若者を愛し彼に逢ふを樂しみに、以前の如く無下に公爵の使者を追返すことをせぬ。此セザリオと云ふは實はヴィオーラ (Viola) と呼ぶ少女にして、道に難船に逢ひて双生児の兄セバスチャン (Sebastian) と別れ、此港に流れ着きて漸く一命を拾ひ、男装して仕を公爵に求めたのであつた。(以上第一幕)。

ヴィオーラは此主人に向つていつとはなく人知れず戀の奴隷となる。

オリヴィアの家には彼女の伯父なる醉漢サー・トービー・ベルチ (Sir Toby Belch) といふ呑氣爺が出入し、其友にて愚かなる郷士サー・アンドリュー・エイギューチーク (Sir Andrew Aguecheek)

といふが、オリヴィアに及ばぬ戀に焦れてゐるのを利用し、いつか望みを叶へしめんと欺きては小遣の代を作りつゝ、之に氣樂な侍女マリア(Maria)、茶坊主フーレスト(Forest)を加へ、更の關くるをも顧みずして盛に飲み且つ歌ふて止まぬ。オリヴィア其煩しきに耐へ兼ね、三大夫マルヴェーリオー(Malvolio)に命じて彼等に謹慎せん事を傳へしめる。此マルヴェーリオーといふが又稀代の己惚漢にて限りなき氣障男、かねて家人の指彈を受けて居たのであつたが、此使命に立ちて遂に彼等の怒りを買ふ。

マリアを筆頭とせる反三大夫派は、オリヴィアの筆蹟に似せて一通の無名の懸想文を作り、マルヴェーリオーに之を拾はしめる。(以上第二幕)。

彼は之を見て正しく己れに宛てたるものと思ひ込み、其文中に記せる如き異様の風采をなし、女主人オリヴィアの前に出で、極めて眞面目にいと可笑しき振舞をする。オリヴィアは此有様を見て彼れ狂せりと思ふの外、解釋の仕様がな。遂に命じて座敷牢に入れる。

男装のヴィオーラに對するオリヴィアの熱は日に昂進する。愚なサー、アンドリュー嫉妬を感じざるを得ぬ、そこを茶氣漫々たる氣樂者どもが油をさし、遂に彼を強いて此少年に挑戦状を送らせる。臆病極まる田舎郷士の挑戦を受けたヴィオーラは流石に色を失ふたが、刀を佩ける手前拔かぬ

わけには行かぬ。幸に警吏の來るに逢ふて事なきを得た。(以上第三幕)。

敵の弱きを見て少しく豪語を放ち得るに至つたサー、アンドリューは重ねて少年に逢つて又戦を挑む。所が今度は先きの刀持つ手もわな、ける少年ではなくて、姿なり言葉なり寸分の相違はなけれども、之も漂流して此地に上陸した其同腹の双生兒セバスチャンであつた。委細の様子は分からぬど罵られて退く可きに非ずと、挑戦に應じて散々に郷士をいため付ける。

物音に驚いて走り出たオリヴィアは、少年の事なかりしを喜び、手を取つて家に引入れ、様々熟るなる物語がある。夢に夢見る心地のセバスチャンも悪るからぬ事なれば、遂にオリヴィアの意に任せ竊に僧堂に赴いて結婚する。(以上第四幕)。

セバスチャンが命の親なる船長は海賊といふので捕へられ、公爵の許に曳かれる。そして其傍なるヴィオーラをセバスチャンと思ひ、其不信を責める。頗る迷惑してゐるヴィオーラに向ひ、其時入り來つたオリヴィアは我が夫として話しかける。公爵は扱は我が爲に使ひすといつて實は自ら求婚して居たのかと腹を立てる。僧官も來て、確に結婚の式を司つたことを申立てる。ヴィオーラは殆ど何と云ひわくるすべも知らぬ所へ、セバスチャンが入り來る。見ると何れを何れとも分かぬ瓜二つ。初めて謎は解けて、公爵はヴィオーラの戀を容れる。入牢中のマルヴェーリオー

も免される。(以上第五幕)。

此喜劇の書かれた年代については一六〇〇乃至一六一三年の間に種々の説がある。

21. Troilus and Cressida.

「トロイラスとクレシダ」

五幕、二五場、外に序詞。總行數三三四二。

希臘軍がトロイ(Troy)城を包圍した第八年目のこと、トロイ王プリアム(Priam)の第二子トロイラス(Troilus)はトロイの僧官の娘クレシダ(Cressida)を戀慕し、婦人の伯父パンドラス(Pandarus)に乞ふて、其仲介者たらんことを求める。此時兩軍の間に休戦成り、希臘軍は包圍の遅々たるに倦き果てゝゐる。折柄トロイ王の長子ヘクター(Hector)は一騎打ちの挑戦状を送つて来る。彼の意は希軍の主将アキリーズ(Achilles)と決戦を試みんとするにあるのだ。(以上第二幕)。

此休戦中に希臘軍はヘレン(Helen)を返へし償金を差出す條件にて講和を提出したが、トロイ軍に拒絶せられて、更に總攻撃を行ふことになる。そして彼等は大将アキリーズに會見を求め、ヘクターの挑戦に應ぜんことを乞はんとしたが、心に不満なることありて、久しく己が陣營に引籠つてゐた大将は、之を峻拒する。致方なく他の大将アジャクス(Ajax)をしてヘクターに向はし

める。(以上第二幕)。

王子より戀の仲介の依頼を受けたパンダラスは、漸く其目的を成就し兩人が密會の機會を作り、茲にトロイラスとクレシダとは永く變らぬ誓約をする。然るにクレシダの父なる僧官は、實は久しく希臘人に内通してゐたのであつたが、此時敵人に乞ふて、捕虜とせるトロイの大將と、乙女クレシダの交換を申込ませる。(以上第三幕)。

希臘人は其使者として、若き大將ダイオミーデーズ(Dionetes)を送り、クレシダが結婚の翌朝、泣き悲しめる新婦を陣營に連れ歸る。これも軍の習ひであれば王子トロイラスも詮すべなし、只互に行末を誓つて別れるのである。アヂュクスは挑戦に應じて敵陣近く進み行き、勇將ヘクターと双を交ゆる事數合ならぬに、早くも休戦の喇叭が聞える。何事かと聞くと、此兩人は遠き親縁の者である。血と血と相争ふは面白からぬといふのである。又休戦と成り兩軍の將士は互に歡語を交して軍旅の鬱を慰める。(以上第四幕)。

王子トロイラスはクレシダを懷ふ戀慕の情に耐へ兼ね、希軍の大將ユリシズ(Ulysses)に哀願し、相伴はれて女の幽閉せられた所に到り見ると、こはそも如何に、深く信じてゐた女は、先に使者として來りし大將ダイオミーデーズと蜜の如き言葉を交してゐるではないか。ユリシズ

ズに誓つた手前、何とする事も叶はず、空しく齒噛みをして退く。そして翌日の會戦に戀の敵の兩人は恨を含んで接戦するのであるが、何れも勝敗が定まらぬ。かゝる内にヘクターは卜者なる妹カサンドラ(Cassandra)の止むるをも聞かず、再び戦陣に赴いてアキリーズの親友パトロクラス(Patroclus)を討ち取る。之を聞いて初めて激怒を發した希臘の勇將は決然立つて戰場に向ひ、ヘクターを屠りて其死屍を馬の踵に結び、トロイの陣前を引づり歩く。(以上第五幕)。

此喜劇の書かれた年代は大凡一六〇一乃至一〇年迄の間。

22. All's Well That Ends Well.

「終宜きは皆宜し」

五幕、二三場、總行數二八〇九。

「ハムレットの正反對にて『斷乎として清き目的に向つて、不言實行するヘレナ(Helena)は、コーリリヂの呼びびて『沙翁の人物中の最も愛らしき者』となす婦人である。彼女は佛國の名ある國手であつた父の死後、ルーシヨン(Rouillon)の伯爵夫人の家に養はれて人となつた。そして夫人の一子バートラム(Bertram)を人知れず戀ふるのである。夫人は其素振りを見て取つたが、彼女の賢きを知つてゐるので敢て故障を入れようとしなない。然し當のバートラムは彼女の身も靈も捧げたる戀に一瞥をも與へない。只管功名の心に驅られ、家郷を離れて佛王の宮廷に宮仕へする。

此時に當つて佛王は不治と云はるゝ病の床に伏して居る。ヘレナの父なる名醫にして存命せばと願ふのであるが、彼は既に墓に入つて六ヶ月である。此事を傳へ聞いたヘレナは、父が存命中に學び得た手法を用ひて之を治せんと志し伯爵夫人の許可を得る。(以上第一幕)。

彼女は王廷に赴き、強いて國王に謁見を求め、治療若し成らば其報酬に、我が撰む男に嫁がせ

給へと乞ふて治療にかゝる。治療は成功して、バートラムは王命黙し難く、兼ねて我家の厄介者と下げしむヘレナと結婚せねばならぬ。然し彼は飽迄之を嫌つて、式の終るや否や、花嫁に接吻も與へずして王廷を奔し、フロレンス(Florence)の戦ひに赴く。(以上第二幕)。

氣の毒なヘレナは名許りなる夫の手紙を持つて伯爵夫人の家に歸る。夫人に宛てたる手紙には彼女が嫌だから家を捨て、仕舞ふとあり、自分へのは、我手なる傳家の此指輪を得る迄、又我れに由つて一子を得る迄は夫と呼ぶ可らずとある。捨てらるゝ身は詮方もなし、恩義ある家に我れ故其嫡子を失はしむるに忍びずと、巡禮姿に身をやつし、彼女は竊に家を去つて夫の居るフロレンスへと志す。

バートラムは武勳に依つてフロレンス公の寵愛を得、騎兵の大將に任ぜられ、勇名をさをさ遠近に聞こえてゐる。彼の友にはフォールスタッフに次で滑稽洒脱なるパロレス(Parolles)などゐる。そして彼は此町の寡婦の娘ダイアナ(Diana)といふに不名譽なる戀を迫つてゐる。ゆくりなくも此寡婦の家に一夜の宿を借りしヘレナは、一策を案じ我が身を打明けて寡婦と其娘との同情を得る。(以上第三幕)。

彼女は其援けに由りてバートラムの手よりかの傳家の指輪を得、そしてダイアナの如くに装ふ

終宜きは皆宜し

二四七

て、闇と無言の間に一夜を彼と送り、彼の手に曾て王より賜はりし指輪を送る。

母の手書を得て歸心忽ちに矢の如きバートラムは再び家郷を訪れ、母なる伯爵夫人がヘレナを亡き者と思ひ、喪に服してゐるのを見る。(以上第四幕)。

そこへ佛王の訪問がある。佛王は無断にて王廷を走りしバートラムを宥し、改めて或る貴婦人を其妻にすることを許さんとする途端に、彼の指に我が曾てヘレナに與へし指輪を發見した。バートラムはいかにして此指輪を得たかに付いて明白な説明をなし得ぬ。王の疑は愈々鋭く成る。其途端にヘレナが現はれて、バートラムが「決してあるまじ」と笑つて與へた二個の條件の成就したことを述べる。悔悟した此愚かなる夫は、「深く〜」ヘレナを愛するといつた。(以上第五幕)。

此喜劇の題は「戀の上首尾」とも譯し得べきもの。其作の年代は一五九〇—一六〇六年までに種々の説がある。

23. Measure for Measure.

「尺 二 尺」

五幕、一七場、總行數二七〇四。

ウィエンナ(奥太利の首都Vienna)の領主ヴィンセンシオー(Vincenzio)は、領内の風紀次第に頹敗せんとすることを憂ひ、之が改良を計らんと欲し、親ら民情を探るため、突然外國に旅行すると稱して王宮を離れ、其跡には日頃公明潔白の名聲ある弟アンジエロー(Angelo)及び老臣を代理となし、自らは托鉢僧に扮して町に止まる。

此町にクロードイオー(Claudio)と呼ぶ青年あり、若氣の誤りにて許嫁の婦人ジュリエット(Juliet)を懷妊せしめ、急ぎ結婚の式を擧げんとせしが、事發覺して捕へられる。これ今は用ひられずして程經たる舊法に觸れるので、苛嚴なるアンジエローは、之をよき見せしめにと法を充分に適用して、若者に死刑の宣告を下すのである。之を聞いたクロードイオーの妹イザベラ(Isabella)は、今し尼院に赴きて法門に入らんとするところであつたが、兄の危急を聞き、急いでアンジエローの許に到る。(以上第一幕)。

尺 に 尺

アンジェローは改革を欲するに急にして、慈悲の涙を注ぐ暇がない。イザベラが哀訴も始めは無効であつたが、彼は此會見にイザベラを見てより、其冷酷なる性格の奥底に潜んでゐた情火が急に燃えそめ、重ねて女が兄を思ふ真心に熱誠を込めた願ひをなすに及び、女の貞操に換へて兄の命を救ひやらんと言ひ出した。(以上第二幕)。

心清く徳高き乙女は之を聞いていたく憤り、直に兄の獄舎に赴き、此上は唯最後の用意をと願つた。クロードイオーも初めは妹の此覺悟を尤もと思つたが、死といふ事實が次第に迫るにつれ、恐怖の心を生じ、我が爲に操を破つて呉れと云ひ出した。云ひ甲斐なき此願出に憤を發したるイザベラは、此上は運命に任す外詮すべなしと、獄舎を去らんとしてゐる所へ、此話を立聞きしたる領主なる托鉢僧現れ出で、竊かにイザベラに一計を授ける。それは表にアンジェローの意に従ふが如く装つて兄を救ひ、實は彼が許嫁にて今棄てて顧みざるマリアナ(Mariana)といふの身代りとしてアンジェローと逢はしむるのである。(以上第三幕)。

領主はイザベラをマリアナの家に連れ行き、委細の計畫を立てる。アンジェローはイザベラと思ひ込んだる女と目的を遂げ、而して兇惡にも時を移さずクロードイオーを所刑する命を傳へる。此命令の獄舎に達する時には領主なる托鉢僧は、同じく若者の死を憐れむ獄卒と蹀し合せ、折柄

死んだ惡漢の若者と似たるを幸に、其首を以てクロードイオーとなしアンジェローの許に送らしめ、そして自らは明日歸國すべしといふ手紙を傳へしめる。(以上第四幕)。

領主は翌日城門に現はれ、百官の出迎へを受ける。そこへイザベラは一僧に伴はれて出で來り、兄の生ける由を知るわけもなければ、アンジェローの不義不信を責めて領主に哀訴する。領主はわざと怒れる如くにして彼女を連れ行かしめる。そこへマリアナも來りて同じくアンジェローの誠なきを責める。領主は其裁判をアンジェローに任せ、退いて僧服に改め、證人として再び出で來る。來りて遂に其僧服を脱して領主なるを示し、アンジェローの不義を叱責し彼の適用せんとせる法律を用ひて、一旦マリアナと結婚した後、死刑に處する旨を宣告する。返すに言葉なきアンジェローは刑に服従する外はない。そこへ妻マリアナの命乞ひがあり、イザベラも其罪を許して又赦免を乞ふて止まぬ。由つて之を許し、クロードイオーを獄より出してジュリエットと結婚せしめ、自らは徳高きイザベラに婚を求める。(以上第五幕)。

此の皮肉な喜劇は沙翁劇中「悲しい圓滿劇」の唯一の例。一六〇三—四年の作にかゝる。

24. Hamlet, Prince of Denmark.

「クハマークの王子ハムレット」

(「世學文學全集」中著者所譯「沙翁傑作集」並に婦人之友社發行者の「ハムレット物語、マクベス物語」参照)

五幕、二〇場、總行數三七七七。

デンマークの王子ハムレットは王宮の番兵達から、彼の亡くなつた父に酷似した幽霊が胸壁に現はれたことを聞き知る。ハムレットは其の幽霊に會つて、出来ることなら、少なからぬ疑問を懐いてゐる父の死の眞の原因を知らうと決心する。彼は幽霊が次の晩現はれた時、それに面會して彼の懐いてゐた最悪の懸念が事實である事を確信するに至る。故王の弟クローディアス (Claudius) は王位に即き、先王の妃と結婚したが、實は王の睡眠中之れを毒殺したのであつた。ハムレットは秘密遵守と復讐とを命ぜられ、やがて幽霊は消え去る。ハムレットの従者達は此出來事に就ては何事も口外しない様にと誓ひをさせられる。(以上第一幕)。

父の亡靈からの消息と、己れに課せられた恐ろしい復讐の仕事とのため煩悶したハムレットは、

伴つて狂氣を装ひ、それによつて己が計畫を隠さうとする。彼はその愛人、宮廷の高官ポローニアス (Polonius) の娘、オフィーリア (Ophelia) 宛に、辻褄の合はない熱烈な數々の手紙を書く。折しも旅廻りの役者の一團が王宮に到着し、ハムレットの提言により或る劇が、王と王妃その他數多の廷臣達の前で演ぜられることとなる。(以上第二幕)。

その劇はヴェニス或る公爵の殺害に係つたもので、公の未亡人は後に至つて、その殺害者と結婚するといふ筋である。この物語はデンマークの崩御された王の場合と非常によく似てゐる。開演中ハムレットは役者達には氣を配らず、叔父の顔色と舉動とを熱心に注視してゐる。ハムレットの疑ひ通り、叔父は己が罪をまさしくと見せつけられた苦しさ耐へかね、周章その場を去る。ハムレットは最早幽霊の消息の眞實である事を疑ふ餘地がなくなつたので、今こそ復讐を遂行せんと意氣込む。

母の王妃はやはり此劇にいたく心を擾され、ハムレットを呼び寄せて彼を叱る。ハムレットは却つて、母を散々に非難する。故王の亡靈が折よく現れなかつたら、彼はもつと亂暴な仕打をしたかも知れない。オフィーリアの父、ポローニアスは此の會見を密偵中、王と間違はれて、ハムレットに刺し殺さる。(以上第三幕)。

ハムレットの追放が決定される。彼の舊い學友二人が彼を英國に置き去りにして来るやう命ぜられる、その地でハムレットを死に致すべく英國王に依頼してある手紙を彼等は持つてゆくのである。然しハムレットの方で畫策宜しきを得たのと、運が好かつたのとで、事實斯く成り行かず、却つて此の二人の共犯者が首を刎ねられる。ハムレットは本國へ歸る。其處で彼は、王や王妃や廷臣達の居列んだ若い女の葬式に出逢ふ。ハムレットが家に歸つた時は、丁度オフィーリアが埋葬される時であつた。この不幸な乙女は、戀人の發狂や、父の非業な最期や、兄レアーティーズ (Laertes) の留守などのことで、それからそれへと思案の斷え間なく、そのため發狂してゐたので、數日間、歌をうたつたり、花を撒いたりして、宮庭を彷徨ふて、やがて川の堤へ行つて、其處で溺れてしまつたのであつた。(以上第四幕)。

それがオフィーリアの葬式なるを知ると、ハムレットは悲歎の餘り狂せんばかりになる。彼は墓の中へ飛び込んで、レアーティーズと言ひ争ふ。レアーティーズは彼の一家に降りかゝつて來た今度の禍の原因は凡てハムレットだと思つて、彼を殺さうと欲する。王のクローディアスはレアーティーズがハムレットに對して懷いてゐる怨恨を知り、之れを利用してハムレットを亡き者にせんとする。彼れはハムレットに劍術の仕合を勧める様にとレアーティーズに助言する。レアーティーズ

の劍には毒が塗られてある。ハムレットは少しも怪まないで宮庭の前の武術の仕合を承諾する。王は萬一ハムレットが劍を免れた場合にもと、毒を入れた酒を用意して置く。二三合の手合せの後、王妃はハムレットの健康を祝さうとして、思はずも毒杯をあほる。レアーティーズはハムレットを傷けるが、組打中に劍を取り換へて、今度はハムレットがレアーティーズの毒劍で彼れを傷ける。王妃は嚮に飲んだ毒藥の酒のため死ぬ。レアーティーズは斃れるが、死ぬ前に己れの罪深い計畫を白狀して、王子の許しを切に乞ふ。ハムレットは垂死の力を以て、王に打向ひ、この僭王の心臓を橋も通れと刺し貫く。(以上第五幕)。

此篇の書かれた年代に關しては、一五九七—九八年説、一六〇〇年説、一六〇二—一六〇三年説等がある、作者圓熟期の頂點(四十歳前後)の作の一。其劇作中の最長篇。

古來「ハムレット」は沙翁劇中の白眉であり、作者は最も力を此一劇に注ぎ、その人生觀、その哲學は概ね之によつて窺はれるといはれた。けれども其れは近來寧ろ疑はしいとなされ、作中の著大なものであつても、特に此作に限つて其の全精力を注いだと見るのは當らないといふ事になつてゐる。まして沙翁は自らの一小人生觀、一小哲學を其の著作に織込むのを以て本願とはしな

いのであるから、此「ハムレット」に於ても例外であると観るわけにゆかない。しかし作者自ら熟考し校訂したと考へらるゝ二つの餘程内容の異つた原本が発見せられた事を見ても、作者も餘程重大視した作ではないかと思はれる。兎に角、作者の著作中第一の傑作であり大作であり名篇であつて、最も廣く讀まれ最も周く知らるゝものであることは、争はれない。

乃ち「ハムレット」が古往今來最も人氣ある作である事は恐らく斷言し得るのであるが、その人氣がある一點に就て、昔と今と同じやうに人氣があるのでなく、時代を異にして又人氣の理由を異にするのは興味ある事實である。此作の出た頃の其の人氣は主として、最も多く當代人の要求する分子を兼備してゐたからと察せられる。當代人の要求する分子とは舞臺の上に於ける活躍である。しかも超自然的な不思議なものを見んとする願ひである。それが「ハムレット」には遺憾なく含まれてゐる。亡靈、にせ氣狂ひ、本氣狂ひ、毒殺、血闘、復讐、それ等のものは、今でもであるが殊に當代人の非常に喜び迎へたものであつた。それ等の要求が此劇に於ては十分に充足される。

下つて十九世紀初頭、ロマンティシズムの勃興する頃には、此劇は天下に二なき藝術品の如くに稱讃された。蓋し其なかにはロマンティシズム隨喜者の要求する殆どすべてのものがある。不思議な

議な神秘の境、限りなき憧憬、その充たされぬ惱ましき、感情のみ昂り意志と決斷の力が之に伴はない歎きなど。かのハムレットが親友なる哲學の學徒ホレーシヨに呼びかけたる一言

*There are more things in heaven and earth, Horatio,
Than are dreamt of in your philosophy.*

ホレーシヨよ、天地間には君等の哲學の夢想する以上のものがある。(第一幕第五場)。

の如きは、天地の玄妙神秘は哲學者の哲學論の能く盡す所にあらざるを道破して、實にロマンティシズムの精髓を把えたものゝやうな觀があつた。明治三十六年五月華嚴の瀑に投身の魁をなして知識階級の間にセンセーションを惹き起した十八歳の厭世青年藤村操が「巖頭の感」に

悠々たる哉天壤、遼々たる哉古今、五尺の小軀を以て此大を測らんとす。ホレーシヨの哲學竟に何等のオーソリチーを價するものぞ、萬有の真相は唯一言にして悉す、曰く「不可解」。我この恨を懷いて煩悶終に死を決す。既に巖頭に立つに及んで、胸中何等の不安あるなし。始めて知る、大なる悲觀は大なる樂觀に一致するを。

と書いた其の「ホレーシヨの哲學」云々とは即ちハムレットの此句を採つて言つたものである。

更に近代人のハムレットに多くの興味を感ずるのは、また稍々異つた意味に於てである。我々

の多くは茲に人生に對する一種の *disillusion* の子、人生に對して熱と愛と味とを失つた寂しい魂を見る傾きがある。即ち理想が裏切られ現實が曝露されて幻影の消滅に憫む者は、彼れにわが心の姿そのまゝを見出すのである。

劇「ハムレット」は主人公ハムレット一人の劇、內的な精神的なハムレット其人の劇である。そこで之を充分に理解する爲めには、初幕の幕がまだ上らぬ前のハムレットを想像しなくてはならぬ。元來ハムレットの性格は、吾々の極の親友の性格を考へる時、全體の輪廓は容易に考へられて、しかも些細に檢するに及んで、甲とも乙とも色々に解釋が出て來るが如く、實に複雑極まる性格を有つてゐる。そこにハムレットのいひ知らぬ引力がある。こんな複雑な人物はあり得ないといふが如き意見もあるやうだが、私は寧ろ、作者がそれ程に複雑で然かも一個の個性として明瞭な統一ある印象を與へるのに驚くといひたい。

まづハムレットは威嚴と優雅と寛大な點を備へてゐる好青年である。そして武人である。中々勇氣もあり、劍道にも秀で、決して肉體的に妄りに恐怖などすることはない。併し氣質は神經質、感

情や氣分の變化が極めて早い。極めて感受性に富んで居る。外物の印象を受ける事が非常に鋭い。詩は作らないが詩人に尊い想像力、哲學者に重要な内省力は強い。ことごとく自分のことを振り返つて見る。我を忘れて喜んでゐるかと思ふと、忽ち吁此自分はどうだとすぐ反省する。父母に對して孝心が深い、情も厚い、そして悪いものについては心から嫌ふ。無論智力がすぐれ、人生に對し、人性につき理解する力も早い。又物事を考へ出す力は無限の源泉を持つてゐるやうに混々として盡きない。それからあの機敏な對話は全く人を恍惚とせしめる。

此様な性格の持主なるハムレットは、「獨逸のアセス」ウィツテンバーグの大學に留學してゐたが、父王の崩御の報知を得て急遽歸國した。病氣の報知もなかつた。歸つて見れば葬式は済み、父の死骸も認めぬ。あまり突然の事で何と考へてよいか分らぬうちに、王位は父の弟クロードィアス——日頃大嫌ひの叔父——の手に入る。ハムレットは王位に戀々とはしないが、決して愉快な事ではない。併し何よりも不愉快なのは兼ねて敬愛してゐる母——一人兒の男の子の母に對する愛は格別。私共のやうな不孝者でも母が毎々聖母マリヤのやうに心にうつる——が、「脆きものよ汝の名は婦人なり」*Frailty, thy name is woman* で、まだ父の喪による涙の乾かぬうちに、

人もあらうにあの叔父めと結婚した。彼は人性の善良さを深く信じてゐた。わけて父も母もすぐれて善良であると思つてゐた。此やさしい心に大打撃は来た。あゝ面白くない、人生は何て不愉快な事に満ちてゐるのだらう、自分はもう生甲斐はない、寧ろ自殺でもしたいと、思ひに沈む。

O, that this too too solid flesh would melt,

Thaw, and resolve itself into a dew;

Or that the Everlasting had not fixed

His canon 'gainst self-slaughter! O God! O God!

おゝ、この硬い硬い肉の、溶けてとろけて露と散じてしまつたならば!

もしくは自殺を禁じたまふ神の掟さへなかつたならば! 噫!

そこへ親友ホレーショが警護の武士兩人と共に来て不思議な亡霊の出現を語る(第一幕第一場)。さうか。これは不思議な事である。どうも自分も何となく今回の事は唯事でないと思感してゐた。では、どうあつても、その亡霊に逢つて見なくてはならぬ。

そこで第一幕第四場となり、再び亡霊は出る。ハムレット一人をさし招く。第五場に代つてハムレットは最早行くまじきといふ海岸にて初めて亡霊は口を開く、地獄の底からもれ出るやうな

聲で「われ庭園に眠りてありしとき毒蛇來りて我を刺せりと巧みに言ひふらし、デンマーク全土の耳をまんまと欺いてそなたの父の生命を刺し留めた其毒蛇は、今王冠を戴いてゐるのだ」。聞いてハムレットの驚きと悲みは、どんなであつたであらう。「復讐は甘し」Revenge is sweet. と云ふ、しかし其れはハムレットの如き性格の持主のいふ事ではない。甘いどころか最も苦い。最も仕たくない仕事である。しかも、それを是非決行せよといふ亡き父の命である。

若し此場合にハムレットの性格とは違つた性格の者を置いたらどうであらう。そこに性格悲劇の妙味がある。そして我々も人が各々異なる性格を有つてゐる事を學び一層人とその爲す所に對し寛容なるを得るのであらう。異なる性格を有つた者は同じ境遇に置かれ、同じ事件に逢つても、それぞれ違つた反應をする。違つた行爲をするから又違つた境遇を作つてくる。此の妙味を描いたものが性格悲劇であり又沙翁の悲劇である。

此劇中には不思議とハムレットと殆ど同じ境遇にある二人の若者が出て来る。そして其行動は全く違つてゐる。一人はノールウェー王子フォーンブラスである。彼れも父の死後、その位は伯父の手に渡つてゐる。そして彼れは父の仇、ハムレットの父なる故王ハムレットに復讐し失はれ

た土地を取戻さうとして兵を集めてゐる。此事は現王クロード・ディアスの敏捷な活動に由て未然に防がれ、フォートインブラスは全然断念してしまふ。然し彼は最後にクロード・ディアスもハムレットも死んで後繼のないデンマークの嗣王となつて、實際上は宿志を遂げる事になる。此フォートインブラスがハムレットと性格に於て非常に違つてゐるのはいふまでもない。

次に國の大政ボロニアスの一子レーアティーズが又父をハムレットに殺され、其復讐にと一軍の兵を率ひてフランスから歸國する。此レーアティーズは火のやうな怒り易い氣象、かくと思へば矢も楯もたまたま実行する性格、併し一向に考へが足りない。見透しがつかない。若しハムレットがレーアティーズのやうな氣象であつたら、亡靈出現と共に、事の成否は考へず、直ぐ様王の館に亂入するに相違ない。ハムレットがハムレットであればこそ、同じ復讐が次第々々に遷延せられる。思はぬ事が次々に起る。遂に劇中の主要人物一同非業の死を遂げ、自分も劍に伏すといふ大悲劇を生む。

それは兎に角、今やハムレットに取つては大なる義務が脱れ難くなつて來たが、考へてみれば是れ自分の性格には最も合はない義務である。第一幕第五場の終に叫んで曰ふ――

The time is out of joint : O cursed spite,
That ever I was born to set it right!

時代は支離滅裂、何といふ呪はしい災厄、

之を正すの任を帯びてわしが此世に生れ來ようとは!

茲に全篇の骨子がある。

ところが、新しい任務を意識した者は猛然として活動の勇氣を起すのが普通であるのに、ハムレットの場合は、そこに不思議な疑惑が伴ふ。ハムレットは思ひ切つて一舉に父の仇を報じ、所謂「之を正すの任」を果たすだけの勇氣も智謀もある。十九世紀初頭の人々が彼を以てメソ／＼した泣蟲の如く解したのは、大なる誤りである。彼は決して左様な男ではない。

只彼に取つて困るのは自分の心との調和を得る事である。自分のしようとする事は果して正しいか、果して亡靈のいふ事を信じていゝか。そこに疑ひが起る。若しあの亡靈が狐狸變化のたぶらかしものであつたらどうする。此疑惑が一番邪魔になる。

此の疑ひの心的一方には耐え難い幻影消滅の悩みがある。ハムレットは前にも云ふ如く、すべての人を善良なる人と思ひ、そして其の善良なる人と楽しく此世を享樂する事を最も喜ばしく感

する人である。然るに此賦性に反対して、殆どすべての人が邪悪で、不義だらけ、虚言だらけ、偽善、強慾、奸譎の世の中、富と権力を得る爲めには何ものをも捨て、顧みない、卑怯、卑屈、利己一點張り、心にもないお世辭を云ひもし、受けもして世を淺はかに過ごしてゐるのをマザクと見、そして誰一人として（實際、大學同窓の親友、哲學の學生ホレーショ一人を除いて）眞實の心を打あける人は一人もゐない。此惱みのなかに天も地も華やかな色を失つてしまつた。彼れの魂は活動をやめて了つた。ハムレットは二度と笑はなくなつた。劇の始から終りまで華かに笑つて居るハムレットを一寸だつて見る事はない。何といふ氣の毒な人であらう。彼の唇から洩れるものは微笑でも哄笑でもなく、皮肉と嘲りと下げしみの言葉のみになつた。

就中彼は再び戀が出来なくなつた。ハムレットのオフィーリアに對する戀は色々に解釋できる。が、オフィーリアの方で、相應に年は行つてゐるが、ほんの「ねんね」で何の理解もなく、只父のいひなりになつてゐる。俗物の、物事のホンの表面しか解らぬ、淺はかな、それでゐて隨分奸智にたけた、又自分が天下一の智者の如き誇りを持つてゐる父ポロニアスの云ふがまゝになつてゐて、茲に美しい戀は成立はしない。が、ハムレットの方からは相應に眞面目な考へであつた事は言

を俟たない。ハムレットの性格からしても左様な人生の重大事件に對し、軽い冗談半分、からかひ半分の行爲が出来よう筈がない。

しかし此戀はオフィーリアには殆ど無意識か副意識かのまゝに、ハムレットに取つても蕾ともならず蟲に食はれて了ふ運命にあつた。ハムレットは人生に對する興味を失ふて了つて、しかも尙ほ戀を感じ得るか。そんな事はあり得ない。戀は人生に強く喜ばしく生きるといふ力強い枝に初めて美しく咲く花である。大地の養分を吸ふの力も失せたハムレットに、なんで戀ばかり花咲き得よう。彼は廣い意味に於ての愛は失はない。オフィーリアのやうな純な而かも弱い女を此荒くれた世に置くのを痛ましく感じた。此意味に解釋するとオフィーリアを尼寺へ行けと進めるハムレットの心は痛ましくも眞實である。出来れば彼れ自身も寺に逃れ世を避けたいのである。

彼れの沈んだ心は、讀んでゐた書物から暗示を受けて、又もや自殺を念ふ氣分になつた。――

To be, or not to be, that is the question:――

Whether 'tis nobler in the mind to suffer

The slings and arrows of outrageous fortune,

ハムレット

Or to take arms against a sea of troubles,
 And by opposing end them?—To die,—to sleep,
 No more:—and, by a sleep, to say we end
 The heart-ache, and the thousand natural shocks
 That flesh is heir to,—'t is a consummation
 Devoutly to be wished. To die,—to sleep:—
 To sleep! perchance to dream:—ay, there's the rub;
 For in that sleep of death what dreams may come,
 When we have shuffled off this mortal coil,
 Must give us pause. There's the respect,
 That makes calamity of so long life:
 For who would bear the whips and scorns of time,
 The oppressor's wrong, the proud man's contumely,
 The pangs of despised love, the law's delay,
 The insolence of office, and the spurns
 That patient merit of the unworthy takes,
 When he himself might his quietus make
 With a bare bodkin? who would fardels bear,

To grunt and sweat under a weary life,
 But that the dread of something after death,—
 The undiscovered country, from whose bourn
 No traveller returns,—puzzles the will,
 And makes us rather bear those ills we have
 Than fly to others that we know not of?
 Thus conscience does make cowards of us all;

存らふべきか、それとも、存らふべきでないか、問題はそれだ。
 どちらが男子の心であらう!

残酷な運命の石火矢を耐へ忍ぶのと、
 海なす艱難を迎へて立ち、

闘つて、これと共に亡ぶのと?……死は眠りに過ぎない。
 眠りに由つてこの心の悩みや、

又は肉體の持つて生れた千百の争ひが
 断たれてしまふと假定すれば、それこそ心をこめて、

願ふべき大終焉なのだ。……死は眠りである。
眠ると、恐らく夢を見よう、さうだ、そこに障りがある。
我等この肉身のもつれを断ち切らん時、
死といふその眠りの中に、どんな夢を見るだらう。
それを思ふと、心が鈍るに相違ない、
われから永びかして生を食るのも、つまり之れに外ならぬ。
でなくば、誰か我慢してゐよう。世の暴戻と嘲笑、
壓制者の非道、驕慢な輩の輕蔑、
顧みられぬ戀の痛み、裁判の長びき、
官吏の横柄、または、我慢強い立派な人が
値ひなきものから受ける非禮など
自分で自分の清算をつけることが、抜きはなつた
短剣の一突きで出来るものなら。……重荷を負ふて、
憂世の道を呻き、汗流しながら辿るのも、

死後に來る或るもの恐れ、

その境から曾つて旅人の還つてきたことのない

未知の國、それが我等を心もとながらせ

現在の苦しみには耐へても、

何とも解らない他の世界へ飛躍することを控へさせるのだ。

かく内省は我等を悉く臆病者にする。(第三幕第一場)

彼はさきにも死を思つたが、今度の彼の自殺觀念は、むしろ多く抽象的な一つの思索の命題であつて、必ずしも實行を目前に置いての冥想であるらしくない。死が眠りと同一般で、醒めし日の惱みも悲しみも、うまき休息のうちに忘れ果てられるものなら、死も願はしい。しかし眠りのうちに夢を見て、去りし日の苦樂の反映にうち驚かされる如く、死後が單に空莫たる睡眠状態になかつたなら、どうであらう？ 死が萬事を帳消しにして呉れなかつたら？ 死後の恐怖が我々すべてを臆病にならしめる。——かう冥想に耽つて一層憂鬱になる。彼の心の深さを知らぬものは之を狂氣と見るのも、いはゞ無理もない。ハムレットが學問を好むだけでも彼等に取つては狂氣といへるのだものを。殊に彼の左右には、うるさい刑事巡査のやうな宮臣どもが妙な目をして、

そこにもこゝにも隠れて自分の一舉一動を看視してゐる。ハムレットは息のつまる思ひをせぬわけには行かない。

ハムレットには人に見えないものが見え、人に知れないことが知れた。それは春早き頃萌え出づる軟き木の芽の上に一夜にして霜の下つた如くであつた。もう彼は再びもとの若々しい、華々しい彼ではない、オフィーリアの云ふ通り(第三幕第一場)、

O, what a noble mind is here o'erthrown!

The courtier's, soldier's, scholar's, eye, tongue, sword;

The expectancy and rose of the fair state,

The glass of fashion, and the mould of form,

The observed of all observers, quite, quite down!

殿上人の目見つきに、博士の辯舌、武夫のうちの業、御國の花、末の力と、皆人に頼まれて、みやびの鑑、躰の型とあがめられてゐられしに、もう駄目ぢや、もう駄目ぢや。

That unmatch'd form and feature of blown youth
Blasted with ecstasy: O, woe is me,

To have seen what I have seen, see what I see!

類ひなき姿、盛りの花のおん形も、忽ち狂態にしほれて了つた。

オフィーリアは只狂亂と見るが實はハムレットと彼女の間に、否、ハムレットと凡て物を見ず知らざる人々との間には、取去る事の出来ない壁ができた。幽霊を見ない人に取ては彼は氣狂ひである。ハムレットが亡霊を見たあとホレーシオやマーセラスに向つて云つた言葉は意味が深い。

I hold it fit that we shake hands and part;

You, as your business and desire shall point you;

For every man has business and desire,

Such as it is; and for mine own poor part,

Look you, I'll go pray.

吾々は握手をして別れるのが適當だと思ふ

君方は、君方の用向と希望の指導するまゝに、

誰にしても皆それ相應の用向と希望とがあるのだからな。

僕の如きつまらないものは

ねー君、行つて祈禱でもしようよ。(第一幕第五場)。

實際亡霊を見た人と見ない人とは握手して別れる外に致方はない。そこに根本的に相容れない二つの立場が出来るのである。

ハムレットの此あたりの心持を考へると、かの十九世紀後半に、その天才の筆を振つた多くのリアリズムの作者を思ひ當るのである。彼等は人生の夢と幻をかき破つて眞實に當面したが故に、その醒めたる目は、再び空しき酒に酔ふわけに行かなくなつた。藝術の陶醉は、もはや彼等のものではなくなつた。その著大な一例はロシアのレオ・トルストイである。彼は何故に伯爵の地位を捨てねばならなくなつたか。何故嘖々たる文名を抛つて、農民の友にならなくてはならなかつたか。最後に彼は何故その家族を捨て、妻を捨て、家庭を去つて、寒村のステーションに野垂れ死にをせねばならぬやうになつたか。實にトルストイは恐ろしい亡霊を見たのである。「支離滅裂の社會を正しくするの任務」を感じたからである。

思ひがけぬ天職に目覺めたハムレットは寂しい人間になつた。此天職を領つて事を共にする友人はない。ホレーショでさへ出来ない。彼はすべてを自分の肩に擔ひ、自分獨りで悲み、自分ひとりで處分し、自分ひとりで耐えねばならなくなつた。

此寂しさの耐え難くある一方に、自分の義務を果たす事は多くの忌はしい結末を伴ふ事を熟知して、限らない人生の撞着を感じてゐる彼は、人生の喜びを失つて了つた。人間行爲の第一原動力である喜びを失つて了つた。

..... I have of late—but wherefore I know not—lost all my mirth, forgone all custom of exercises; and, indeed, it goes so heavily with my disposition, that this goodly frame, the earth, seems to me a sterile promontory; this most excellent canopy, the air, look you, this brave o’erhanging firmament, this majestical roof fretted with golden fire, why, it appeareth no other thing to me than a foul and pestilent congregation of vapours. What a piece of work is man! how noble in reason! how infinite in faculty! in form and moving how express and admirable! in action how like an angel! in apprehension how like a god! the beauty of the world! the paragon of animals! And yet, to me, what is this quintessence of dust? man delights not me;—no, nor woman neither, though by your smiling you seem to say so.

.....予は近頃——なぜか自分にも解からぬが、あらゆる歡樂を失ひ、武藝修業の習慣をも捨て了つた。憂鬱が重くわが胸にかさなつて、この地球といふ立派な構造も予には

荒れはてた岬と見え、この空といふ世にもうつくしい天蓋も、あの華やかな覆ひかゝる穹窿も、黄金の星を鏤めた碧落も、予には、單に醜く、汚れた毒氣の集合としか思はれなくなつた。人間は何といふ造化の傑作だらう！ 理性に於て何といふ氣高さ！ 能力に於て何といふ無限！ 姿といひ、振舞といひ、何と表情にすぐれて驚歎に値することぞ！ 行ひは天使を欺き、智慧は神にも似たこの人間！ 世界の美だ！ 生物の美だ！ しかも予に取つて、塵埃にすぎない人間が何だ？ 人は少しもわが心を樂しませない。いや女とても同様だ、君がたはその微笑で、女ならばと、ほのめかすらしいが。（第二幕第二場）

人間をして何か活動せしめる原動力は喜びである。戀に破れ、又は幽霊を見る事に由つて、此喜びの心を奪ひ去られたものは、最早石炭のきれた機關車である。前へも後へも運轉しない。戀に喜びが必要なだけでなく、悪みでも復讐でも一種の喜びがなくては、活動とならない。ハムレットは人生に於けるすべての悅樂を失ふて、しかも自分には之を氣づかない。只事に應じ、機會に遭遇して我身の不活動な心を責め、鞭ち、我身の不甲斐なさを歎いて、益々不活動の深みに踏込むのみである。

それでも彼は折柄來合せた俳優に命じ、亡霊が語つたと略々同様な毒殺事件を仕組ませ、宮中

で芝居させて王をして之を見せしめ、自分も一ト芝居打たうとする。之は彼に取つて、一個の機會を把えたやうなものの、實はあまり第三者から見ても、大して彼の目的を進捗せしめる所以ではない。只彼れとしては一面に平生の狐疑逡巡の心に證據を與へ、又精神的に王に復讐するといふ彼らしい計略があるのである。

劇中劇——慰めのなささうなハムレットに一個の慰を與ふるものとして、王も王妃も喜んで臨席するが、ハムレットの眞意は王の腹のどん底を探るにある。そして彼の份ふ狂態は實に芝居以上の芝居である。

策は適中。王は座に耐えないで立ちあがる。此虚に乗せんとでもするハムレットの白刃を怖れか、乃至は心の闇に耐えかねてか、「燈火、燈火」と叫びつゝ、奥殿さして逃げて了ふ。芝居は中止。ハムレットは躍上つて喜ぶ。居列ぶ廷臣たちの前で、之れだけ王をしてその行ふた悪事を白状させたのは、精神的に云へば復讐したと同様の價值がある。

王は立腹、しかしそれを表立つて示す事は却て自己の罪惡を曝露する事になる。そこで王妃にそれとなしに語る。王妃はたゞ心配。どうしてもハムレットの眞意を糺し説諭をせねばならぬ。由つて廷臣をしてその居間にハムレットを迎へしめる。之を聞いたハムレットは却て此機會に母を

諫言せんとする。そして奥殿さして進むと、不圖、王が一室に跪いて祈りをしてゐるのに逢ふ。祈りをしてゐる！ マクベスは祈りたいにも祈る力のない事を泣いた。洵に宗教の中心、眞髓は、祈であると思ふ。我々は空々しい心を以て説教をする事も、聖書を朗讀する事も、讚美歌を合唱する事もできるが、祈りだけはできない。若し空々しい心を以て祈る事が出来たら、その人こそ生きたまゝ地獄に落ちる資格が充分にある。

王も眞心から祈れぬと白状してゐる。しかし兎に角跪いて神に祈を獻げてゐる。ハムレットは今こそ父の仇と刀に手をかけた。一旦はかけたが殺さうとはしなかつた。茲に性格悲劇は最上の妙味を示す。若し茲でハムレットが王を殺したら、それはハムレットでなくなる。殺さなかつたこそハムレットのハムレットたる所以である。

第一にハムレットのやうな、やさしい、人なつこい、詩人肌な男は、よしや父の仇でも、ちつと考へてから、冷かに切りつけるといふ事は出来ない。ハムレットも後になつて人を殺すには殺すが、皆それはクワツと熱して、衝動的にやる仕事で、前以て計畫して行ふ謀殺罪の犯せる男でも犯す男でもない。

第二に武士氣質な潔癖のハムレットは、よしや仇敵であつたにしろ、その背後からだまし打ち

に切りつけるのを潔しとしなかつたに相違ない。

第三にハムレットの復讐は、仇とする叔父の命を取ればそれでよいといふわけに行かない。秩序のタガがはずれてバラバラとなつた廢頽の世の中を、再び健全な丈夫な礎にたて直すのがハムレットの主要任務である。仇を打つにしても正々堂々と宣言して挑戦せねば何にもならない。

此短い一場が劇「ハムレット」の頂點となり、劇は茲に一回轉する。

ハムレットは王をそのままにして、奥殿さして進み行く。奥では母なる妃が一人待つてゐる。今こそ好機とハムレットは心のたけを披瀝して母を諫める。母は子を説諭しようと思つてゐたのに、子は却て母を諫める。全く違つた立場にある母は子を理解し得ない。ハムレットが熱心になればなるほど、只狂氣してゐるとのみ思ふ。そして遂に怖れをなして「助け」と叫ぶ。物かげに隠れてゐたポローニアスも思はず「誰かある」と叫ぶ。ハムレットは今度こそギラリと抜いた。

人に立聞せられるほど、厭な事があらうか。ハムレットは前に、いとしいと思ふオフィリアとの對面にも立聞せられた。今又此夜更けに、生みの母と子の對面に又も立聞してゐるとは何事か。彼は「鼠」と叫んで、物かげにゐたものをヅブリと刺す。屹度王であると思つたら、出さばり

ものゝ老人ポロニアスであつた。併し昔し晋の豫讓が仇の衣を刺して以て復仇と做した故事を考へると、ハムレットの心では、此刹那の一舉で王を殺して父の仇の肉體的復讐をしたのも同然である。

だが、考へれば可哀相な事をした。自分が父の仇を狙つてゐるのに、思はぬ事とは云ひながら、今度は人から父の仇と狙はれる身になつた。(あはれオフィリアはその爲に眞に狂氣して、遂に水に溺れて死んで了つた)。考へて見れば人生は不可測だ。思はぬ偶然の出来事のために、舞臺は廻り舞臺でブン廻はすよりも、もつとグツと廻轉して了ふ。我々は前を望む時、萬事我々の意志通りになると考へるが、實際は思はぬ偶然の事故がこゝにもそこにも起つて、思ふ通りにならぬが十中八九である。

こゝから以後のハムレットは性格が一變して、すべてを運命に任して成行次第の打ツちやり氣分に充滿してゐる。凡べて性格劇は性格の生けるが如き描寫だけでなく、性格の變じゆくさまを示すところに更に更に數層倍の興味がある。第五幕第二場の中に彼はホレーシヨに

... Let us know

Our indiscretion sometimes serves us well,

When our deep plots do fail and that should teach us
There's a divinity that shapes our ends,
Rough-hew them how we will.

我々が大事を取つた計劃の敗れるのに

無分別が時には役に立つ。

是れに由つて考へれば

われ等荒削りはいかやうになさうとも

結局我々の目的を形成する神なるものがあるよ。

と語つてをる。

第三幕第三場四場のクライマックスを経て劇は一回轉する。そして面白い見物の目を喜ばせ、役者も一生懸命になるシーンがつぎ／＼に出て来る。第一にはオフィリアの狂態、此いたいけな寂しい頼りない友人のない乙女は父を殺され、しかも之を殺した下手人は、決して憎いと思ひ得ない王子ハムレット様である。今にあの向ふ見ずの兄のレーアティーズがフランスから歸つて來た

ら、どんな事を仕でかすかも知れない。兄が父の仇を取つてもいや、取らなくてもいや、オフィリアの小さい心は大きな眞實の鐵板にぶつかつて、只ひとり泣くのみであつた。誰に心を打明けて相談するものもない。彼女は思ひつめて狂亂になる。彼女は王妃が *I will not speak with her* と無情く言つて、うるさがるにも拘はらず、

Where is the beauteous majesty of Denmark?

デンマークの麗しい王妃さまはどこに？

と、せめて王妃を尋ねて友にしたいと頻りに尋ね探すあたり、眞に心をえぐるものがある。そして潜在意識があるかのやうに、戀がその言葉の主要題目であるのも全く自然である。そして案の定、兄レアーティーズが暴徒を集めて父の復讐と稱し王宮に闖入するが、オフィリアは兄の歸國をも認め得ないで、遂に

..... a willow grows aslant a brook,

That shows his hoar leaves in the glassy stream. (IV.7)

鏡の如き流れに白い葉裏を見せて

小川を斜めに生ひ繁る柳の木

のところで、水に溺れて死んでしまふ。

レアーティーズは父を殺され妹を失ひ、やるせない無念の心を、王に言ひくるめられて、ひたむきにハムレットに集中し、しかも卑劣な方法で、仇を取らんとする。

ポロニアス殺害の一件は深く王を怖れしめた。狂太子をかうしたまゝに一日も捨ておくわけに行かぬのは、もはや明瞭なので、急ぎ英國へ送るの外に途はない。かねてデンマーク王の恩義に預つてゐる英國王は、當方の祕密の依頼を聽入れ、此憂慮の種を綺麗さつぱりと荒療治してくれるに違ひない、といふのがクロードィアスの内心である。ハムレットは英國行に敢て異議を申立てなす。

There's a special providence in the fall of a sparrow. If it be now, 'tis not to come; if it be not to come, it will be now; if it be not now, yet it will come: the readiness is all: since no man has aught of what he leaves, what is't to leave betimes?

『一羽の雀の墜つるにも、天の特殊な攝理がある。今來れば後に來る筈なく、後に來ざれば今

來よう。よしや今來ずとも、やがては來る時がある。覺悟が第一ぢや。人は殘しゆく何ものをも持たねば、時待つて之を捨るに、何の未練があらう。」

ハムレットはかう達觀して、生死の境を超越した。一途に思つた復讐の義務も、亂倫の時代匡正の責任も、之を忘れ、之を一擲するわけでは毛頭ないが、人の志の成るも成らぬも、その十の八九を支配するものは、天の配劑といふ不可思議な力であることの明白である以上、徒にじたばたするのは達人のことではない。靜に大きな潮の流れに身を任せて、ゆる／＼泳ぎぬけるのが無上の良策、腕は却つて溺れる。——ハムレットはかうした心持から、寧ろ喜んでイギリスへの船路についた。しかし彼は單なる虛無主義者ではない。彼は運命の大船に乗つて、ギルデンスターン、ローゼンクランツなる二人の舊の學友、今の仇敵に警護せられ、破滅の渦卷にまつ逆さまに落しやられようとするのを、之も天の思召と眼をつぶつて觀念してしまふ人ではなかつた。何か王の策略があるに相違ないと睨んだ彼は、夜の暗きにまぎれて二人の使臣の室に忍込んだ。そして手探りに英國王に贈る王の文書を尋ねあてた。それを私室に還つて開いて見ると、案に違はず、王子を卽座に亡きものにしてくれと、數多のまことしやかな理由を書連ねた文言であつた。王子は靜に坐して此親書を書換へ贋の文書を作製した。兩國の過去の交誼を思ひ、將來も永く平和の關

係を願はゞ、此國書持參の使臣二名をば突然頸を刎ねて死に就かしめよ、といふ趣旨である。そして幸ひ持合せた父王の印が國璽のうつしであつたので、之を用ひてしかと封をなし、又もとの箱に收めて二人の室に返した。かくて二人の使臣は、内容の取かへ見であることに遂に氣づかず、我とわが身が死の使者となつて、イギリスへと參向するのであつた。

この事のあつた翌日、偶發事件だといへば偶發事件だが、當時の航海として決して珍しくない海賊船の追跡に逢つた。輕快な彼等の船は見る／＼うちにハムレット一行の船に追付いた。所詮逃れ難しと見た王子は、勇敢に劍を抜いて海賊に向ひ、船の接觸する機會に、その船に飛込んで戦を挑んだ。そのうちに使臣の船は再び海賊船と離れて遠く逃延びたので、王子は獨りそこに捕虜の身となつた。しかし義侠な海賊達は、此勇敢な王子を遇するに禮を以てし、賠償金を要求することさへなくて、彼を本土デンマークへ送還した。命を惜む者は却つて之を失ふのとへ、辭せずしてみづから死地に赴いた彼は、幾日を経ずして又もとの故國の土を踏んだ。が、正に單身敵地に飛込んだ者の如く、身に危害を加へんとする者が、いついかなる時に現はれるか判らない状態であつた。しかしハムレットは落武者の如く、又刑餘の者の如くにしなかつた。平氣で堂々と書を

國王に贈り突如たる歸還を述べて面會を求め、そして親友ホレーシオに逢つて別後の物語をした。

兩友は連立つて戶外を逍遙したが、ゆくりなくも或る教會の墓地に來た。見れば墓穴の新に掘られたところで、測らざりきオフィリアの葬式である。兄レーヤティーズが興奮に焦々して、柩の上に飛込んで、悲憤を一時に勃發させ、聲荒く周圍の人達に怒鳴り立てゝ居る。

旅にあつたハムレットはこの憐れな乙女の最後を傳へ聞く折がなかつたのである。彼は今一時に胸せまる思ひがしたが、同時にレーヤティーズの人もなげなる振舞に赫として物蔭から飛出し、『我れこそハムレット、オフィリアを愛するに於て四萬の兄を以てするも劣りはしない』と、同じ墓穴に飛込むので、茲に二人の若者は、愛する者の死骸の上に亂闘を初める。やうやく引分けられて、やがてハムレットは退場するが、此不思議な一舉動に、何とはなき心の焦だち、一種争鬪を渴望する獸力の不時の發露、どこかに來るべき日を豫兆する魂の不平均を、心あるものは讀まずにゐられないのである。

やがて一日宮中で、王の催しにより、宮廷に名ある二人の若人——ハムレットとレーヤティーズ

ズと——の武術競べが行はれる、それに事よせて、邪魔物の王子を亡きものにしようといふ王の苦肉の一計である。

かやうに様々の事件は相次いで目を眩惑させるやうに起るが、しかし我々の興味は殆どクライマックスに盡きてしまつてをる。それは何故か。

それを説明するためにコールリツヂの「ハムレット論」を一見する。彼ほどの偉大な頭腦の持主で、その全精力をシェークスピアの研究に捧げた人は、他には多くはない。彼は曰ふ

『彼(ハムレット)は色々の目的に充ちてゐるが、目的に伴ふ心の性質を缺いてゐる。……シェークスピアが我々に印象しようと思ふ眞理は斯うである。即ち活動が存在の主要目的である、智力の働きはいかに秀抜であらうとも、若し智力が我々の活動する邪魔となり、活動をいやがらせ、そして只考へ、何かしようと思へ、遂に有効に事をなすの時が過ぎて了ふやうにするものなら、此智力は價值ありと考へられず寧ろ之れあるは不運と考へなくてはならぬ』と。

此言にも一面の眞理はある。善事を説き、美事を高唱しても、しかも只考へてゐて何一つ實行に現はさなかつたなら、その時彼れの智力は寧ろ呪ふべきものであらう。それに異存はない。併しな

がらハムレットに取り、又此批評をしてゐるコールリツヂその人に取り、活動と思想の關係はどうであらう。實行は寧ろ些末な物的な表面の現はれで、思考こそ、より深い、より重大な魂の活動ではないであらうか。ロシアの文豪ツルゲーネフは人間の性格をハムレット型とドン・キホーテ型、即ち反省的と實行的との二に分ち得ることを説いた。ハムレット型の間には、反省瞑想こそ其の奪ふ可らざる特色であらねばならぬ。ハズリットも「ハムレットの主なる情熱は考ふる事にあつて、行ふ事にあらず」と云つてをる。コールリツヂその人は實社會に處しゆくの道にかけては、嬰兒ほどにも無能であつて、妻子を養ふ方法さへ立て得ず、友サウヂーのなさけにより僅に露命をつないでゐた状態であつた。しかし彼の黙考、彼の思想は哲學的詩人として永遠に生きのこる。彼は他の處で

I have a smack of Hamlet myself, if I may say so.

私は私自身にハムレットの一風味を有つてゐる、もしさう云へれば。

これがコールリツヂの本音で、彼は自分がハムレットのやうな男であるからして、彼の不活動を咎めて、やがて自らを責めてゐるのである。しかし第三者の我々に取つては、すべて人生に望みを失ひ、喜びを失ひ、もう魂に何の發展を見ない後のハムレットがどんな事をしやうと、只歎息

を以て之を迎へるだけで、單なる外的動作は最早我々に興味はない。劇「ハムレット」はすべての偉大な藝術品の如く、それは一個の魂の歴史として解釋せられて、はじめて其眞價が味はれる。表面に活躍する多くの目を驚かす事件からのみ見るならば、それは結局一つのすぐれたメロドラマに過ぎない。

とはいへ、痛ましい最後である。國王は自分を英國に送りそこで亡きものにせんとする奸計をめぐらしてゐた事は百も承知しながら、レーヤティーズが又どんな考へで擊劍の勝負を求めるとは察するに難くないのに、ハムレットは全く何の蟠まりもなく、王の御前にてレーヤティーズと仕合ひをする。レーヤティーズの劍は双びきがしてなく、その先には毒の塗つてある事も知らず、又王がハムレットに息つきにと勧めた杯には同じく毒が入つてゐる事も注意しない。彼はレーヤティーズと和解の握手をして劍を取つて立つた。

ところが天の配劑か、それとも單なる盲目なチャンスか、どうかは人々の解釋に任せるが、何にしても、ハムレットに飲ましめようとした杯は、何も知らぬ王妃に飲まれて、王妃は其の毒のために倒れる。二人の仕合ひは中途に熱して劍を取ちがへ、レーヤティーズは自分の塗つた毒で自

ら生命をとす。ハムレット自らも、幸に王は殺すが、之も毒のために、やがて息を引取らねばならぬ。彼は死出の旅にも伴せんといふホレーシヨをなだめて、事の真相を世に説明せんことを懇囑し、又我なき後のデンマークの王位繼承者にノールウェーの若きフォーチンブラスを推すやうに遺言した上、含蓄深き

The rest is silence. 「あとは無言」

の一語を遺して永なへに眠る。ホレーシヨは

Now cracks a noble heart. Good night, sweet Prince;
And flights of angels sing thee to thy rest!

「まや、け高き心はくたく。さらば、うるはしの御子、

天つ御使の群に歌ひ伴はれて、とはの休みに入らせ給へ。」

と祈るが、見よ累々たる骸の山！ あゝ、すべては死に到らねば解決はつかぬのであるか！

肉體と魂、此兩者の關係はどうなのであらう。中世紀ぶりに肉體は魂の影の影、寧ろ魂の輝きを曇らす邪魔ものなのか。それとも近代の唯物主義者などと同じく、肉體を離れて魂も何も存しない、

感覺の世界のかなたは我々の一切知るを許されぬところ、と考へるか。乃至ウァールト・ホイットマンのやうに靈肉一如を唱へるか。しかし此靈肉一如といふ考への明瞭な内容は何か。存外それは曖昧なものではないか。吾々の心感ふ。

吾々は曩きに「ジュリアス・シーザー」を見た。此劇に於てブルータスはその親友シーザーのなすところを見、その遂に自分の最も忌み嫌ふ専制壓迫の政治に導きはしなないかを恐れた。彼はかく進み行くシーザーの魂を殺し、シーザー自らの肉體は其まゝにして置きたかつた。しかし其れは人間に許されぬ仕事であつた。彼は不本意ながらシーザーの肉體を刺すの擧に出た。今茲に吾々は「ハムレット」に於て、惱ましき魂の人の生に及ぼす影響を見る。茲に本來靜かにして温かなるべき魂は、思はぬ嵐と雨とに打たれ亂されて、之を宿した肉體は、多くの死骸と共に倒れて了ふ。げに此悲劇に於ては、王も王妃も、ポロニアスもオフィリヤも、レーアチーズもハムレットも、ローゼンクランツもギルデンスターンも、關係者悉く皆横死を遂げて、いとゞ暗き結末を告げるのである。吾々は以上その痛ましき闘ひの跡を見、そして最後にホレーシオの追悼の辭を讀むと、そゞろに人間の運命に想ひ到つて、無量の感慨を催さざるを得ない。

顧みて技巧の點から考へても、此劇は所謂 Romantic art の頂點を示してゐる感がある。即ち Classic art のやうな單純さでなく、あくまで複雑に、あくまで目まぐるしい人物と事件の複合である。當時の觀衆の好みさうな有らゆる道具が並べられてある。最上のメロドラマを以てしても、此れほど効果的な舞臺面の連続はムツカシからうと思はれる。よくも斯く通俗的に當時の大衆に満足を與へる仕組をして、而かも百代の藝術たらしめ得たといふ點に、最大の敬意を作者に拂はせるのである。

シェイクスピアは今日流行の用語を以てすると、大衆作家である。完全な意味で世界有數の大衆作家である。彼の筆に成つた三十七篇の劇中、二三を除外すると、その書卸ろし當時から今日に至るまで、どれほど莫大な數の民衆を歡ばせ、その血を湧き立たしめたか分らない。そしてそれは或一派の人々が云ふが如く、彼が英雄崇拜化されたが爲めばかりではない。彼の作は根本的に世間の大衆のハートを掴むやうにできてゐる。メロドラマ的な變化、センセーショナルな色彩、そして迅速なテンポ、是等の要素を具備して彼の作は三百年前の エリザベス朝に於ける謂はゞ

「映畫劇」である。今日に於ても適當な演出法を用ひて如上の要素を明快に浮出させると、多數の民衆が走つて彼に趨くであらうことに少しの疑ひもない。

併し、眞の大衆文學は世間の所謂大衆に懇へるばかりでなく、小數の理智あり教養ある人々にも懇へるものでなくてはならぬ。今日の大衆を掴むだけのものと、明日の大衆をも動かすものと相違は此點にあるのであらう。結局眞の大衆文學作家は百代に傑出した文豪であるといふことになり、又逆に百代に傑出した文豪は多くはすぐれた大衆文學の作家であることになる。たゞこの逆の場合、作家の表現用具若くは表現形式が一般大衆に理解され難いものである時には、必ずしも民衆的に所謂人氣を博し難いことは勿論である。ダンテとか、ミルトンとかいふ偉大な人々は大方その例となるであらう。

この眞に卓抜な大衆文學がどういふ具合に作られるかといふことを考へると、大抵は自然と人工の微妙な合作である。即ち民衆の間にいつとはなく人氣ものに成つてゐる事件なり人物なりを炯眼な天才が把えて、之を自家天才爐中に投じ、焼き、鍛えて百代民衆の愛慕するものと變じて世に出すのである。すぐれた花作りが野生の花を一變して、美しい愛玩の花とするのと同じ過程である。天才は民衆の喜びさうな或る話しを造りだしたり、或る人物を考案したりする事に多く

力を注がない。彼の力は既にあるものに形を與へ、而かも動かない、光彩ある形を與へることに傾注されるらしい。

大衆的作家シェイクスピアの大衆的作品中の最も大衆的なものは「デンマークの王子ハムレット」の悲劇である。若し演劇と名づくるものゝ人間社會に行はれて以來、今日只今に至るまでの世界各國の演劇上演数が統計で示され得るものなら、恐らく最多上演数のレコードは此の「ハムレット」に歸するであらう。少なくとも此作家の筆になつたものゝ中でのそれは、此の氣の毒な若い王子の悲劇である事に疑ひはない。まさに是れ劇壇の獨參湯、日本の忠臣藏に當る。そして大衆的作品に就いて上に述べるところに誤りなくば、此の悲劇こそは正に大衆文學のモデルである。その特長に於て、その作られた経路に於て。

現在定本となつてゐる「ハムレット」は二種の古版を基礎として校訂したものである。第一は一六〇四年版の四ツ折本で、第二は作者没後七年に友人等の出版した一六二三年の第一二ツ折本と呼ばれる全集に集載したものである。ところが此の二つの古版を比較すると、内容排列が聊か違

つて居り、四ツ折本の方が印刷は粗末で、誤植も多いが、全體としてずつと優れてゐる。ともかくも今は失はれた完全な原稿の二つの異つた上演脚本を基礎として印刷したものと見るべきであらう。四ツ折本には全然幕とか場とかの區切りがなく、全集には第二幕第二場まで區切つてある。

一六〇四年版四ツ折本以後、一六〇五年、一六一一年、(日附がないが大方)一六一二年、一六三七年、それから四五度びも四ツ折本の「ハムレット」の出版があつたが、どれも單なる複寫で、取立て、研究に値ひするほどの相違がない。この一六〇四年版の四ツ折本は一八二三年までは第一四ツ折本であつたが、此年に一六〇三年版の沙翁劇約十二種を集めた四ツ折本が発見せられ、その内に「ハムレット」もあつて、之が第一四ツ折本と呼ばれ、その翌年の優秀な四ツ折本は第二四ツ折本といふことになつた。第二四ツ折本の表紙は

「デンマークの王子ハムレットの悲壯なる物語。ウィルヤム・シェイクスピア作。新版、増補、殆ど新たに書卸したるが如く、真正完全の臺本に依る。ロンドンに於て印刷したるはアイ・アール、依頼者はエヌ・エル、賣捌かるゝはフリート街なる聖ダニエルン教會の下なる彼の店舗。一六〇四年。」

とあり、第一四ツ折本は

『デンマークの王子ハムレットの悲壯なる物語。ウィルヤム・シェイクスピア作。ロンドン市に於て陛下お抱への俳優團により幾度びとなく上演せられ、又ケムブリッジ及びオクスフォード兩大學其他所々に上演せられたるもの、ロンドンに於て印刷し、依頼者はエヌ・エル及びジョン・トランドル。一六〇三年。』

と表題がつけてある。併し内容の相違は一層甚だしいので、第一四ツ折本は問題にならぬほど劣等である。長さも第二の三七一九行に對し、二一四三行しかなく、作者獨特の名文靈句は多く爰に見出されない。定本で第三幕第一場にある有名な「永らうべきか、それとも、永らうべきでないか、問題はそれだ」云々の獨白が、第二幕の第二場ポロニアスがハムレットの戀文を王の前で讀むあとに這入つて居り、そしてこんなに成つてゐる——

「永らうべきか、それとも永らうべきでないか、さうだ
そこに要點がある。

死は眠むり、それだけだ。さうか、それだけか？
いや、眠むれば夢を見る。さうだ、全くそこだ、

なぜなら、死のその夢のなかで、我々が目覺める時、
或る永遠の裁判官の前に連れて行かれる。

そこからは曾て旅人の還つて來たことがなく、
未發見の國だ。此國を眺めて

恵まれた者は微笑み、呪はれた者は天罰を受ける。』

それから、ハムレットの最後の言葉として、一旦聞いたら忘れる事のできない簡潔無類の一語

『餘は沈黙。』(第五幕第二場三七二行)。

が、第一四ツ折本では

『予の眼は視力を、予の舌は用を失ふた。

おさらば、ホレーシヨ、天よ私の魂を受けさせ給へ。』

これではシェイクスピアの名を辱かしめる。それから、第一四ツ折本では場面の排列も混雜してゐるし、性格描寫も違つてゐる。就中著しいのは王妃で、之では全然先夫弑虐の事を知らぬことになつて居り、ハムレットに云はれて初めて氣づき、ホレーシヨと密談の一場面があつて、現在の王なる夫を倒さんと計略をめぐらすのである。其他登場人物の名や數字などの少しく相違する

所があつて、一體第一第二の兩四ツ折本の關係はどうかといふ面倒な問題が起つて来る。

この關係を定める議論は大半臆測に由る以外、動かし難い證據といふものはないが、その臆説中でも一番首肯されるのはかうである。——今は失はれたがハムレットを主人公とした古い劇があつたであらう。そして「ハムレットの復讐」といふことは一般大衆の間に非常な人氣があつた。そこでシェークスピアは之に着目し、一六〇一年頃この人氣ある古劇に改訂を試みた。その改訂の途次、まだ古いものが多分に殘存し、幾何の新味も加へられなかつたものを無斷に盗刊したものが一六〇三年の第一四ツ折本であらう。そして翌年の第二四ツ折本は十分に改訂せられた作者の原稿に（大方一六〇三年頃）やゝ完全に依據して出版したものであらう云々。

そこで問題は更に一步を進めて「古劇ハムレット」に及ぶのであるが、色々の書きものに徴して、一五八九年、作者がまだ二十五歳、最初の劇作といはれる「戀の骨折損」さへまだ書かれてゐなかつた頃、ハムレットを主題とする劇が、確に存在してゐたらしい。そして作者はトマス・キッドであらうと推測されてゐる。内容が彼の傑作「スペイン悲劇」とあまりに酷似してゐる點、ナッシュなどの記すところも何となく之を暗示するらしい點からかく推斷するのである。（此事については坪内博士譯「ハムレット」の附録に詳細に記してあるから、志ある讀者はそれを参照されたい）。

なほ一つ「ドイツ・ハムレット」があるが、之は大方十六世紀の終りつ方に「イギリスの喜劇役者」がかの國に持込んだものを、ざつとドイツ語に翻譯したものであらう。内容の貧弱な、語るに足らないものであるが、只侍従長ポロニアスが第一四ツ折本のやうにコラムブスとなり、そしてセネカ張りの序詞が添付してあるといふ點で、古劇「ハムレット」の幾分の面影を傳へてはゐないかといはれてゐる。一七一〇年の寫本がその最古のものであるが、最初の版は一七八一年で、爾後幾度びか版を重ねてある。表題は *Der Bestrafte Brudermord: oder Prinz Hamlet aus Dänemark* (罰せられた兄殺し、又の名デンマークのハムレット王子)とある。

更に「ハムレット」の話源を遠く遡つて行くと、十世紀の昔のアイスランドの古文書中に、此話を暗示する神話があり、そして此孤島では今日でも、アムローテ即ちハムレットといふ名は「馬鹿」と同義語ださうである。併し纏つたハムレットの話は、十二世紀の終りかたに生存してゐた「學者の」サクソ (*Saxo Grammaticus*) のラテン語で書いたデンマーク史の第三第四兩卷に見出されるので、それが印刷せられ、フランス語譯せられ、そして遂に初めにキッドの、後にシェークスピアの目に觸れて劇化せられるといふ段取りを経たのである。

かやうに、くだ／＼しいやうでも、根源に遡つて尋ねてくると、いかに一つの話し——大方最初は實在人物に尾緒がついたのであらう——が民衆に愛好せられ、保存せられ、それを天才が受取つてすばらしい立派な作品にして更に後代に傳へて行くか、その過程がいかに興味ふかく理解せられる。しかし更に更に興味あることは、天才の士がごく粗野な材料を見て、そこに無限の可能性を發見し、之を天才といふ魔法にかけて、先きの木石を金玉に化するその経路を窺ひみることである。すぐれた魂の悲劇「ハムレット」は、元からさうした微妙なものではなかつた。まづ第一に、サクソの書いた傳説のハムレットはこんなものである。(坪内博士が緒言に記された梗概を借用する。)

「基督教の未だデンマークに入らざりし未開の頃、又英吉利が該國の所領たりし殺伐の時代に、デンマークの王に Roderick といふがあり、其國土を分割して州となし、州司を置きて之を管せしめたり。州司中に兄弟の者あり、兄を Horvendile 弟を Fengon と呼べり。海賊業は時の譽れなりしが、Hor. は最も其道に秀でたりき。ノールウェーの王に Collere とすふ者あり Hor. の武名を嫉みて單騎格闘せんことを求む。應戦の結果 Col. 敗死し Hor. は敵の財寶満船を得て歸國し、其の多くを國王ロデリックに獻ず。王嘉して其一女 Geruth を Hor. に嫁

す。Hamblet は其の子なり。

Fengon 兄の名譽を妬みて亡きものにせんと欲し、先づ嫂を誘惑して弑逆を遂ぐ。(宴席に暗殺し、罪を臣下に嫁す、毒殺にはあらず)。Hamblet おのが身の危きを悟りて佯狂す。Fengon の黨與之を疑ひ Fen. に勸めて百方探偵せしむ。

宮女中にハムレットに戀慕せるものあり、之をば用て林中にてハムレットに邂逅せしめ、戀愛に事よせて眞意を探らしめんとすることあり。ハムレットと育ちし一紳士窃に計畫をハムレットに告げて警戒せしむ。Fen. 旅行すと偽りて林中に狩し、其不在中に妃とハムレットとを一室に會談せしむ。顧問官某、室の垂帳の背に潜みて窺ふ。妃とハムレットと室に入來る。されどハムレットは聊も油断せずして佯狂をつゞけ、頻に狂ひ廻り、手もて垂帳を拊ち試む。何物か動くを覺り、a rati a rati と叫びつゞ、劍にて顧問官を刺殺す。寸々に切りて煮て豚に食はしむることなどあり。かくて母を罵り責むる語頗る長し。密談數刻の後、母は弑逆には關係なしと辯疎してハムレットに同心し、秘密を守り、復讐に助力すべしと約す。

Fen. はハムレットを英國に送らんとす。(密書の件、すりかへの件等、すべて沙翁が作の通りなり、只海賊船の一條だけはなし。)かくてハムレットは英國に渡り、Fen. の命と詐りて英の公

主と婚し、やがて脱走す。時に本國にてはハムレットは既に死にたりと信じて葬儀を執行せる最中なり。ハムレット夜に乗じて Feol が館に火を放ち、恰も酔臥せる近臣等を焚殺し、同時に Feol が寢室に闖入し、名宣りかけて首と胴とを二分す。

民衆は翌朝に至り焼跡に集り來り、頭足處を異にせる Feol を見て駭く。復讐の旨意を辯じて民衆を鎮撫するハムレットの長演説あり。原本によればハムレットは一個の中の大兄にして果敢勇武の君主なり。人民悦服してハムレットを國君と崇む。ハムレット再び英國に赴きて其の妻を具し歸らんとす。然るに英王に異圖ありてハムレットを殺さんと企つ。ハムレット逆まに英王を殺し、二妃をゐて歸國す。叔父に Wiglerus といふあり、野心を抱きてハムレットを襲ふ。第一の妃 Hermetrude 敵に内應してハムレットを弑し、Wig. に嫁す、云々。』

之れだけを読んで見ても、全體の調子が陰惨な北方の匂ひの豊かな、古代サキソンの文學であることが肯かれる。

この粗野殺伐のハムレットを推定キッドがどう取扱つたであらうかは、非常に興味ある問題だが、無論「古劇ハムレット」の發見せられない限り、何と決定的に之を論斷する術もないわけである。

只第一四ツ折本と「ドイツ・ハムレット」とが幾分キッド作「古劇ハムレット」の面影を傳へてゐるものと推斷し、更に「スペイン悲劇」などを参照して見ると、こんな事が云へるやうである。——キッドの目的は何よりもこのハムレットの物語を借りて、「スペイン悲劇」のやうな復讐惨血劇を作り、一般大衆の喝采を博することであつたらしい。換言すれば、低級な大衆文學的目的以外何物もなかつたと云ひ得る。この目的のため、彼は事件の複雑を求めて、劇中劇や默劇、亡靈出現等の新趣向を考案したであらう。併し最も重大な彼の狙ひ所は復讐遷延である。これは「スペイン悲劇」でも明瞭に見らるゝ如く、彼は復讐を遷延又遷延せしめ、遷延することによつて事件をいやが上に複雑となし、渦卷の廓大と共に、周圍の殆どすべての者を大詰めに於て卷込まうとするのである。これは彼の得意とした手法らしい。そして其爲めに、ホレーショをして亡靈が一種の詐欺ではないかといふ事を暗示せしめ、そこへ俳優到着といふ仕組みなど考察したらしい。此の復讐遷延はシェークスピアのハムレットでも重大な中心問題で、それが心理的に少しの破綻を見せないで運ばれてゐるか、それとも必ずしもさうでないか、見る人の所見の相違で、劇も違つて價値づけられるわけである。

ともかくも大體として單なる慘血復讐劇、純粹なメロドラマ以上の何物でもなかつたであらうところの「古劇ハムレット」を、最後に此の劇詩人はどう換骨脱胎したか？ それは研究者に取つて最大の興味でなくてはならない。そして何よりも記憶して置かねばならぬことは、此の作者の執筆態度である。まづ第一に彼はいつも或る劇場で上演せらるべき脚本を書いてゐるのである。いつ誰が上演するか知れないが、書きたいから書くとか、書いて置けばその内せめて讀んでくれる人もあらうとか、いふやうな考へは毛頭ない。そして速筆で、豪放に書きつばなしであつたらしい。無論微妙な藝術意識の働かなかつた筈はないが、細かい、末の末まで、末梢神經的に氣にする性質ではなかつたであらう。そこで——と云はうか、或は若しかすると完全な原稿なり印刷本なりが失はれたが爲めといふ極機械的な損失からかも知れぬが——存外に古いぼろ切れが新しい衣装のところ／＼に附着してゐる。或は此比喩をもう一度使用すると、シェークスピアは古い布地を用ひて新しい衣裳を作るやうに註文せられて（自分の藝術意識によつて）ゐたのであるらしい。亡靈、劇中劇、戀愛、佯狂、眞狂、イギリスへの渡航、仕合ひ、そんな大衆の喜ぶ道具は少しでも使用せず置いてはならない。しかし單にそれ等を違つて配列するだけでは彼の天才が承知しない。大方それ等の事情のもとに成つた此の劇に、場面にも、人物の性格にも、隨分矛盾した點を見出だす事は、決して不思議でないといふはねばならぬ。例へば、かういふ具合ひである。

難するものいふ、第四幕第五場狂亂のオフィーリアが王妃を尋ねて來る所に、ホレーショが居合せてゐる。此は面白くない。既に居合せてオフィーリアの狂亂を目撃すれば、之をイギリスへの航海から歸國したハムレットに話さぬ筈はない。然るにハムレットは一言も之れに言及してゐない。辯ずるものは答へる、——成程これは面白くない。大方これは古劇に王妃とホレーショ談合の場面があるので、うつかりその儘としたのであらう。併し翻つて考へると、よしやホレーショが爰に居合せなかつたにしても、宮中での此の意外な出來事を彼が耳にせぬ筈はない。耳にすれば話したであらう。しかし此頃のハムレットはもう一種の諦觀に、人生の悲喜を超越したやうな心持ちにあつた。そしてと／＼情熱ではない、ほんの淡い感傷であつた此の戀はやゝ忘れ勝ちであつたであらう。或は若しかすると、痛みのあまりの鋭どさに之を口にしなかつたのかも知れない。

又難する者はいふ、——一體此劇は長過ぎる。それにはあまり興味のない挿話が餘計に這入つてゐるからである。例へばノールウェイへの使者が行つて歸るなど、どうでもよいではないか？

レイアティーズのバリ行き、又父ポロニアスがレイナールドを遣はして子の行状を探らせるのも、本筋には無関係で、一向に興味がないと。辯ずる者は答へる、——之は全く浪漫劇の性質も性格劇の本質も心得ぬ輩の愚問である。單に場面の變化や事件の複雑さから見ただけでも相應の意味がある上に、前者は軍國多事な空氣の締めくくりとして必要があり、後者はポロニアスの性格描寫上、缺く事のできないものとさへ云へるのである。

更に一步進んだ批評をする者も、王子の言動にどこか不調和な、不統一なところがある事を見ないわけに行かない。サンタヤナ教授は曰く、

「例へば祈禱中の王を前にしての彼の行動、それから此悪王の命を宥すについてそこで述べる二三の理由、それは明らかに古い物語に屬する誇大な高言の遺物で、シェイクスピアのものたるよりも、その動機に於て遙にキリスト教的であり又因襲的である。同様に、オフィーリアの墓で、レイアティーズとグロテスクな取組をするのも、多分古い駄法螺の一片が抹殺されずに残つたものである。二三深刻な文句中に、滑稽な、劣等な要素が面喰はすやうに交ざつてゐるのも、同じ事情に歸すべきものかも知れぬ、一例を挙げれば、ハムレットが亡靈について、

Ab, ha, boy I say'st thou so? art thou there, true-penny? Come on—You hear this fellow in the cellarage—……Well said, old mole I canst work i' the earth so fast? 「ん、ん、少年! さう謂ふか? そこに居るのか、正直者?……地の下の此者の言葉を聞いたであらう。……鼯鼠先生! 地中でそんな早業ができるのか?」……かうした文句は例の因襲的な笑劇の遺物で、或る人々の考へるやうに、エリザベス朝の劇は中世紀から此笑劇を繼承してゐたので、中世紀では、敬虔と猥雑、古風な單純さと大言壯語が、ごつちやになつてゐて、一向悪いとも思はれなかつたのである。』

ところで、かうした不調和、矛盾、といへば不調和であり矛盾であり、缺點と見れば缺點であるもの、シェイクスピアが不注意にも除去することを忘却したもの、が、又他面から見ると、いかにも主人公の性格を一層不可解にも神秘的にするもので、謂つて見ると、美人の頬の黒子、缺點のやうでもあり、又チャーミングな主要要素でもあるのである。そしてサンタヤナ教授は、中世紀と、その流込んだルネッサンスの持つ老衰して同時に若々しい特長、それから生れた美を、やはりこの「ハムレット」に見出すのである。

とに角、問題は問題として研究者に一任するとして、正しい諸者若くは観客がハムレットから受ける印象は、全く蠱惑的であることは慥かな事實である。彼が満堂の華かな色模様の衣裳美々しい間に黒一點の喪服を着けて現はれる刹那から、「餘は沈黙」の一語に永遠に其口を閉ぢるに至るまで、彼の變幻極りない光彩陸離の言動は全く息をもつかせない興味を與へ、そして結局彼の存在は、我々の一生を通じての値ひ高い寶玉になる。何といふ人なつこい、情け深く、思ひやりの厚い青年！ 何といふ正義を尙び、人を信じ、階級の區別なく一様に親切と懇懇とを以て交はる事を欲する王子！ 學問も好きである。劍道に疎くなく、勇氣もある。非常に芝居氣がある。王子らしい優雅な動作、それで機智縱横、炯眼であり敏感で、誠實と追従の區別が直ぐつく。誠實な者には両手を廣げて胸にかい抱くが、追従ものはどこ／＼までも輕蔑し、翻弄し、完膚なきまでに追究する。しかし如何なる場合にも、氣の毒な人間だといふ感じを乗越す事はない。そして美意識が非常に強い。決して感情に支配されはしないが、直覺的な醜惡感、どうともし切れないほど彼の心を暗うする。彼の父王に對する愛慕と敬意は並々ならず深い、それと同じ程度に、その弟、即ち叔父に對する醜惡感、何の理屈もなく、彼をして嫌惡的とする。かうした青年に思ひがけず落ち來た身邊の大事變は、性格を一變させる程な電觸を彼に與へないであらうか？

父王の突然の死、それを悼み悲しむ間もなく母が、——どこ／＼までも純潔無垢と信じた母が、大急ぎで嫌な叔父と結婚、そして王位は彼によつて占領される！

それだけでも自殺を念はざるを得ないハムレットの耳許に、雷石の落ちたが如く響いたのは、父の亡靈と其の命する「復讐」の一語！ 彼が殆ど狂するばかりに心亂れたのに少しの不思議もない。彼が若きフォーチンブラスだつたら、又は彼がレーアティーズだつたら、問題は極めて簡単に片づけられたであらう。彼等は失敗して却てそのため命を落とすかも知れないが、暴徒なり軍隊なりを率いて王宮に迫るのに、さう永い時を要しなかつたであらう。しかしハムレットは、どこまでもハムレットである。どうも彼の心の底を截ち割つて見ると、大方王を殺すことによつて復讐が遂げられ、主權を握ることによつて亂倫匡正の任務が果たされると、信じ得なかつたと推測される。彼は口に自己の狐疑逡巡を叱責してゐるが、それでゐて本心は、怯懦からでも何でもなく、復讐の行爲を無意識的にわざと——矛盾した二つの言葉を接合することを許されるれば——遷延させてゐる。爰に非常に心理的な、又神秘的な比類のない劇が成立するのである。

しかし主人公の出る場面ばかりではない。そこに記されてある言葉以外に又以上に、人の魂と

魂の火の出るやうな衝撃は、到る處に達觀の讀者を驚かせずにはゐない。ほんの小さな一例を擧げると、第二幕第二場、王子狂亂の眞因は何であらうかといふことが宮中での問題である時、侍従長ポロニアスは娘オフィリアの報告により、それは戀故といふ斷案がつき、大手柄をしたといふ得意心と、幾分悪い事をしたといふ悔悟の心とで、王の前に急いでゆく。丁度そこへ、ノールウェイ差遣の大使も歸着したといふので、二つの吉報を齎らすことになり、侍従長はもう得意満面で御前に出て、まづ大使歸還を述べ、次に「ハムレット様御狂氣の原因を發見いたしましたかと存じます」とやる。王に取つては大使よりも此方が大問題であるから、

O, speak of that; that do I long to hear.

「オー、それを話して貰はう。それこそ何より聞きたいと思つてゐる。」

と膝を乗りだす。すると狡猾なポロニアスは、こゝぞと、からかひ氣分をだして、

Give first admittance to the ambassadors ;

My news shall be the fruit to that great feast.

「まづ大使に謁見を賜はりませ。」

私のニュースはその御馳走に對し、食後の果物といたしませう。」

かういはれると、王でも、いやそれから先きにと駄々をこねるわけにはゆかない。しかし癢には觸はる。そこで、

Thyself do grace to them, and bring them in.

「彼等の名譽ぢや、そなた自身行つて案内して下さい。」

ポロニアスは致方ない。ぶつとふくれて迎へに行く。之だけの何でもない問答の間にも、二人の性格は暗夜の火事のやうに、はつきりと印象される。

コールリツヂ曰く「外的世界と其の出來事とは比較的臆氣にて、又それ自らにては興味なし、その心の鏡に映するに及びて初めて興味生じ来る。これ沙翁の意味なり」と。「ハムレット」に於て殊に此言のよく當て嵌まるを覺える。乃ち名優エドウィン・ブリス(彼れの生きてゐる間は他に誰れもハムレットを演じようといふ者がないと云はれたブリス、——ハムレットを演ずるために生れたといはれるブリス)の曰ふには「ハムレットは一個の概要 epilogue でなく、全人類の概要を示したものである。一種の魔法の鏡で、そのうちに男も女も、自己の反射を見るのである。」

25. King Lear.

「ニ ー ヤ H」

五幕、二五場、總行數三二〇二。

英王リーヤ年老いたるを以て、其領土を三分し、之を其三女に領たんとする。長女ゴネリル (Goneril) と次女リーガン (Regan) は言葉巧みにして父王の歡心を得れども、末なるコーディリア (Cordelia) は、姉達の心にもなき巧言を聞くにつれ、却つて反抗の心もや起しけん、父を思はざるにはなけれども、嫁ぎては父と等しく夫を愛するなど云ひて父の不興を蒙り、寸土の分與をも受けずして、相思の間なる佛王に嫁ぎ行く。忠臣ケント伯 (Earl of Kent) の切なる諫言に拘はらず、王は領土と王權を長女と次女とだけに割譲する。

姉娘は愈々領土を繼承するに及び、老父が尙數ある従者を隨へ勝手なる振舞ひするを快とせず、次第に父を疎んずる。(以上第一幕)。

老王其不孝を憤りて次女に行けば、二人は互に牒し合せて冷遇すること甚だしく、リーヤ王は激怒を發すれども事既に遅し。(以上第二幕)。

かくて王は次第に世を恨み人を憎み、狂態となつて荒野を住居とし、風雨を友とする。附添ふ者は、曩に直諫の爲に王の忌諱に觸れて追放となりし身を變装して王に忠勤すべく歸り來たケント伯と、道化者ばかり。一行あらしを避けて石小屋に入らんとする際、偶ま狂人に假装せる乞食體のエドガー (Edgar) に出會ふ、彼は宮中に仕ふる伯爵グロスター (Earl of Gloucester) の長男なるが、庶腹の弟エドマンド (Edmund) の奸策によつて、父から誤解され勘當を受けてゐたものである。グロスター伯は氣の狂つたリーヤ王に好意を寄せ、王の一行をして密かにドーヴァー (Dover) 地方に脱せしめる。然るに裏切者の其庶子エドマンドは此事をリーガンとゴネリルに内通したので、リーガンの婿コーンウォール公 (Duke of Cornwall) は、その刑罰として伯の兩眼を抉ぐり取る。(以上第三幕)。

盲目となりしグロスター伯はリーヤ王の跡を尋ねて荒野を辿るところを、かの假裝狂人のエドガーに認められる。この誠ある長子は父に其れと識られず彼を手引きしてドーヴァーに行き、そこで自殺せんとする彼を思ひ止まらせる。一方フランスに在るコーディリアは姉等の亡狀と父王の窮情を聞知して救援の義軍を起し、ドーヴァー附近の佛軍陣營に來て狂氣の父を介抱する。(以上第四幕)。

コーデイリアの佛軍は運拙くして、エドマンズの指揮する英軍に敗られ、彼女とリーヤは擒となる。かねてエドマンズに心を寄せてゐた不貞のゴネリルは、エドマンズ関係の嫉妬から、同じく不貞の妹リーガンを毒殺する、そして後に己れの不義を夫オールバニー公(Duke of Albany)に發見さるゝに及んで自ら刃に伏する。エドマンズは兄エドガーに挑まれ彼と決闘して歿する。コーデイリアはエドマンズの命令によつて獄中に絞殺され、其骸を抱いて老リーヤも亦その魂を天に歸へす。(以上第五幕)

若しシエークスピアの作を只一つ残して他はすべて亡ぼさねばならぬとしたら、何を選ぶか。それは、「リーヤ王」の一篇であつて欲しいと多くの批評家が一致する。此劇は沙翁の作中色々の意味で最上級の附せられる作である。それは疑ひもなく最も偉大な作である。最も深刻で最も痛ましく最も悲哀に満ちてゐる。併しながら同時に其大に比して最も人氣のない、従つて舞臺に上る事の最も少ない作である。

思ふに「リーヤ王」は舞臺に上ほすべく餘りに巨大な作ではないか。さすがの沙翁の手にも餘ると云つたやうな、従つて想餘りあつて構成の寧ろ緊密を缺いたところのある作ではあるまいか。

問題は天地をも包容する程の大きさ、人生の根本問題に觸れた深さ、あらゆる經驗が織りこまれ、其空氣は異様に冷たく、漠然として霧が懸つたやう、そして個人の運命と情熱は、やがて人間全體の運命で又情熱であるやうに、ひし／＼と胸にこたへる。總じて是れ詩的空想に於て、より多く生きる作である。今日迄考へ及ぶ舞臺と俳優とを以てしては、此詩的空想は寧ろ破壊されてしまふ。舞臺の空間と時間とに制限せられて此の巨人の巨作の眞味を仕生かす事は、非常の技術を要する。これ兎に角、劇としては可成りの弱所と見ねばならぬ。なぜならば、個様な深遠複雑なる大問題の解釋は一般の頭腦に入り難いから。しかし其れだからとて、此劇は藝術品として價値なくて、トルストイのいふが如く、沙翁の價値を下落せしむる好適例であらうか。

「リーヤ王」で注意すべき第一の事はその舞臺が古い／＼大昔に置かれてある事である。ヴィクトル・ユゴーの語を用ひれば、

「蒙昧の時代。……全地球が當時は神秘であつた。……エルサレムの殿堂がまだ新しい。セミラムスの庭園は九百年の前に築かれたのだが、次第に壞れ初めてゐる。……支那人は日蝕を觀測してゐる。……ヘンゾッドは死んだばかり、ホーマーがまだ生きてゐるとすればもう百歳であ

る、此時期だ、Their 即ちリリーヤ王が生き、そして暗黒な島を領してゐたのは。」
我々から云へば、支那では實に孔子老子以前の時代、わが國では神武以前、素戔鳴命の世界、そんな時代を想像しなくてはならぬ。人間と自然とがもつと密接な關係を持つた時代、若しくは自然がもつと強い力を以て人間に臨み、人間を威壓した時代、つまりお伽噺の世界、人間が石器時代から幾何も進化しない時代、さういふ時代を想像する事が必要である。少くとも基督教々化を経ない以前のブリテンの王リリーヤを考へる必要がある、王宮と雖も、近代の豪華莊麗な宮殿を想像してはならぬ。寧ろ極言すれば、ほんの堀立小屋から少し進化した許りのところ、従つて凡てが太い神経の所有者、土の香の鋭い人達、野蠻性か獸性かの今日よりもなほ強く表面に現はれてゐる事を想像せねばならぬ。

我々がまづ左様な古い時代を想像し、そこにリリーヤ王初めその三人の娘や其他の人物を置き、そして此大作を味ふうちに、忽ち問題は遠き古へでなく、すぐに直接に我々の時代と世界に迫つてくる。我々の左右の社會をさながらに描寫せられてゐる如くに感じてくる。我々の心の底ふかく潜む惡が、強い探照燈に照された如くに、まさまさと見せられる。そこに偉大な藝術品の不朽の力がある。それあつて初めて、人の心の今の如くあらんかぎり亡びない作になる。

まづ我々はリリーヤ王の身になつて見る事が必要である。王^{おと}齡い八十歳。三女がある。姉娘ゴネリル二十八歳、次の娘リリーガン二十六歳か、も一人の乙^{おと}娘は少し間があつて、生れてまだ二十歳であらうか。何しても王が五十歳から六十歳までの子供である。老年の子である。母はどんな人であつたか。Abercrombie の "King Lear's wife" の劇はあるが、誰も沙翁の「リリーヤ王」中で此母なる人の事を一語も云つたものはない。無論もう夙^ふくに歿して居るのらしい。印象から云へば母なる人は此三人の女の子を生んで、あまり長く彼等を育む間もなく死んだといふ感じを與へる。

王リリーヤは八十歳であるが甚だ強健、白髮白髯の間に見える顔は蝦の如く赤い。彼の狩を好み多くの従者を好む様を見よ。シェイクスピアのすべての偉大な主人公の誰もの如く、寛大である。廣い、信じ易い心の持主で、人を疑ふなどの心が少しもない。慥に好々爺である。しかし氣質は非常に痲痺で、怒り易い。忽ち雷が落ちる。殊に長い間、恐らく半世紀の間も、専制君主の權を握つて我儘勝手に振舞つて來たのであるから、その習慣といひ、老年といひ、君主であり家長である事といひ、彼の意志に反對しようとするものは誰もない、彼が勝手放題のむら氣を通すのは

或意味に於て尤もである。いはゞ當然である。しかし當然といふのは、人の世でいふ事である。魂の世界に於ては、それがそのまま通れる筈でもなく、又かくの如き状態のまま魂の世界に入る事は決して願はしい事ではない。「リーヤ王」の悲劇は、此性格を基礎として動き、荒れ、狂ひ、そして暴風の後の大きな沈静に歸着する。

假りにリーヤ王が或る夜、さすがに老いの眠られぬまゝに、考へた胸の中を探ぐつて見ると、かうもあらうか。――

「俺は老人だ。八十からの老人だ。此白髪を見い。白髪は榮えの冠りだ。誰も此白髪には尊敬しなくてはならぬ。無論してゐる。」

俺は長い間國を治めて來た。俺の支配のもとで誰も幸福であつた。少くとも不服をいふ者は一人も居ない。俺はなかなか偉い男なのだ。ところで、もう政治にも倦きた。國を治めるの誇りも心配も、もう充分だ。そろそろ若い者に國を譲つてやらう。

俺はまだまだ老衰はせぬ積りだ。此腕は、まだ此通り筋肉がぶり／＼するほど逞ましい。馬を荒野に驅つて狩をするのは愉快だ。弓を取つても若い奴等に負けはしない。ところで、今になつて何が一番欲しいかといふと、さうだ、愛だ。愛されるといふ事が、人生の何ものにも勝

る幸福の根原だ。實際俺は誰にも王として尊敬せられてゐる。尊敬せられてはゐるが又畏敬せられてはゐるが、同時に愛されてもゐるのだらうか。尊敬と愛とは別だ。

無論愛されてゐる。それに問題はない。殊にあの三人の可愛い娘等だ。あいつらは皆此わしを愛してゐる。愛してゐなくてどうしよう。親子の愛は人間を結びつける第一の、根本の、最も自然な繩だ。不孝といふ事を、unnatural (不自然の、不人情の) といふ形容詞で現はしてゐるのでも、わかる。

子等が俺を愛してゐる、それに疑ひはないが、しかし其愛を一層確實にするには、どうしたらよからう。何よりも彼等に物を呉れてやる事だ。よその老人を見てゐても、孫共に物を呉れてやれば「祖父さん、祖父さん」とちやほやされてゐる。さうだ、彼等の完全な愛を買ふために、此王國を分配してくれよう。

實を云ふと、同じ姉妹の三人ではあるが、姉の二人は何だかあまり好きでない。末娘のコーディーリアが一番可愛い。どうか此乙娘のやさしい手にみとられ介抱せられて此老を養ひたい。若し出來る事なら、此王國は皆んなコーディーリアに呉れてやりたいが、叔姉娘でもあれば兎に角、乙娘であつて見れば、いくら俺が権力を以てしても、さうはいたし難い。却て後の争ひのも

とになるのも氣迷ひである。

仕方がない。王國を三分し、その一番よいところを末娘にやらう。

そしてコーデイーリアを妻に欲しいと、バアガンデイー公とフランス王とが競り合つてゐるが、どうも先口でもあり、バアガンデイー公の方が望ましい婿らしい。あれに極めてやらう。バアガンデイー公をコーデイーリアの良人に、わしの老後をあれに托さう。

國土三分の事は、きめてしまつた。

ゴネリルの良人オールバニー公も、リーガンの良人コーンウォール公も、内々俺の腹を知つて非常に満足してゐるらしい。近頃殊に俺を大事にしてゐる様子が見える。

が此國土三分の事は廣く臣下を集めて之を告布しなくてはならぬ。そして其席上娘等に充分感謝の心を述べさせてやらう。皆々の前で、俺が娘等にどんなに愛されてゐるかを云はせ、臣下に之を聴かしめるも、やがては俺を愛させる源になるともいへる。殊に末娘のコーデイーリアは何といつて此父を愛してゐる心を述べるか、平生から言葉少なであるだけに興味がある。

さうだ、さう決めた。もう誰にも相談する必要はない。王たる俺の勝手にきめ得る事だ。さあ、その通りに地圖も作らせ、近日群臣を集めて之を宣言しよう。』

劇「リーヤ王」の初幕の上らぬ以前のリーヤ王の腹は、まづこんなものでもあつたらう。之が王として父として又愛を求める人として、正しい考へ方であるか否かは後に至つて明かになる。

第一幕第一場に於て、リーヤ王は次女の婿コーンウォール公、長女の婿オールバニー公、長女、次女、末女及び従臣大勢の前で國土三分の旨を發表し、「其方達の中で誰が最も深く予を愛してをるかを聞かしてくれ、眞に孝徳ある者に最大の恩恵を與へようと思ふ」と宣べる。長女次女いづれも同じ様に最上級の甘言を盡して愛を誓ふが、最も優しき言葉を吐くであらうと待設けられた最愛の末女は案に相違して唯「子たる者の義務相當に愛します、其れ以上でも以下でもなく」夫をもてば夫に事へると等分に父上に仕へます」と直言するので、いたく父王の癢に觸はり、コーデイーリアは勘當となつて何物も與へられず、フランス王に遣られ、領土と王權は二分して二人の姉娘と其夫達のものとなる。之を直諫した誠忠の臣ケンント伯は追放に處せられる。

國土分配は後の争の根を絶たん爲とリーヤはいふが、それが既に彼の判断力の薄弱を示してゐて、それこそ禍根である。一家の總領と二男三男の關係をどうすべきかと云ふ事は、面白い六ヶしい問題で、往々御家騒動の源となり易い。家産分配に兄弟の仲違ひは、そんなじよそこらに常に

起る事件である。殊に父なり母なりが末の子を愛するといふ事も、色々の事情からして有り勝ちである。一番の解決は子孫の爲めに美田を買はぬ事である。少しでもあれば喧嘩のもと、彼等に遺すに健全な體力と立派な性格とを以てすればよい。財産が全くないと却て奮發させ、互に扶助する美風を生じさせる。リーヤ王もその領土を子女に分配し相續せしむる事をしなかつたら、こんな悲劇はなかつたかと考へられる。

王國分配は既定の計畫としたところで、子等の愛情の申立に由つて之を配たんといふこと、その事自身すでに正氣の沙汰でないと謂ふべきではないか。此くの如きは老王のムラ氣にて、子等より他愛もなき我儘な親らしい報酬を求めたに過ぎぬ。長く専制を行ひ、由來癩癩な氣まぐれの、妻を失つてゐる老翁に、又リーヤの性格に、似合はしい行ひとも見られよう。

三人の姉妹がそれぞれ我々に紹介された。同じ父、同じ母から生れて、性格のまるで違ふ兄弟が出来た事は、そこにもこゝにも見る事實だ。遺傳とか血統とかいふ事のあるのは、無論疑はれぬであらうが、それは餘程複雑な、今日まで到達した科學の力では到底解釋しきれない程のものであると思はれる。

ゴネリルとリーガン 何れ劣らぬ不倫不孝兇惡無二の姉妹。無論姉の方が力もあり勇氣もあり又策もある丈恐ろしさが強い、マクベス夫人を思ひ起こさせる。但し此の兩人は、まだまだ其の性格が充分に現はれない、發展しない。まだほんの隠れた傾向位であるかも知れない。しかし事件のすんすん進むにつれて、擴大もされ、増長もし、従つて色々の悲劇の種ともなつて来る。「地金」の露はれて来るのは、まだこれからである。それを印象ふかく示すのが劇の重大な任務でもある。

コーデイーリアに至つては、此劇中その出場僅に四場、口を開くこと百行を越えざれども、沙翁作中の、最も絶對的に個性を有する人である。そして多辯なるハムレットと同じ様に、寡言なる姫は矢張り一個のミステリーである。彼女は優しい、が強いところがある。天上界の人のやうな純白と眞理を托げぬ力とがある。

體も小さい、「きやしや」だ。聲はやさしくて低い。母を早く失つたと見える感がある。父に尤も愛せられてゐるが、割合に懐しきは薄い。あの兩人を姉に持つて、いつも感情を壓迫することに慣れてゐた。熱ある戀も感じなかつたやうに思はれる。

コーデイーリアの態々父を怒らす如き言葉は不自然ではないかとも思はれようが、彼女は兼々

姉兩人の本心を知り、その心にもなき追従に腹立たしく、又國土分配の危険につき幾分か諫むる考へにはあらざりしか。しかも「オセロー」のデズデモーナが云ひ解く事の出来ぬやうに（他の女なら何でもないことを）、彼女も亦餘りに純真で、生一本で、父をしてあの怒りに達せしめることを止め得なかつた。彼女はあの直言に對して父が、

So young and so untender?

「そんなに歳がゆかないで、そんなに優しげがないとは？」

と訊ねたに答へて、

So young, my lord, and true.

といふが、實にその通りであらう。併し *true* 許りが此世の善とはいへぬ。そして此不幸な一言は出でて又歸らず、父を多人數の席で耻かゝすやうな結果になつた。

彼女も父の子で、やはり一徹なところが充分にある。それに姉達に對する反感やら一種の矜持^{じやうぢ}やらが手傳つて、旁々それらの反射が彼の不幸な言葉となつた事が充分に首肯できる。そしていろいろの經驗を積むにつれて、次第に益々圓滿に善良になつてゆく。

こゝに同じ幕の第二場で副筋(*sub-plot*)が加はり、グロスター伯一族の御家騒動が醸される。庶腹の次男エドマンドが「乗せられ易い親父や正直一圖の兄貴、悪い事をかりにも能うしない性質だから、人がしようとも思はない、其の馬鹿正直が此方の附け目」と密かに兄なる嫡子エドガ1を陥めて已れ家督を相続せんと陰謀を抱き、自分へ宛てた「若し父を亡き者にするを得ば其財産の一半は汝に與ふべし」といふ意味の質手紙を書き、之を見エドガーから來たとて父に示し、兄が父を殺して早く家督を繼ぎ財産を恣にした意あるやうに讒し、父を怒らせて以て兄を勘當せしめるやうにするのである。

斯く御家騒動（親子間兄弟姉妹間の喧嘩）が二つ相重なることは、あまり多人數になり複雑になるが爲め興味の集中を難んずるといふ構成上の弱點を生ずる。併し深刻な人生の經驗を描いた劇としては、同じ様な二事件の重なり合ふは、却て、その悲しみが單に特異な個人の上へのみあるのでなく、恐ろしく普遍的であるといふ考を起こさせる。

主人グロスター伯爵、白髪の老人、六十歳位。比較的年若き子を持つのと妻のない點はリーヤそのまゝ。性急で、信じ易い。勿論悪人ではないが、積極的に善人といふ程でなく、今のところオールバニーと共に中立的。そして迷信的で、性格は不明ではないが印象の弱い男。

エドマンド 二十六歳。イアゴと似てゐる悪漢。併しやゝ軽い、皮相的だ。そして華やかなところがある。それ丈一種の同情を起こさせる。そして悪くはあるが真直に悪い。又全然冒險者だ。そして目的に向つて一直線に行く。庶子で、卑しめられる身分であることが幾分彼れの動機を辯解(Justify)する。

エドガー 二十七八歳。最初エドマンドから父の立腹を聞いて一も二もなく逃げ出すなどは其の性格に似合はしいと思はれぬが、経験に由つて次第に心が發達して來るのが面白い。彼は元氣を以て忍耐する。そして場合に應じて色々手段を講じて中々に窮せぬ。若さと喜びとが曾て失はれぬのは「シムベリン」中のイモーゼンに似てゐる。その最後の活動は健氣で鮮かである。

さて國を二分して之を二女に配つたリーヤ王は一百の従者を引率して長女ゴネリルの家に留まつてゐる。乙娘^{おと}コーディーリアを勘當して一層氣はムシヤクシヤし、獵に出で酒をあふり、ゴネリルの家でも迷惑するやうな振舞は随分あるらしい。彼女は顔をしかめる。そして

If he dislike it, let him to our sister,
Whose mind and mine, I know, in that are one,

Not to be over-ruled. Idle old man,

That still would manage those authorities

That he hath given away! Now, by my life,

Old fools are babes again; and must be used

With checks as flatteries,—when they are seen abused.

それでお氣に染まなければ、妹の處へいらつしやるがよい。あれの心も、壓制させておかないといふ點だけは、わたしと一致してゐます。役にも立たん老爺！一たん讓つておきながら其の權力をいつまでも振廻さうとしてゐるんだもの！ほんとうに老けると赤兒に復るのだから、機嫌ばかりとつてゐると増長してしやうがない、時々叱りつけなくちや不可けません。

(第一幕、第三場。坪内博士譯による)

などと家令に告げて、そろそろ親を粗末にしかける。

「盗みをしても三分の理窟」といふ諺がある。人間のどんな行爲にも辯護しようと思へば、三分や四分辯護の餘地がないといふやうな行爲は決してない。盗みをしても「食へないから」とか「不平均に澤山持つてゐるのだ」とか、「つい出來心」とかいりいろ云へる。此三分の理窟が最もよく其の人の性格を示す。これに非常に注意せねばならぬ。今此ゴネリルのいふところも三分の理窟

はたつ。そして冷いハートが次第々々に判然^{はつきり}してくる。

同じ幕の第四場で、曩^{むかし}きに追放されし忠臣ケント伯が下人に姿をかへて歸り來り、リーヤ王に仕へる。

變装のケント伯は再び仕を求めたとき、「幾歳になるか」と王から尋ねられて、

Not so young, sir, to love a woman for singing, nor so old to dote on her for anything: I have years on my back forty eight.

歌が巧いからつて女に惚れるほど若くも御座いませんが、なんだかんだつて女に現^まを抜かすほどぼけても居りません。もう四十八年だけ背負ひこみました。

(第一幕第四場、坪内博士譯による)

と答へるが、實は四十八歳ではなく、六十以上である。彼は愛せられ又感謝せられる人物である。彼は忠義を以て一貫する。盲目的に飽までも忠義者だ。老年の我儘な無理なりーヤは見えないで、いつ迄も盛時の畏ろしくも威容のある王と見える。彼は發狂後の王にも曾て敬語を用ひずといふ事はない。彼は過ぎる程卒直である。そして血性で又性急だ。その爲に思はぬ過失をする、少く

とも敵に利用せられる。一寸リーヤの一面を其まゝの様な點もある。

コーデイーリア姫がフランスに行つて以來すつかり元氣をなくしてゐたといはれる阿呆(Fool)も出て来る。

Foolとは王公貴人の邸に抱へられて阿呆なまねを演る者で、リーヤ王も鬱さ晴らしに此フルを抱へて愛顧し、談し相手として居るのである。沙翁は色々異つた道化方を書いたが、此「リーヤ王」に出て来る道化者よりもすぐれた道化者はどこにも出て來ない。此フルは大方十八九歳の少年であらう。全く醇な心持と詩人肌な鋭敏な感じを持つてゐる。どうやら肺に(腦でなく)故障がありはしないか、心の臆病さもさる事ながら、後に老王リーヤの伴をして雨風の外氣に打たれるのは肉體的に厭はしいらしい。無論臆病で、随分大膽な批評を道化者の特權でやつてゐるが、しかし喧嘩などが聲高に眞剣になると、すぐ、すつ込んで了ふ、沈黙になる。(彼れの最後が如何なつたか不明なことも——Bradley教授は之を作者の不注意故と推察したが——却つて興味があるやうに思ふ)。

今やリーヤの左右にあるものは、主として此フルと、かの假裝したケントとである。

第二幕に入つて、リーヤ王は次第に虐待する姉娘のところに居づらくなると共に、妹娘リーガンの心底をもよく知らないで、これに身を寄せんとて来る。が、リーガンは色々辭柄を構へて之を拒み、老王に向つて、姉の邸へ戻つて詫びよと言ふ。王大いに憤慨して男泣きに泣き、殆んど狂亂の體にて、暗夜に、風雨、雷鳴、電光の中を戸外に出る。王を外に曝らし出したまゝ門は閉ぢられる。

次の幕に移つて、尙ほ荒れ狂ふ嵐と闘ひ大聲に罵しりわめきつゝ、頭髮を掻きむしり焼くそになつて荒野を駆けまはるリーヤを、阿呆とケントが介抱して、附近の石小屋へ入れ憩はせる。

すると其の小屋の中に、みじめな乞食のやうな一人の狂人が居る。是れ他ならぬあのエドガーである。彼は父グロスターが弟エドマンドの話を信じて、自分をば親殺しを企てる科人と思ひ込んで、引捕へて處分せんと行衛を捜し居る由を、エドマンドから聞いて、あたふた逃げ出し、こんな風に身をやつして、此處で避難して居るのである。

石小屋の中に、氣違ひになつてゐる老リーヤ、狂を装ふエドガー、それに馬鹿をまねるフール、此三人出會の事は、とても涙なしに讀んでゐられない、見てゐられない。古今の大作中これ程莊

嚴な美の歌はれたところは他に多くはあるまい。

そこへ丁度グロスター伯が炬火を携へて出で来る。彼はさすがに久しい主君なるリーヤ王を氣の毒に思ひ、王を捜して内々でいたはり助けようとして、此處へ來たのであるが、リーヤがこゝに留まつてゐては生命が危いとして急ぎドーヴァーまで落ち延びさせる。

この第三幕は例の如く頂點^{クライマックス}である。あゝ何といふみじめな世界であらう、もう世界には神も佛もないのか、正義も破れ慈悲も碎けてしまふのか、此老王が雨風の中に狂亂の態にてあれまはる其れをもなほ追窮せず止まぬ悪人ばらの全盛！

しかも茲に不思議な事實を發見する。此處を峠として悪人どもは頓々拍子に榮えて行き、善人連中は益々悲境に下つて行くが、しかし幸福といふ點から云へば、どんなに考へても、悪人どもは益々嫉み、猜み、争ひ、怒りの苦悶に陥るし、善人連中はその境遇のまことに見るかげもなく悲しいのにも拘らず、心の和らぎ、心の光が次第に得られてくる事感せずには居ない。

リーガンの婿コーンウォール公は、グロスター伯がリーヤ王をかばひ、フランスに内通したとエドマンドの訴へに由り、謀叛人として懲罰を加へるとして老伯を面前に引出し、生きながらに其

の兩眼をくり抜く。之を見てみたコーンウォールの一從者は堪まらず劍を抜いて主人を傷ける。

三十四五歳のコーンウォール公、リーガンとは似たもの夫婦で、悪人である上に卑怯者。此の名もなき從臣の義憤の一撃で痛手を負ふのは、好い氣味の觀を與へる。

目なしのグロスターは我子エドガーとは知らず其の手に引かれて、リイヤ王の跡を追ひドゥアーまで落ち行き、そこで自殺しようとしたが救はれる。

老王はケントその他に伴はれ、コーデイリアの義軍に加はる爲めドゥアーの方へつれて行かれる。「フール」このあたりから居なくなる。

老父を告訴して陥れたエドマンドは、今や其功により父の後を襲うてグロスター伯爵となる。

材幹はある、年は若い、好男子でもある。軍を統率して立派な大將である。ゴネリルは良人ある身を忘れてエドマンドに心をよせる。

ゴネリルの良人オールバニーは三十五六歳か、悪人ではないが弱い男である。ゴネリルの言葉に由れば mild husband である。

It is the cowish terror of his spirit.

*That dares not undertake : he'll not feel wrongs
Which tie him to an answer.*

事をやり得ない良人の臆病根性、侮辱を受けても

勢ひ決闘せねばならんやうになると思ふと黙止する。(第四幕第二場)

彼は斯く罪のない、平和を好む男である。ゴネリルには只持參金丈でなく、あの fiery beauty に惚れてゐたらしい。そして初のうちは妻の強い意志に自由にされた傾が見える。それで一緒に成つて不親切な行爲は有つたやうであるが、妻のあの不孝な振舞に對して多く責任は持たされぬ。本來考への正しい善良な人物のことゝて、妻の事を知るに及んで目が覺めてゴネリルを嫌ひ初めた。其後次第に全くリイヤ王やコーデイリアの方に好意を持つやうになり、其事に關して第四幕第二場に激しい夫婦喧嘩があり互ひに怒罵の交換をやる。個様な次第で彼はゴネリルの慍悍な悪辣な氣質には合はない。彼女は齒がゆい。それで、きびきびしてゐるエドマンドに心をよせる。ところで妹のリーガンも同じ心になる。此方は幸に良人が僕の爲めに刺されて死んでしまふので、エドマンドと正式に結婚する自由を得る。そこにゴネリルの嫉妬は怖ろしく燃え立つ。

戦争はいよく接近する。フランス王は止み難き國の大事のため歸國せねばならぬので、リーヤ王のための義軍はコーデイリア一人のもとに進軍するの外ない。一方ブリテン軍に於ける總帥オールバニー公の位置は余程困難であつた。敵は佛兵ではあるが、自分の心中ではコーデイリアと王との義軍に同情があつて、之れに又向ふに忍びぬ。そこで能力の優れる又悪黨のエドマンドの影にかくれて了ふ。但し彼が後に至つてエドマンドに對し大叛逆の罪を鳴らして其の奸計密謀を打破し（第五幕第三場）又戦後の善後策を講ずる其の最後の奮闘振りには、天晴れ目ざまし

第五幕に至つて、遂に戦の捷利はエドマンド等の惡の側に歸する。彼等は勝ち誇つてリーヤとコーデイリアとを捕虜にして了ふ。正しい善良なコーデイリアは牢獄に繋がれねばならぬ。老いたる狂氣の王リーヤも同様である。畢竟惡は勝つて善の負けるのが人生の常の有様か。しかし、そんな外面的な事でなく、もつと内面的な本質的な人生の幸不幸から考へると必ずしもさうでない。老王リーヤはその最も愛する者を引連れてゐる事は、此れ以上に望まれぬ幸福である。

Come, let's away to prison :

We two alone will sing like birds i' the cage :

When thou dost ask me blessing, I'll kneel down,

And ask of thee forgiveness.

さあさあ牢へ行かう、牢へ。

二人ざりで籠の中の鳥の様に唄はう。

そなたが祝福してくれいと 予に頼む時には、

予が膝を突いて、恕してくれいとそなたに頼まう。

リーヤの此の言葉は決して皮肉でも狂人の語でも何でもなく、心からの喜びの聲である。

同じ場面を少し進んで、リーガンとゴネリルとの姉妹喧嘩（兩方に夫婦約束をしたエドマンドをめぐつて兩人の醜い争）のくだりを讀むと、勝ち誇つてはゐるが惡の收穫のどんなものであるかを痛感せずにはゐられない。

そして遂に姉は嫉妬のあまりに妹を毒害し、自分もまた夫オールバニーから不義密謀の證據（夫

を亡き者にしてエドマンドと結婚する申合せの密書)を突きつけられて、策成らずと見るや劍に當つて死んで了ふ。

死はやがてエドマンドの上にも来る。今まで變装したエドガーはオールバニー公と打合せの上今やこゝに公然名乗りをあげ(それより少し前に彼は已れがかくまつて置いた父グロスターに初めて自分を打明け是までの一伍一什を物語り、父は其を聞いて莞爾として往生を遂げた)弟エドマンドが叛逆の奸計の證據を曝露して、彼に一騎打を挑み、エドマンドは兄の手に冥罰の痛手を負ふのである。

しかも死は惡の側ばかりではない。我々の最も美しい花であつたコーデイリアも牢獄のなかで、エドマンドの命に由り暗殺者の爲に殺されて了ふ。——後に急いで取消の令が出たが、あゝ既に晚し! その死骸を抱へて老王は舞臺へ現はれるが、間もなく斷腸して息絶える。

惡人すべて亡び、善人も、常に元氣にあふれたエドガーと忠義一徹のケントの外は、皆倒れて了つた。

人の生は斯くの如くにして善も惡も亡びて了ふのか。

ケントは最愛の乙媛の亡骸を抱へて出で来るリーヤを見て、

Is this the promised end (of the world)?

(これが約束の世のおはりか)

と嘆けいたが、實際かくの如きものが、凡て人間の作つた社會の最後の姿であらうか。

斯くの如くにして此の大悲劇は大團圓を告げる。罪、あらゆる罪惡——忘恩、虚偽、我慾、劣情、無慚、不義の大渦卷は眩めく速度を以てこゝに回轉する。親子の愛何處にかある、兄弟姉妹の情何處にかある、夫婦の親み何處にかある。王もあらばこそ、愛と尊敬とを受くべき白髪もあらばこそ、凡ての物を巻き盡して之を無底の大地獄に蹴落す。どこに光明があらう、どこに慰藉があらう。我等はハズリットと共に、何も言はずに此劇を通過し行きたい心地がする。

若し主人公の名を以て劇に命名しないで其表徴するところに由つたなら、正に *The Tempest* と命名すべきは此劇であらう。げにや大暴風雨のやうに心も身も魂も荒れ荒び、吹き惱まされ、そして其静まり行くととき我等は只頭を垂れて嚴かな畏に打たれ、神秘に觸れた沈黙を感じるの外はない。

「リーヤ王」は沙翁劇中の最も怖ろしい活畫である。その弱きものは尤も弱く、その愚かなるは他に類ひなく、その兇惡なるは到底改善の見込がない程であり、その不幸なるは此上なく不幸である。全篇を通じ人生の意義に關して深刻にも厭世的悲觀的で、その運命觀は最も暗く最も痛酷なる性質のものである。リーヤ王の痛はしい、いぢらしい末路、殊に純潔無垢天使の如き可憐なコーデイーリアの哀切なる最期に至つては、萬人同情の涙を絞らざるはない。

As flies to wanton boys are we to the Gods,

They kill us for their sport.

我々人間の神に於けるや、蝶々とんぼの腕白小僧に於けるが如くぢや。

神は玩みに我々を殺したまふ。(第四幕第一場)

とグロスターは呟つてゐるが、眞に其の通りだと、しみじみ感じさせられる。

シェークスピアが逝いてから約百年頃に、其の戯曲の改作が流行した。當時の淺薄な審美眼に訴へて、沙翁の劇作を全く改悪して上演し、非常に得意がつた時代が長く續いた。「マクベス」が一種の *musical comedy* のやうな、ダンスの多いものになり、その魔女達が滑稽的に取扱はれ

たのも此頃であつた。「ロミオとジュリエット」の結末の悲慘に飽足らず、兩人が相抱いて死ぬるといふやうに改めたのも此頃であつた。就中著しいのは「リーヤ王」の場合であつた。ドライデン派の作家 Nahum Tate の其改作では、コーデイーリアとエドガーとが戀人となつて老後のリーヤを大切にするといふ筋になつてゐるので、例の常識文豪ジョンソン博士の如きは、*Poetic Justice* 「詩上の裁判」(勸善懲惡)の點から之れに大賛成してゐる。けれども此の如き目出たし／＼の結末は全くシェークスピアの作意にも叶はず、又苟くも詩を解し悲劇を解する人は決して個様な姑息な妥協を喜ばない。現實を直視して、不幸な結末は氣の毒には思ふが、奈何とも致し方ないと觀念する。善必ずしも榮えざるも、悲しいながら其れが人生の實相であつて、止むを得ない。厭世悲觀のどん底にある時には、人は兎角、我々を支配する正義も何もない、人生は出たための處だ、無茶苦茶なところだと思ひ易い。併し此悲觀の眞中を過ぎて、退いて熟ら考へると、惡が榮えて善が亡びるが如き状態は人生のノーマルな状態ではない、惡は人生のアブノーマルな状態だ、人生の病だ、一時の禍だ、平常状態はやはり美しい正しい世界だ、と大悟し得るのである。

夫れ藝術の最上の又最後の機能は魂の淨化といふ事にある。魂が一時的のものを捨て永遠なものを見、物質の境を超越して靈のものに面接する。これ宗教の極致でもあり又藝術の極致である。此意味に於て藝術中の尤も高いものは、プラトニー、アリストートルと共に、悲劇であるといひたい。燃える煩惱は凡て物質的なもの、我慾なもの、現世的なもの、瞬間的なものを焼き盡し、純な黄金ばかりが残る。此火を経験する事に由つて我々は一段と立派な人間になる。斯く観するときは、リーヤの如きは必ずしも不幸な最後を遂げたとはいへない。老年に到つて下された鞭は、痛ましい事は誠に痛ましい限りである。けれどもリーヤも鞭を受けねばならぬ多くのものを持つてゐる。そして鞭の爲めに、我儘な考は全く淨められ、謙虚な心になつてゆく彼を、あまり長く此世に留めて置き度くはないといふ氣持になる。

「リーヤ王」の一篇は、遠くはエスキラスの悲劇に、近くはドストエフスキーの小説「罪と罰」などに比すべきもので、人間の魂の試練を最も力強く高調したる天下一品の作である。

人生は魂が様々の試練を経て進歩し向上して行くところであるといふ信仰を、も一度強調したい。グロスターは何を學んだか、リーヤ王は何を學んだか。誇り、我儘、空しき支配慾、權力を

たのみ、物質をあてにした彼の一生は、其晩年に於て恐ろしい學問をせねばならぬ事になつた。あの白髪の上に科せられた課目は實に氣の毒である。ケント伯は、

Sir, I am too old to learn.

「學ぶには齡を取りすぎてゐます。」(第二幕第二場)

と云ふが、人間は、神の命であれば、いつの年だつて學ばなくてはならぬ。

我儘や誇が不可といふやうな事は、ほんの小學兒童でも口にし得る智恵である。しかしそれを學ぶために、生命をも位をも子等をも總べてをも失はねばならぬ事がある。願はくは我々は「學ぶには齡を取り過ぎて居る」にならぬ先に學びたい。

此作は一六〇四乃至一六〇六年に書かれたものと云はれる。

本文中 Quarto 版に "British" とあるのが Folio 版には "English" となつてゐる。これ Oct. 20, 1604 にジョームス一世がイングランドとスコットランドとを合せて British と呼ぶべき事を宣言したのに由つて改訂したのであらう。故に「リーヤ」の稿は其前であるとも見えるが又他面には沙翁は English の名のまだ人の耳に熟してゐた宣言後程もない頃に書いて、やがて

改訂したのとも考へられる。

第一幕第二場九十六行にグロスターの言葉として、

These late eclipses in the sun and moon portend no good to us.

とある。で、記録に由れば月日蝕は一六〇五年の十月に起つたので、當時人心に多少の動搖があつた事が明白である。沙翁が其記録のまだ新しい頃に書いたとすれば、一六〇五年の終りつ方ではあるまいか。

劇中の季節から云へば嵐の季節は冬であるが、リーヤが頭に飾つた草花は明かに七月の野のものである。

それやこれやで、一六〇五年の冬に稿を起し、一六〇六年の夏終へたものと、断定するのが Knight 氏である。

リーヤ王と其三女との話は英國史にはいと古い物語で、かの Layamon の "Brut" (1205) の基礎と成つた Monmouth の Geoffrey——Walse の國境に住んだ僧といはれてゐるが其存在そのもの迄霧の裡に包まれてゐる——の "Historia Britonum" 「英國史」の第二卷第十一章より十

五章迄に記載してあるのが蓋し最古のものであらう。無論今いふ "Brut" には其第一卷 123—158 の間に同じ物語が歌つてある。

爾來幾多の詩文散文にリーヤ王の話は記されてあり、Spenser も「仙女王傳」の第二卷第十齣に歌つてゐる。併し沙翁が直接材料を求めたのは Holinshed の年代記であることは云ふ迄もない。此年代記は happy ending で、「リーヤはコーデイーリアの助を借りて英軍を一掃し、二年間、位に即いた。そして平和の間に逝いた。王の死後コーデイーリア位に即きて五年、其夫の死に逢ひ、姉の子等叛き、遂に捕虜となつたが、男々しい氣性なので遂に自殺した。」とある。

此物語に附加するに、沙翁は Sir Philip Sidney の "Arcadia" に記してある Paphlagonia の王の話をして、Gloucester の挿話とした。

一六〇三年に出版せられた戯曲に "The True Chronicle History of King Leir and his three daughters" と云ふのがある。併しその興味は、凡庸な作家の筆として好個の對照を沙翁の天才の作に與ふるに過ぎない。

此劇は細末な點に於て非常に作者の不用意なところの多い作であることは否定せられぬ。例へ

ば次々の如く疑問を容るべき所がある。

- (一) エドガーがエドマンドに書いたと謂ふ處の怪文書を不思議がらぬとはグロスターも餘程の愚物で、又そんな愚物を欺くには何も念入りに贋筆するにも及ぶまい。
- (二) グロスターのお伴をするエドガーが或は狂人の如く或は紳士の如く或は農夫の如く語るを、父が少しも聞きとがめぬのも變ではないか。
- (三) リーヤとゴネリル、共に使をリーガンに送り、又返事を要求してゐるが、それにも拘らず兩人は使者の後を追ふてリーガンの所へ走つてゐる。
- (四) なぜエドガーは、もつと早く盲目の父に自分を打明けぬか。
- (五) ケントが最後まで假裝してゐるのはなぜか。
- (六) 場所の觀念が頗る不明である。——グロスターといふ所がコオンウールの居城であるやうにもあり、又 Earl of Gloucester との混雜も見える。

26. Othello, The Moor of Venice.

「ヴェニス島のムーア人オセロー」

五幕、一五場、總行數三三〇二。

ヴェニスの勢力ある元老院議官の獨り娘、若く麗はしきデズデモーナ (Desdemona) は、男の公明なる心、勇ましき武勳、乃至限りなく興味ある冒険談に心動かされ、父の許を得ずしてムーア人なる將軍オセローと結婚する。之を知つた父ブラバンシオー (Brabantio) は怒つて、ヴェニス太公 (Duke of Venice) の廳に赴き、娘を誘拐されたと訴へる。然るにデズデモーナの申開きにより、其れが誠の相愛から出たものであることが判つて此結婚は認められ、恰かも此時トルコの艦隊がサイプラス島 (Cyprus) を攻撃せんとする危機に備へるため、オセローが總督として赴任すべく命を受けたので、新郎新婦は急ぎ同島へ出發する。(以上第一幕)。

オセローの旗手イアゴ (Iago) は、將軍が副官として己れを擧げずキヤシオー (Cassio) を起用したことの不平などから、秘かに敵意を抱いてゐたが、一行サイプラスに到着後、トルコ艦隊暴風雨によつて潰滅した事と兼ねて總督夫婦新婚の祝賀のため催された宴會の最中、彼は以前デズ

デモーナへの求婚者の一人ロデリーゴ (Rodrigo) としふ若者を探つてキャシオーの酩酊に乗じて喧嘩させ、大騒ぎを惹起させる。キャシオーは此失態で副官の職を免ぜらる。(以上第二幕)。

イアーゴは茲で「復讐にはデズデモーナを通して懇願するに如くはない、オセローは夫人の言ふことなら何でも聴くから」と説いて親切らしくキャシオーに勧める。キャシオーがデズデモーナに面會して頼み込んでゐる其の場へイアーゴはオセローを來合はさせ、彼が別れて歸り行く姿を眺めつゝ、どうも夫人との仲が怪しいといふ意をほめかして、將軍に疑念を抱かせ、以後も用意周到水も漏らさぬ計畫で、種々様々な手段を使つて二人が道ならぬ戀に陥つてゐるといふことをオセローに信じさせようと努め、百方將軍の猜疑を煽り嫉妬心を深めることに怠りがない。その一策として、彼はオセローからデズデモーナに與へたハンカチーフを盗み出してキャシオーに拾はせ、それを彼の手中に見出したとオセローに誠しやかに告げる。(以上第三幕)。

單純正直なオセローはイアーゴの術中に陥つて此等の讒言を事實と思ひ込み、己が妻の不貞を確信して、遂に彼女を殺さうと決心するに至り、一方イアーゴをしてキャシオーを殺させようとする。(以上第四幕)。

イアーゴの走狗ロデリーゴは其使喚により街上キャシオーを襲ひ闘争中、キャシオーはロ

デリーゴを傷つけるが、自分はイアーゴの暗撃ちにかゝつて彼れに刺され負傷する。同時にイアーゴはロデリーゴを暗殺してしまふ。かゝる内にも、一方オセローはデズデモーナの寢室へ入つて彼女を絞め殺す。處が彼女の附添なるイアーゴの妻イミリア (Emilia) の口から、オセローは今し殺せる己が妻の潔白を聞かされる。イアーゴは怒つてイミリアを殺す。茲に於てイアーゴの陰謀暴露するも、嗚呼時すでに遅し。オセローは悲憤の情に堪へず、イアーゴを刺して傷け、己れも自殺する。キャシオーは生残つてオセローの後任總督となり、イアーゴは召捕られて罪狀を大略白状したが、尙拷問責めに逢ふこととなる。(以上第五幕)。

此劇の書かれた年代は、多くは一六〇四年と推定せらるゝが、一六一一年説—一二年説—一四年説などもある。

かの高き山に登るを好むものは、高山植物と知られる色々の花の得も云はれぬ清く冴えた色に打たれる。好奇家は是等の花を都會の地に持歸り栽培するが、どう苦心しても、あの數千尺の高き岩山に生ひ育つた時の色を花咲かす事は出来ない。花はあまりに清く、あまりに純潔で、塵と埃の町に生ひ育たぬのである。吾々が今ま研究しようとする悲劇「オセロー」は、都會の生み出す

汚なさ醜くさ陋しさのなかに移し植えた高山植物の一輪の花の悲劇である。信するが故に破れ、清きが故に滅ぶ、それこそ人間の悲劇であつて、これほど人の世を呪はしく思はせるものがあらうか。

一個の劇として「オセロー」は單純な脚色になつてゐる事に先づ注意が向けられる。所謂筋の一致が保たれて殆ど副筋といふものがない。全く岐路に入る事なく、沙翁悲劇に多く見られる滑稽な場面や人物が出て悲劇的緊張味を緩和する事は、此劇には殆どない。第三幕の第一場及び第四場に道化方が出て来るが、それも殆ど申譯に出る丈で、いつもの道化方の面白味は少しもない。開幕劈頭のロデリーゴとイアゴとの對話と共に觀衆の興味は忽ち集中せられ、少しの弛みなくして大詰に切つて来る。

葛藤が比較的幕數が進んでから起るといふ説、即ちジョンソン博士の第一幕無用論は、今日誰も顧みないが、準備を調へるのに全二幕を要してゐるほど此劇は深い性格悲劇である、といふ事は云へる。

今は昔、イタリアはヴェニスの水の都に、武勇並びなきオセロー將軍といふ武人がゐた。重用ひられて、市の兵馬の權を一手に握つてゐる。由來イタリアでは黨派の争ひが絶えない。そこで武勇にすぐれた同國人に軍隊の權力を與へて置くと、その男が横暴を極め壓制を行ふ憂ひがあるといふので、いつも他國人、殊に一段下等人種と思はれる者を選び、之に番犬の用をなさしめるのである。オセローも最も忠實なるヴェニスの番犬で、彼はムーア人である。ムーア人といへば、基督教に改宗したアフリカ、アラビア地方の人を指すので、かのアフリカの黒人の如きではないにしても、色の白いヴェニス人などに比すれば、色の黒い劣等人種であるとされてゐる。

しかし彼は體格の偉大な、筋骨秀でた堂々たる武人。年齢は、自から *I am declined into the vale of years* 「もう齡が下り阪ぢや」と云ひ、又 *the young affects in me defunct* 「血氣の慾は、はや歇んでござる」と述べてゐるのを見ても、かれこれ四十の阪を越えてゐると見える。彼は「王族たるものゝ血統を引き」決して卑賤な生れではない。そして七歳の時から戦陣に従ひ、只九ヶ月間の無爲の時のあつた許りで、常に戦争に従事し、所謂千軍萬馬の間を経來りたる古武士である。

此オセローの勇敢にして又カラ竹を割つた如きサラリとした武人肌に、ひどく最負にしたのは

ヴェニスの上院にも最も勢力あるブラバンシオーである。一方ならず彼を寵愛し、屢々自邸に招いて、好んで其の戦争談や冒険談や異人種野蠻人等諸外國の珍らしい物語や其の幼少からの身の上話などを聞く。ロマンチックな無限の好奇心の時代のことゝて、一人女のデズデモーナも不思議さうに、しかも興味と感激と信用を以て、此等の話に耳を傾けるうち、いつの間にやら戀に陥る。一ト目見てのではない。次第に頼もしき人といふ感じを加へて來た戀。年長者を夫に持ちたいと思ふ婦人。必ずしも獨立心が足りぬとはいはぬが、sweetなやさしい在來の日本の婦人式なのは寧ろ此方。徒らに面白い話に浮かされて魅せられたと見てはならない。

そしてオセローの方からは、やさしい無垢な乙女の、心からの同情に感激した戀。ローミオーとジュリエットとは違ふ。彼は既に四十の阪を越えてゐるだけに、青春時代のやうな、素直な同時に無鐵砲な行動はしない。それにも拘らず戀愛關係になるのは、彼の自白が最も正しく説明してゐる。

She loved me for the dangers I had pass'd,

And I loved her that she did pity them.

This only is the witchcraft I have used :

姫は予が艱難を致したる故に予を愛し、

予は同感しくれたる故に姫を愛する

用ひた妖術とては此外には御座らぬ。(第一幕第三場)

どうして個様な色黒の他國人で年上の男を、まだうら若い姫が戀したかといふと、戀は思案の外とやらだけではない。オセローの性格を見なくてはならぬ。

性格は、第一に彼は高潔(Noble)である。ノブルな人は他人を疑はない。彼は自分の氣高い心からして、人も又その通りであらうと信じ、更に疑念を挟まない(沙翁の主人公は概ねさうである)。彼はキャシオーを信じ、イアーゴを信じてゐる。彼れに少しでも猜疑の心があつたらイアーゴの奸智も忽ち見破られたであらう。彼がイアーゴに誑らかされたのは、彼に取つて譽(Credit)であるとさへ云へる。彼が最後に自分のことを *one not easily jealous* (めつたに猜疑心をもたぬ男) と云つたのは、正しい自己批判である。

彼れのデズデモーナに對する愛も此ノブルな心から出た純粹で熱烈なものであつた。決してヴェニスの高官の一人娘であるが故に立身に都合よいなど考へる事は毛頭ない。

ノーブルな彼は人に對して寛大である。彼がキャシオーの職を纏ぐのも、實際不本意であるが軍規の手前致方ないといふ心からの事で、寛大な心は彼をも許してやりたかつたのである。故に彼は此時にも決して眞に怒つてキャシオーを追ふといふやり方であらう筈はない。

心のノーブルな人は亦謙遜である。少しの虚榮もない。決して空威張をしない。と同時に自分の價值をも充分に認めて、決して卑屈ではない。充分尊嚴を保ち、主張すべき事は主張する。

次に見逃がしてはならないオセロの特質は、非常に詩人肌でロマンチックである事である。彼れの一生も彼の戀もロマンチックである。彼はむくつけき一介の武人で詩人とは非常に遠いやうに思ふのは、詩人に對する概念の誤つた人の考へである。眞の詩人は只神經的なセンチメンタルな、佳句を列べて喜んだり、戀に破れてメソメソしたりするものではない。詩人とは直觀と感激のすぐれた人である。小兒の如く一直線に物事を觀する。まわりくどく氣をまわしたり疑つたりする事より遠い。そして非常に感激性に富んでゐる。彼がヴェニスに盡し、又ヴェニスの國難に當つて喜んで海外に押渡つたるあたり、慥にヴェニスの人々の知遇に感激した行爲と見られる。此感激性が彼れの戀を生み、同時に破滅をも生んだ。彼は休火山である。底には恐ろしい燃える火を藏してゐるが、強い意志の力と長い戦場に於ける訓練からしてデツと壓へてゐる。そ

して沈着な克己心の強い將軍であるが、その沈着なのは決してイアゴのやうに智的な爲めではなく、高い情熱を徳に由つて壓へつけた力である。

彼は斯く詩人肌ではあるが、決して哲學者肌の深く測り遠く慮かるの資質を持つてゐない。彼は武人の常なる如く、率直に、明快に、果斷に事を行ふ。彼は克己自制の徳を缺いてはゐないが、又決して輕率ではないが、一旦信じた事をも重ねて考へて見る事をしない。恐らく信する事の厚きに失する——と云ひ得れば——爲であらう。

そして單純で素直であつて、所謂世間を知らない、(又結婚して程もないので、充分にデズデモーナを知る機會もなかつたのである)。彼は飽まで堂々として高邁な大度な磊落な將軍である。

他方に於て、デズデモーナはと云ふと、年齢二十何歳で、美くしい。母が居ない事は、彼女を餘計に家のなかに閉込めたい、そして世間智について學ぶ機會がなかつた原因ともなるらしい。「女らしい」といふ語は近來多少色合を變へたやうであるが、併し彼女が依然として、男らしい男性的な女に對して、最も女らしい女である事は疑はれない。

作者は此劇の譚を伊太利の小説家ジラルディ・チンシオー(Giraldi Cinthio)の「百物語」Hee-

catonifih (一五六五年シ、リーにて出版) から得たのだと云はれてゐるが、その原小説に於ては、デズデモーナが父に反いてまでも他國人と結婚した事の罰にて死に逢ふといふ趣旨で、釣合はぬ結婚や父母の許さぬ結婚をするものではないといふ教訓が、小説の目的になつてゐる。併し若し人此沙翁の劇にても同じ程度の事を考へ、デズデモーナが我儘で、淫奔で、性急で、親不孝であるが爲めに、こんな目に逢ふのだなどと解する人があれば、その人はシェイクスピアを研究する價値も劇を理解する力もないものといはねばならない。作者がなんで、そんななま甘い事に其の心血を注がう。我々も又そんな事を研究のなんのとさわぐ筈はないのである。

デズデモーナほど心の單純な(キリストが、小兒の如く單純な人にして初めて天國に行かれると話されたやうな)、麗はしい、人を信じ、更に惡を知らない、生れたまゝの、清いかよわい性格の女は、殆ど他に見られない。ジュリエットには、もつと *passion* がある。コーデイリアは、もつと人の心(就中惡い心)が見える。オフィーリアは、まだこれほどの一個の性格になり切らない。イモーゼンは更に強い。

世にはブルータスとポーシヤとの如く似たもの夫婦もあるが、又似ぬもの夫婦もある。デズデモーナとオセローとの引着けは相反するものゝ引着けであると批評家 *Brantoe* が云つたのは適切

である。オセローが男のうちの男であるやうに、デズデモーナが女の中の女である。そして彼女の戀は決して眼や耳やに由つてでなく、魂と魂との引着けである。總じて女性は男性と異り、餘程の浮氣者でない以上、單に美男子であるの、歌がうまいのといふやうな事で、眞の戀に陥るものではない。力といふものを、より多く求める事は、女性に取つての必要が、やがてその趣味とならしめたのであらう。それを忘れてはならぬ。

デズデモーナの小膽臆病は注意せねばならぬ。欠點といへばそれ。オセローは彼女には *my Lord* である、「こちの人」でなくて、「我君様」である、三つ指をついて物申し上ぐる方である。

話頭元へ還つて。——兩人の此戀は成立する。公明正大なオセローは決してコソ／＼やらない。副官(又は副將) キャシオーが暫しは媒となつて使者に立つてゐる。

キャシオーは三十歳の好男子。勇氣もある。才子で、副官肌。熱心な主思ひ。一を云はれて二をやる。オセローの事ならなんでもする程心服してゐる。

デズデモーナは父に告げず、秘かに家を出て、或る旅館に行き結婚する。それを忌々しく思ふイアーゴはロデリーゴに之を告げる。痴漢ロデリーゴはかねてデズデモーナに對する戀慕

報いられざるも、なか／＼諦らめがつかず、所謂「馬鹿の一つ思ひ」で、イアーゴの助けを藉つて、全財産を抛つても本望を遂げんと、常々しつこく焦がれて居るので、二人で眞夜中に街を大聲で觸れ散らし、ブラバンシオー邸の前で、泥坊！泥坊！娘を盗まれて知らずに居るか！と、けた／＼ましく呼び立てて一家を起すに、主人驚いて檢べると、娘は在らず、それから大騒ぎとなつて、主人自ら追手を率ひ行衛を捜がしに行く途中、オセローが元老院よりの至急の召に應じて出頭せんとするに會ふ。ブラバンシオー憤然彼れを引捕へて厳しく其不埒を詰責し、誘拐の廉でヴェニス政廳に訴へ出る。太公の前に召喚されて二人出頭し取調を受け、そこでデズデモナは立派に申開きをなし、どこまでも誠意を以てオセローと添遂げる覺悟と言ひ切る。(しかし其あとで又彼女は全くオセローの背後に隠れてお人形さんのやうになつてゐる)。結局正しい戀愛事件との裁斷で、ブラバンシオーも泣寝入り。折しもトルコの大艦隊がヴェニスの所領サイブラスを侵さんとするとの急報來り、太公はじめ元老會議の評定でオセローに、總督となつて大火急に該地へ出向はれたいとあつて、二人は新郎新婦として赴任し得ることになる。別れに臨んで父ブラバンシオーは

Look to her, Moor, if thou hast eyes to see;

She has deceiv'd her father, and may thee.

「ムーアの、目があらば氣を附けられよ。父を欺した女なればおん身をも欺しかねまい。」との意味ありげな言葉を遺しゆく、あと見送つてオセローの一言――

My life upon her faith! 此命を賭けても彼女が操を! (第一幕第三場)

これぞ暗に後の大破綻の伏線となる。

第二幕に入つて、サイブラス島へは先づキャシオーが着き、次にデズデモナと、イアーゴと、總督夫人の附添としてイアーゴに隨つて來た彼れの妻イミリアと、イアーゴが夜番させるとて姿を變させ人知れず窺かに連れて來たロデリーゴとの一行が着し、次で總督が到着。然るにトルコの艦隊は折柄の暴風雨に逢ひ散亂して全滅した爲め、幸ひに大事に及ばずして濟んだ。が、是から起るはオセロー一家の風波。

その夜敵艦隊全滅の祝賀會兼ねて將軍新婚披露會が開かれる。どうせ無禮講だが、騒動が起つてはいけないと、要心深いオセローは警護を副官キャシオーと旗手イアーゴに托する。イアーゴは此機に乗じて、遠廻はしにキャシオー等を陥むれる計畫の第一歩を踏み出す。乃ちキャシ

オーが酒好きで酒癖悪きを利用し、ロデリーゴーを使喚して亂酔のキャシオーに無禮を如へ喧嘩を賣らしめ、キャシオーは抜劍してロデリーゴーを追掛け、之を止める假總督モンタノー將軍まで傍杖を喰つて負傷し大騒ぎになる。新總督その場に來つて此失態を詰り、誰の責かと糺問する。イアーゴーは友達の誼よしなで成るだけキャシオーを庇ふかのやうな風に騒ぎの仕末を告げる。オセローはキャシオーに解職を申渡す。イアーゴーは、そしらぬ顔してキャシオーに向ひ、總督夫人に縋つて復職を頼めと勸告する。

こゝで暫らくイアーゴーの性格解剖を試みることにしよう。――

Bradley 教授は、沙翁劇の most wonderful characters はフォールスタッフとハムレットとクレオパトラとイアーゴーとの四人であるといつた。げにイアーゴーは沙翁の最もすばらしい創造物の一である。彼れ歳二十八(と第一幕第三場で自稱してゐる。虚言家の彼れも、更に虚言の必要を見ないところに虚言を吐くとは思はれない。もつと年長でもよいと思はれるほどに世間智に長けてゐるが、併しそれは彼に取つては天才(?)の致さしめるところ、年齢とは關係はない)。容貌については作中云ふところがないが、原小説にある handsome といふ形容詞を拒絶する理

由は更に認められない。鋭い眼を除いては、キビクした軍人肌の相應な好男子と見て差支なからう。聲自慢で、酔ふと忽ち歌ひ、氣さくな、表面人のよさそうな、honest な男といふ印象を人に與へる。彼は誰にも阿諛などしない、無遠慮に思ふ儘を云つてゐる。

誰も彼を疑つてゐない。オセローは毎々彼れを忠實者と呼んでゐる。妻のイミリアとても決して悪人とは思つてゐない。

勿論彼は極悪非道、奸獪の點に於て最上級を與ふべき男だが、誰からも其の邪智を看破せられも、感づかれさへもしないところ、彼れに相應どこかに魔力がある事を示してゐる。その魔力の一部として、肉體上決して他人に悪感情を起させるやうな處のない事も記憶する必要がある。滑かな辯舌、當意即妙な機智、そしてどこかユーモアの感じがある。それ等が肉體上のチャームと加はつて、彼れの地獄の最下底にあるべき黒い本質を覆ふて、彼をして墮地獄的の行爲をするに便ならしめてゐる。

イアーゴーの性格と共に此劇に於て中心となり、又最も困難にて興味あるは、彼が何故オセローを陥れたかといふ動機の問題である。此問題を解く爲めに、先づ第一に彼れ自ら何といつて居るか。彼がロデリーゴー(その他誰にも云はない)にいふところを見ると、第一幕第一場では副官

に用ひて呉れぬからオセローを悪むといひ、第一幕第三場では憎んでゐると云ひながら理由を説明しない。彼の獨白によると、自分の妻と密通したから(第一幕第三場及第二幕第一場)といふ。

第一の、副官にして呉れぬ不平はあらう。併しそれも只一度ロデリーゴに云つた丈で他の獨白にては曾て云はず、又イアゴの男がそれ式の恨みであれ丈の事を謀んだとも思へぬ。若又それをば重大な動機として描く積りであれば、沙翁ほどの作者が只一語それを云はせた丈で放置しておく筈はない。副官になり度いといふ熱望と又その叶はなかつた事を示す場面を作る事は、此大劇作家に取つては茶飯事でなくてはならぬ。やはり此語は、無論多少の心の曇りにはなつてゐた事であらうが、主としてロデリーゴに満足させる丈の當座の句である。

第二に、オセローがイアゴの妻に云々といふことが根もない事であるのは無論明白で、又眞實イアゴがそれを疑つてゐると思はれない。第二幕第一場の最後の傍白(*aside*)の如きは彼れの下劣な根性を其まゝさらけ出してゐるものに過ぎないやうに思へる。彼れは自分の妻がオセローとあやしいと云ふかと思へば、キャシオともあやしいといふ。これ明かに其性質の致さしめるところで、そんなら果して眞實さう思ふかと云へば、彼の智力は直ぐにそれを否定するので、阿呆らしくて、深く突きつめようとはしない。但だ此等の言葉は以て彼れの邪惡な猜疑心を示すに恰好な言葉として重要である。オセローは先にも述べる如く、猜疑心嫉妬心の更にない、よく人を信ずる、朗らかな性質であるが、猜疑心の強く嫉妬心の深いのはイアゴである。一寸こゝに一言を挿むが、元來獨白(*soliloquy*)といふものは、人物の腹の中を觀衆に割つて見せるためのものである。「ハムレット」に於ても「マクベス」に於ても我々はその多くの實例を見た。然し此「オセロー」に於ては餘程趣きが異つてゐる。此劇では獨白は比較的少ない。就中主人公のは僅しかない。一番多いのはイアゴの獨白である。普通の例に由れば、此獨白に由つて彼れの本心が其まゝ我々に示されるわけだが、此劇では、さうでないらしい。イアゴが悪計を企て之れを獨白で述べるが、その述べるところが直に彼れの本心でない。彼は稀代の虚言家である。しかし彼れとても只獨りなるとき虚言を吐く必要がないやうに思へる。然るに實際はある。彼は彼れの良心に向つて虚言を吐いてゐるのである。コールリツヂの有名な言葉は、よく此心持を道破してゐる。曰く *the motive-hunting of a motiveless malignity.*

即ち是れ「動機なき惡意の動機さがし」に外ならぬ。彼れは尋常人から見れば全く動機のない惡事をしてゐるので——何か憎む原因、復讐の動機がなくてする惡事は、それこそ惡鬼の所業——それを流石に彼の如き惡漢でも、己れの良心に向つて、聊か云ひわけして、さる惡事をするのも

尤もだと自ら欺かうとしてゐるのが、彼れの獨白である。

そこでイアーゴの悪行には、普通にいふ動機はなくして、しかも彼れをして爾かなさしめるのは、彼れの性格である。毒蛇は生れながらにして毒を持つてゐる。彼が他を噛み他を毒するのはその性質である。そこが、劇「オセロー」が單に *tragedy of intrigue* 陰謀悲劇でなくて *tragedy of character* たる所以である。

猜疑嫉妬の心は小人の事である。イアーゴが只の一小人であれば到底此大悲劇の大動力たり得る筈はない。彼には更に驚くべき性格がある。それあるが爲めに我々は彼をハツ裂きにしても足らぬと思ひながら、なほ偉いと或る意味で感嘆させられるのである。それは彼の、すばらしい智力である。由來悪人は薄野呂では出来ない。「うそをつくよりも實を語る方がやさしいよ」とハムレットはいふが、眞實を語るより辻褄の合ふ虚言を吐く方が遙に智力を要す。イアーゴの智力は、よく他人の性格を洞察する。彼はオセローやロデリーゴの人物を看破し、デズデモーナ、キヤシオー皆その特性が適確に彼の胸中に描かれて居り、それに従つて彼の作戦計畫はなされる。

彼は此自分の絶大な智力を自覺してゐる。そして誇りを以てゐる。第一幕第三場、第二幕第一場、同第三場、第四幕第一場などに其例が見える。此の自慢でもあり得意でもある智力を行使す

る事が、彼れの眞の動機であるやうに思はれる。善の爲めの善、美の爲めの美があれば、惡の爲めの惡もあるべきであるが、イアーゴの實はそれに近いものである。けれど其れを分解して見れば、諸惡中にも最も怖ろしい「誇り」であるやうに思はれる。惡いには無論惡い男、それが惡智恵を働かせ、それが着々圖に乗つて行く面白味が、彼れの最大の興味であるらしい。第二幕第三場の終で彼がロデリーゴに論ず白^{せう}などは其例を示してゐる。

加之、彼は智に優れてゐるばかりでなく、意志の力も強い。彼が自らを失ひ、思はず興奮したり、我れを忘れて腹を立てたりする事は、曾て一度もない。あく迄冷めたく、その目的に向つてグン／＼進んでゆく。

かやうな智力と意力とを用ひ、オセロー即ち己れの長官にして又美しき妻を娶つた男を、いちめ苦しめ馬鹿にする事に、限りなき興味を覺えてゐるのがイアーゴである。

それ以上の理由をイアーゴに求めねば承知出来ぬ人は、ロデリーゴ同様理解力のない人である。ロデリーゴはイアーゴがオセローを憎む理由を聞かされねば承知せず、故に詐はりの理由を聞かされてゐる。

案ずるに、イアーゴは一種の人生觀を持つてゐる。それに由つて、人間といふものは、若し

その人が賢いなら、何もかも自分の爲めになるやうにすべきだと信じてゐる。彼が第一幕第一場でロデリーゴに向つて主我主義の教義を説いてゐるところは、全く本心から出てゐる。調子には冗談的なところがあるが、全く本氣な人生觀である。

そしてイアーゴは純然たる道德の否定者である。嘲弄者である。「道德は強者が弱者を黙らす爲めに勝手に造つたものである。」といふニイチエの思想は、イアーゴの夙くに述べてゐる所である。殊に婦徳などあり得ないと思つてゐる。彼が妻のイミリヤを疑ひ、又デズデモーナがキヤンオーを愛する事もあり得ると思ふのは、全く此婦徳を信じない點から出發する。彼は今日の言葉で以てすれば、道德上の完全なアナキストである。虚無主義者である。

男子が自分の貞操は一向に反省しないで、婦人の貞操のみやかましく云はうとするのは、慥に片手落である。それは吾々是非改めなくてはならぬ。しかし婦人の貞操、それに對する信仰が、人の世をして美しからしめる主要最大の要素である事は否まれない。かのスエーデンのストリンドベルヒが、躬みづから悩み、そして之を劇の形にして問ふた大問題——父親は自分の子と呼ぶものが果して自分の子である事を、どうして知る事が出来るか?——は今日の科學の力では證明し得られない。實際誰の子であるかは、婦人その人のみ知る事の出来る大秘密である。男子一たび

こゝに疑を抱けば、今まで幸福であつた人生は忽ち暗くなり寂しくなつて了ふ。そしてストリンドベルヒその人もさうであつたが、彼の書いた人物の多くが進み行つたやうに、遂に氣狂ひにならずにはゐられない。我々が信仰を要求せられるのは、只宗教上の事だけではない。ゲーテの云つたやうに、一人の子供が生れると、それは感謝と信仰とを有つて受入れるべきであると思ふの外はない。

然るにイアーゴその他近代の道德上のアナキストには、全然此信仰はない。悪い事をして見つかるとは頓馬である、見つからぬやうに有りたけの悪い事をするのが人間である——かういふ唯我的功利主義の人生觀に立つて行動するのがイアーゴである。

これを要するに、イアーゴは惡の爲めに惡をする。普通、惡の行はるゝ場合は、復讐か、自己の利益のためか、大抵此二者の一つを出でないがイアーゴの場合は其どちらでもない。彼は(第一) 道德を否定し、「人間に徳性など存在しない。すべて人の一舉一動は皆自己本位の打算から行はれる。徳とか義理とか忠義とか言ふ徒は愚人である。」とする。

(第二) 「人と人との間に信任はない。男女間の操といふものもない。隙さへあれば、男女は

衝動に従つて好き勝手な事をするものである」と信じてゐる。

(第三) 彼には涙もなければ、温い人情もない。あるものは鋭い理智、自己の利益になるか否かを見抜く冷やかな頭だけである。彼の目から見れば、世間の男女は皆馬鹿であり、意志の弱い臍抜けである。

(第四) 彼は嫉妬心が強い。他人の立身、他人の家庭の平和、その幸福なのを見て、心に平かなるを得ない。(吾々とても幾分かある——同僚の失墜を喜ぶ心など)。何とかケチをつけ邪魔を入れずにはゐられない。之が所謂小人であり、卑劣漢であり、悪人である。(イアーゴを小にした人物は世間に少なくない)。

第三幕になつて話は愈々蕪境に入る。

あのやうな大姦物の奸計と自分の過失よりして免職になつたキャシオーは、イアーゴの勧めに従ひデズデモーナに頼んで復職せんと欲して、更に彼れの術中に陥ゐることとなる。

デズデモーナは今や幸福の頂點にある。よしや家郷は離れても、心から愛し合つてゐる良人のそばに居て非常に仕合せである、自分が幸ひであればあるほど、他の人をも幸ひにしてあげたいとい

ふ善良な心で一杯になつてゐる。そこでキャシオーの依頼を一も二もなく承知し、早速良人にその執成しをする。若し茲にイアーゴがゐなかつたなら、オセローも愛する妻の執りなしでもあり、又キャシオーの過失も非常に悪い性質のものでないのであるから、やゝホトボリの冷めるを待つて之を許したに相違ない。然るにイアーゴは豫ねての作戦計畫により、妻(オセロー夫人の附添)に吩咐けてキャシオーを奥へ取持たせ——彼には親切心からする様に思はせて——其間に自分はオセローを別の所へ連れ出し、キャシオーがデズデモーナに頼み込んで居る最中に相伴うて戻る、丁度その時キャシオーが夫人と別れて往く姿を見て、*I like not that*「こりや面白くない」と言つて、オセローの耳に毒を注ぎ込んだから堪まらない。「奥さんとキャシオーとは何かあやしい」といふ意味を暗示する此の寸鐵殺人的の一語は、オセローの疑心を挑發せずには措かぬ。そして引續いて、或は唯だ好奇心を起させ向ふをして勝手に思ふつばに解釋せしめ、或は此方から進んで説かず先方の猜疑心を唆つて置いて、徐々に先方から無理に聞出させるやうにし、それからそれへと手を換へ品を換へ、巧妙を極めた方法で、世間知らずの一本調子の武人オセローの少しづつ信ぜざるを得ないやうに持ちかける、その手際は非常な恐ろしい智力の者ならでは能はず。第三第四の大場に於て其の睦まじい夫婦を離間する陰險なる佞辯毒舌や、其の邪推

的想像を刺戟して罪なき人を罪深くも迷はず狡猾手段や、愈々出でて愈々辛辣、眞に及び易からずと驚嘆せざるを得ぬ。

オセローは元來決して疑ひ深い男ではないが、次に述べるが如き弱みのあることだけは忘れるわけにゆかない。

- 一、妻と年齢が違つてゐる。若いものは何といつても若いものを好くだらうと思ふ。
- 二、人種が違つてゐて、殊に自分は劣等視せられてゐる醜い有色人種である。之に反してキャシオーは若い好男子、口の甘い、禮儀の正しい、婦人に好かれさうな男である。殊にデズデモナと同郷人である。イアーゴに

I know our country disposition well;
In Venice they do let heaven see the pranks
They dare not show their husbands; their best conscience
Is not to leave't undone, but keep't unknown.

「自分の國の婦人の性質はよく知つておりますが、ヴェニスでは夫には得見せぬイタヅラを天には平氣で見せます。せずにおくのではなくて、知らさぬやうにするのが彼等の最上の良心で

す。」(第一幕第三場)

と聞かされると、他國人たる悲さに何とも反駁できず、*Dost thou say so?* 「果して左様かなア」と皺がれて答へる外はない。

三、何といつてもデズデモナとの結婚の正式を踏まなかつた事が、彼女の性格を充分に理解せぬ彼れには、蓮葉な婦人だと云はれれば、或はさうかとも思はせる。父ブラバンシオーの「娘に油断めさるな」云々といふ囁の言葉(既掲)も思ひ出されて来る。

四、何としても、人の心を見る目のない、所謂人情學に迂いオセローである。餘程蓮葉な教養のない婦人なら兎も角、婦人が或る男子の只聲が美しいとか、男振りがよいとか、年が若いとか、それ位のことではハートを左右せられるものではない。ましてデズデモナはズツト深い愛を感じ得る婦人である。のに、それが分らない。

そこで一度び猜疑嫉妬の毒が心に汚み込んだ以上、もう一秒時間の心の平和もない。嫉妬―何といふ怪物であらう。the green-eyed monster which doth mock the meat it feeds on 「己の餌食を弄ぶ緑眼の怪物」(第三幕第三場イアーゴの語)! はたアラビアン・ナイトの物語にある壺中の怪物!

嫉妬の一番の苦痛は人に告白できぬ事。就中當の妻なら妻に對して、男としてなかく云へない。さつくばらんに話せない。オセローは獨り快々として煩悶する。

彼が證據々々とイアーゴに求めるのも、此人らしい。そこに笑ふべき單純さがある。實際イアーゴの笑つて言ふ(第三幕第三場)如く、男女の不義などには、第三者の把えるべき證據はあり得ない。そしてオセローは證據にもならぬ證據――

(一) キャシオーが寢言に、デズデモーナとの醜關係を示すやうなことを口走つたのを、同衾せしイアーゴが聞いたといふ事。(第三幕第三場、根もなき拵らへこと)。

(二) オセローが夫人に贈つた最初の記念品たる大事のハンケチをキャシオーが持つてゐるのをイアーゴが見たといひ、又其れがキャシオーの情婦ビアンカ Bianca の手に在るのをオセローも見た事。(第三幕第四場乃至第四幕第一場、其ハンケチは實はイアーゴが豫め計つて妻イミリヤから窃に手に入れ、其をキャシオーの部屋に落して置いて彼に拾はすやう仕掛けしなり)。

(三) 不義を働らいたと當のキャシオーがイアーゴに白狀したといふ事。(第四幕第一場、勿論讒言)。

(四) キャシオーが女との痴話狂ひぶりを身振り入りで笑ひながらイアーゴに語るのをオセロー

一蔭で見聞する事。(第四幕第一場、實は情婦ビアンカを相手のキャシオーの笑ひ話しなるを、疑心暗鬼でデズデモーナとの事に感じさせるやう仕組んだる見え透えた手段)。

こんなものを證據として、つかまされ、それらを信じてデズデモーナを責める。斯うなつては彼女がキャシオーの爲に骨を折れば折るほど邪推を募らせるばかり。デズデモーナが繰返して頻りにキャシオーの復讐を懇願する折、彼は一寸とした其の言葉尻を捉へて腹を立て彼女を打擲する。

それから前記證據の第三なる白狀云々の事に就いて、イアーゴの殊にいやらしき挑撥的な話しぶりに藥利き過ぎて、オセローが癲癇を起し昏倒する事や、或は附添のイミリヤがデズデモーナとキャシオーとの不義の密會を取持つものと自分で不快な想像を描いて色々彼女の様子を訊ねる事(第四幕第二場)や、甚しきはイミリヤに表戸で見張番をさせ、宛ながら密會者であるかのやうにデズデモーナと對坐して、言語同斷の下劣極まる場面を自ら作り、まるで淫賣屋の如く振舞ひ、彼女を賣淫婦と悪口して稍や自ら慰めてゐるところ(同上)などを見ると、オセローの胸中は、實際嫉妬の病に冒された者のみの理解し得る生きながらの地獄の苛責である。それらの嫉妬的言動は、或る意味に於ては必ずしも嫉妬でない、卑しい嫉妬でなくて、いとしくて堪まらぬ

者を憎まざるを得ざる苦痛が堪まらない餘りの腕きである。

實に第三幕の後半あたりから第四幕を通じて、憐むべしオセローは最早前日のオセローにあらず、恰ど理性を失ひ、平生の本心を喪ひ、見るかげもない熱病やみである。もう氣高い堂々たるオセローは見られないが、さりとて我々は、かくまでも變り果てたかと思つて同情こそすれ、もともとくだらない男であつたのだと思ふやうなことは決してない。

たうとう彼に兩人を殺さうとの考へが起つたのは無理もない。但しキャシオーの方はイアーゴーが下手人たることを引受ける。同時に彼はキャシオーの後任としてイアーゴーを副官にする旨申渡す。

第五幕の初めに於て、ロデリーゴーはイアーゴーの説得により街上にキャシオーを要して斬つてかゝつたが、キャシオーに突かれて負傷し、次でイアーゴーの暗討ちに逢うて倒れてしまふ。同時にイアーゴーは背後よりキャシオーを刺して逃走し、キャシオーは脚を切り裂かれて場外に運び去られる。これはイアーゴーが此兩人とも生かして置いては己れのために不利であり危険であるとの考へから、あはよくば一石二鳥を斃さんとの策をめぐらしたものである。

斯かる間に、最愛の妻が若きが故に美しきが故に肉の誘ひに收れて神聖なるべき夫婦愛を裏切つたと思ひつめ、最早どうしても彼女を生かして置けぬと決心したオセローは、しかし死によつて彼女の肉體は罰しても、その魂は殺したくなかつた。彼は無意識かも知れぬが、デズデモーナの魂に向つては依然として熱い愛を感じずにはゐられなかつたのである。短刀の把手を握りしめつゝ彼は、すやくと美しく眠れる妻の寝顔を見入り、腸を掻きむしるやうに、かう叫んだ――

Be thus when thou art dead, and I will kill thee,

And love thee after.

「そなたが死んでからも、このやうにあつてくれ。わしはそなたを殺して、それからそなたを愛しよう。」

これぞオセローの深い魂の呻きの聲であつたに相違ない。やがて彼は彼女が目醒すのを待つて殺意を告げ、遂に寢床の中で壓殺してしまふ。

彼が斯く肉體だけを亡きものにして置いて、再び罪の誘惑に陥る機縁を絶ち、そしていつまでも變らず清い魂を愛したかつたといふのは、其心事や甚だ悲む可しで、それが恐ろしい思ひ違ひでなかつたとしても、此上なく氣の毒な人といふ外なく、斯る事は人間の誰に取つても痛恨の極

みでなければならぬ。

彼がデズデモーナを殺したのは、無論全然復讐觀念や嫉妬がないとは云へぬが、彼は *For nought I did in hate, but all in honour* 「私怨の爲めでなく、すべて正義名分の爲めにした」と辯解して、自分を *an honourable murderer* と云つて居る通り、主として之が殺害の眞の動機の如く思はれる。

デズデモーナ殺害の報に喫驚したイミリヤは、こゝに聲を勵ましてオセローの愚かさや非道を罵り、おのが夫の嘘つきと悪だくみを喝破し、夫の制止を聴かずして、かのハンケチに就いての事實（あれを盗んでくれと幾度も夫にせがまれてゐたまゝデズデモーナがウツカリ落したとき偶然拾つて夫に渡して遣つたのだといふこと）を曝露し、「世界一の貞女」が濡衣を被せられたことを證明して、繰返し／＼その潔白を斷言して止まず、イアーゴウ怒つて背後より彼女を刺殺して、逃げ失せる。

顧ふに、イアーゴウに、如何に人の勝のなかと、*The womb of time* 「時の胎内」(第一幕第三場、イアーゴウの語)にあるものを見抜く力があつても、將た如何に用意周到な、水も漏さぬ作戦計畫を運らしても、彼れ若し倖運に恵まれなかつたなら、今迄あれほどに術策の成功は見ら

れなかつたであらう。原小説に「恰も運命の神も旗手(イアーゴウ)と共謀して不幸なデズデモーナの死を謀ると思はる」とある通り、いかにも悪運の強い男であつた。諸々の事件すべて彼れに好都合で、いつも一々その注文通りに成り行き、間一髪の際どいところに、うまく功を奏して来た。然るに「上手の手にも水が洩る」で、今や一番近い妻の口から其隠謀が発覺せんとは、流石にイアーゴウと雖も、心配もせず豫想もしなかつたことであらう。若しも妻さへ黙つてゐたなら、彼れ或は最後まで智力の勝利者として残り得たであらうに。これぞ「天命の盡き」といふものであらうか。

かくてイミリヤの證言に加ふるに、來合せたキャシオーの告白と、殺されてゐたロデリーゴの懷中から見出された書狀とにより、且つ追捕せられて來つたイアーゴウも略ぼ白狀に及んだので、事實の一切が判明する。

斯くと知つたオセロー——おのれが忠實者と信用した大悪漢に誤まられて、取返へしのつかぬ、とんでもない事を仕出かしたオセロー其人の悔恨と慚愧と懊惱とは如何ばかりであつたらう、推察するに餘りある。彼はキャシオーに自己の過を謝し、イアーゴウに飛びかゝつて刺し殺さんとしたが果さず、されど其れを残念とも思はず *I 'd have thee live; for, in my sense, 'tis hap-*

piness to die.「寧ろ汝を生かして置かう、死ぬること却つて幸と思はれるがゆゑに」といふ、「生き残つて十分に苦しみ悩むやうにしてやるぞ」との意である。やがて靜かに傍の諸人に遺言を傳へつゝ、忽ち自ら双に伏し、デズデモーナの遺骸の上に倒れて息絶えてしまふ。いかにも此人に似合はしい悲壯な最期ではないか。

げにオセローは「いとも不運な粗忽者」彼れ自からも認める如く）であつた。遺言の中に自白する通り、one that loved not wisely but too well「賢くではなく、餘りに深く愛した男」であつた。

性格悲劇では、一個の人物が初から終りまで同一性格を保持してゐるよりも、事に逢ふてその性格の變化する（墮落し若くは訓練せられてゆく）ところに、より多くの興味が見られる。かのブラウニングが説くやうに、人生は魂の試煉せられて發達し行く所であれば、その描かれた劇は一層高尚な劇であるといはねばならぬ。此點に於ても「オセロー」は出色な作品である。

兇惡イアーゴの魂に發達がありやう筈はない。彼は徹頭徹尾奸惡邪智を以て一貫する、濟度すべからざる惡魔である。

その相棒、凡庸のロ德里ーゴも同様である。彼は無理な望を遂げんとして曲者イアーゴの喰物になり、欺かれ誑かされ唆かされ弄ばれた上、サイブラスくんだりまでイアーゴに隨行して、其願使に甘んじたことが原で傷けられても魂の目醒めを感じず、引續き其惡謀の手先として道具として操られ引きづられ、スツカリ財産を搾り盡されても尙ほ悟らず、揚句の果てには生命までも彼れの爲に奪はれてしまふほどの、到底救はれざる痴漢である。

しかしデズデモーナには魂の發展がある。彼女が父と元老院議官達との前に立つた時、彼女は立派な堂々たる力強い婦人になつてゐる。良人に従ふてサイブラスに行いてよりは、又あまりに良人に依頼してゐる如く、甘き風が又その小兒の如き、ひたむきの優しさに彼女を歸らしめたが、その最後の斷末魔に於て、彼女は慥に天國に入りて氣高き星と生れ代るべき事を豫想せしめるほど、すぐれて心美はしくなつてゐる。

イミリヤも變つた。伶俐ながら上品ならぬ、勝氣ではあるが徳操の堅くない、少々の虚言を平氣でいふ平凡普通の彼女（曩に夫の頼みで拾つて渡したハンケチの事をデズデモーナに問はれても、夫を憚かつて、知らぬと詐はつたことがある）、それが、信じ切つた女主人デズデモーナの非業無實の死を見るに於て、その魂に覺醒を見はして來た。二世を契つた良人であつても、その

悪は矯めねばならぬ。正義の爲めには、生命を脅かされても言はねばならぬ。彼女が最後に敢然として言ふ可きを言ひ、悪を發き冤を雪いだのは、殊勝の至り。彼女は實に立派な、天晴れ見上げた婦人として死んだ。

オセローに於ては、尙さうである。氣高い第一第二幕の彼れ、第三幕より稍や毒氣を受け、第四幕にて全く以前の氣高さを示さないオセローとなり、更に第五幕に至つて一層氣高く一層偉大に一層悲劇的な彼れを見る、その面白さ。

事件が起る、未だ以て幸とも不幸ともいへぬ。事件そのものには幸も不幸もない。之を幸にするのも不幸にするのも我々である。我々自身、事件に逢ふ毎に魂の發達を見なくてはならぬ。發達は一生であるべし。「四十前の死よし」とか「生命長ければ恥多し」とかいふは何事ぞや。なぜ恥多い。——發展しないからではないか。老人の役立たないは、魂が發展しないから。人間須らく無限の發展を期すべきである。

讀者は更に「オセロー」に於て、性格悲劇の危機といふものに氣づくであらう。あの素晴らしき、非常にデリケートな諸性格が、あれほどに十分に遺憾なく描き出されてあればこそ、あの悲

劇は成立するなれ。それに一寸でも缺けると、危うく可ましい馬鹿々々しいものにならんとするのである。例せば、篇中の中心人物に就いて見るに、オセローは武人である。實行家である、長く事を思索して逡巡するハムレットの直反對である。己が名譽と良心に訴へて可なる事は斷々乎として行ふ。此性格が明かに描寫せられ、其人物が愈々高潔で、其心胸が益々磊々落落であればある程、イアゴのメフィスト的の兇悪は更に深刻となり、熾烈となる。そしてデズデモナは飽迄無邪氣で、純潔で、罪といふことを全く考へ得ない程でなくてはならぬ。若し此等主要なる性格の一つたりとも描寫が貧しく弱からんか、悲劇は一種の笑劇に終つてしまつたであらう。

沙翁劇中最も崇高なものは「リア王」、最も華麗なのは「アントニーとクレオパトラ」、最も深刻なるは「ハムレット」、最も神速なるは「マクベス」、最も陰鬱なのは「尺に尺」といひ得るとすれば、此の「オセロー」の劇は最も卑近なもの、最も通俗的なものと云つてよい。而かも最も卑近で通俗的であると同時に、一個の藝術品として最も完全なる作——殆ど完璧の稱あるものは、此劇である。世に有りふれたる普通の人情の一方面を捉へて、其の機微を穿ち其の曲折を究むるの技妙を極め、教養の有無に拘はらず何人も容易く之を理解し得るところが、此篇の強味である。

「オセロー」は言ふまでもなく沙翁の四大悲劇の一で、悲劇としては最も精嚴なる批判に耐え得る作であるが、併しながら單なる形式からいへば、所謂「家庭悲劇」domestic tragedyで、即ち世話悲劇である。事はオセロー一家一身に關するのみの事柄である。そして中心問題は、人の感情のうち最も卑しき又最も同情を惹き難い嫉妬である。嫉妬は、譬へばアラビアのお伽噺にある壺中の惡魔のやうなもので、之れを封すれば一小壺に收められて放て人の世に害をするものではないが、誤つてその蓋を取れば忽ち上騰して天を摩するの大惡魔となり、悲惨と破壊を充分に行ひ盡さねば止まない。そして第三者に取つて寧ろ笑ふて捨つべき些事が、當事者に取つては天地を包む黒雲のやうな大惡魔と現するのであるから、たまらない。關係者間では最も痛ましい又最も恐ろしい、最も心を興奮せしむる感情でありながら、局外傍觀の眼には可笑しく馬鹿らしくも見えるのである。そこで斯様な優美でもなく高尚でなき卑近の原料を活用して、高尚な偉大な悲劇を編むためには、作者は最も並はづれた三人を拉し來つた。即ち氣高くて猜疑心の露ほどもない主人公、無邪氣にて全く浮世慣れぬ天の使のやうなデズデモーナ、そして惡魔の大王 Lucifer をそのまま人間界の者としたかのやうな智慧と力とに充ちた邪惡のイアゴーが、極度に力強く書き現はされた。前にも言及したやうに、此等の特徴的人物の特長が斯く此上なきほどに強調されて、

文字通り最上級になつて、——美しきものは最も美しく、醜きものは最も醜惡であつて、初めて劇が單なる平凡なる家庭悲劇の域を脱して、堂々たる大悲劇となり得るのである。そこに不足する所があつては平々凡々に化し凡俗に墮して、殆ど見られないものになる。

そして又この平凡化凡俗化を免かるゝ一手段として、作者は興趣豊かな詩藻(poetry)を篇中處々に織り込んだ。例を擧ぐれば、——

Keep up your bright swords, for the dew will rust them.

「光る劍を鞘に藏めよ、夜露で錆びるぞ」

といふ名文句(第一幕第二場、深夜街上面にてオセロー側の者と追跡者側と双方ともに抜劍して闘はんとする際オセローが從容として兩方の間に割つて入り騒ぎを鎮めるとき(白)から、

A soldier's a man;

A life's but a span;

Why, then, let a soldier drink.

武士も人ぢやよ

人生はホンに束の間よ

オセロー

さあさ飲まうよ軍人^{いくさじん}

(第二幕第一場、イアローがイギリスで覺えた唄なりとて祝宴の席上で唱ふもの)

や、かのいと哀はれげな *Song of Willow* 「柳の歌」(第四幕第三場、愛人に棄てられた或る薄命の乙女が日ごろ愛誦せし古歌なりとてデズデモーナが殺される前に虫の知らせか身につまされたやうに唱ふ十三行の小唄)を経て、大詰の

Soft you; a word or two before you go.

「しばしお待ちを。お別れ申す前に一言二言……」

云々といふオセローの遺言に至るまで、讀者を魅する詩的情味が縦横に流れてゐることを見逃がしてはならぬ。

繰返して曰ふ、劇「オセロー」の如きは、たゞ筋書としては、有り體に申せば、實に平凡な、つまらない一場の痴話譚に過ぎないであらう。それが能く古今の大悲劇となるのは、偏へに蘊をも化して金とする底の靈筆の力と謂はねばなるまい。

十七世紀の終りに *Thomas Rymer* は “*Short View of Shakespeare*” に於て、沙翁劇の臺詞

に兎角多辯饒舌の癖あるを指摘し、殊に「オセロー」を例證として、デズデモーナ上陸の時のキャシオの歓迎の辭(第二幕第一場)の如き、瘋癲病院以外、どこで實際あんな業々しい誇張浮華の文句が用ひられたかと詰り、そして *words* 多くして *actions* を阻止するの多きを難じてゐる。これにも理由はある。しかし *Poetry* と *Rhetoric* とを區別せねばならぬ。一概に修辭上からのみ見て詩蘊を批判せんとするは不可。そしてルネサンス時代の人の精力絶倫の餘り茲に出づる事を想ひ遣らねばならぬ。

少しく餘談に亙るが、「オセロー」の劇には、之を上演する場合に、非常に損な事がある。それは主人公の顔の色である。本来ムーア人は既記の如く、必ずしもアフリカのニグロの如き、顔は漆の如く黒く唇赤くして厚く、髪はちぢれて短く、目と齒とのみ白く光る人種ではないのだが、英國に於ては古くから、斯様なニグロのオセローを舞臺上の傳統として來た。それを破つて鶯色にしたのは例の名優 *Kean* からである。かくの如く鶯色にして大ぶ美化したものの、矢張りムーアとしてのオセローは舞臺の上で非常に醜く、随つて同情を引き難い結果を生ずる。

由來想像は事物を美化するものである。風景などでも、聞きしに優るといふ場合は寧ろ少なく、

耳に聞いて想像してゐた場合が、實際見た場合より遙かに美しく、見て失望するのが常の有様である。殊に舞臺では此事が著しい。ところで、オセローの色の黒い他國人である事は、本篇中屢臺詞の間に聞かされてゐるが、併し讀んで想像した場合には、それらは決して醜惡な姿のオセローを心の眼に描出させないで、却て、千軍萬馬の間を馳驅した勇敢な武人にふさはしいと思はせる。けれどもそれが舞臺の上に眞實出て來るときには、餘程萬般に亘つて氣高さを心掛けぬと、見すばらしい、薄きたならしい將軍を提供して、とんと見物の興味を殺ぐことになる。

これは夙にチャールズ・ラムの論じたところで、彼れの語に據ると「オセローの心を其の色のなかに沈めて了ふ」處れがあるのである。所詮、色の黒いのが此の人の難である。

27. Macbeth.

「マクベス」

〔「世界文學全集」中の著者所譯「沙翁傑作集」及び婦人之友社發行者の「ムレット物語、マクベス物語」参照〕

五幕、二七場、總行數二〇八五。

スコットランド王ダンカン(Duncan)の股肱の二將軍マクベスとバンコー(Banquo)とは、敵國軍の後援を得て頑強に敵對せし叛軍を見事に打破つて、凱旋の歸路、三人の魔女(witches)に遭ふ。魔女等はマクベスをグラームスの領主(Thane of Glamis)、コウドア(Cawdor)の領主及びスコットランドの未來の王として呼びかける(マクベスは現にグラームスの領主といふだけであるのに)。やがて又バンコーに、其の子が將來王位に即くことを豫言する。魔女の言葉がまだ耳から消え去らない中に、王からの使者が來て、戦功により王の名によつてマクベスにコウドアの領主の稱號を授ける。魔女の約束がこれで二つだけ實現されたので、マクベスは更に第三の約束——王位を獲たいと望む。彼は殘忍冷刻な妻に此野心を打明ける。二人の心は一致して、王を亡き者にせんと陰謀を企てる。一方、王は斯かるべしとは夢にも想はず、マクベスに重ねて榮譽を與へ